アニメ 魔法少女にあこがれて

I admire magical girls, and...

公式ファンブック

アニメ「魔法少女にあこがれて」の
魅力をたっぷり♥詰め込んだ

《超あこがれVer.》

完全無修正版

つまり全部見せます♥♥♥

豪華キャストインタビュー

和泉風花（柊うてな/マジアベーゼ役）✦ **古賀葵**（阿良河キウィ/レオパルト役）✦ **杉浦しおり**（杜乃こりす/ネロアリス役）
前田佳織里（花菱はるか/マジアマゼンタ役）✦ **風間万裕子**（水神小夜/マジアアズール役）✦ **池田海咲**（天川薫子/マジアサルファ役）
福圓美里（ヴェナリータ役）

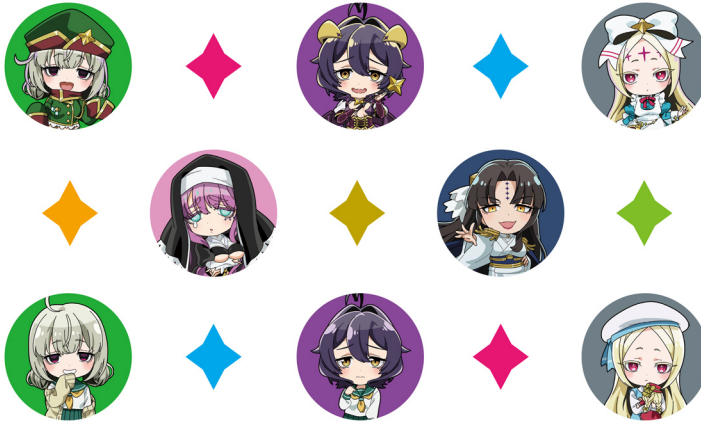
ほかにもスタッフインタビュー＆スペシャル企画がてんこ盛りだよ！

MdN
books.mdn.co.jp
エムディエヌコーポレーション

アニメ

魔法少女にあこがれて公式ファンブック

I admire magical girls, and...



アニメ「魔法少女にあこがれて」公式ファンブック

Contents

007 Chapter 1 キャラクター紹介

026 うてなたちの幼少期

027 Chapter 2 フィルムストーリー

054 OP&EDギャラリー

058 『まほあこ』世界の魔法少女たち

059 Chapter 3 キャストインタビュー

和泉風花（柊うてな／マジアベーゼ役）

古賀 葵（阿良河キウィ／レオパルト役）

杉浦しおり（杜乃こりす／ネロアリス役）

福圓美里（ヴェナリータ役）

前田佳織里（花菱はるか／マジアマゼンタ役）

風間万裕子（水神小夜／マジアアズール役）

池田海咲（天川薫子／マジアサルファ役）

074 キャストの皆さんが選ぶ！
《超あこがれ Ver.》名シーン

077 Chapter 4 設定資料

088 第12話 おもちゃ店の設定

089 Chapter 5 スタッフインタビュー

鈴木理人／大槻敦史（監督）

木村 暢（シリーズ構成）

大滝那佳（キャラクターデザイン・総作画監督）

高梨康治／鈴木暁也／ヨハネス・ニルソン（音楽）

098 うてなの成長比較 / 表情コレクション

099 Chapter 6 イラストギャラリー

✦ 表紙イラスト ✦
作　画／大滝那佳
彩　色／小鹿絵里
彩色検査／上村修司
特殊効果／石橋啓

✦ 原作 ✦
小野中彰大「魔法少女にあこがれて」
（連載「ストーリアダッシュ」竹書房刊）

✦ メインスタッフ ✦
監督／鈴木理人・大槻敦史　シリーズ構成・脚本／木村暢　キャラクターデザイン／大滝那佳（旭プロダクション）　美術監督／平良亜梨沙　色彩設計／上村修司　撮影監督／鰐井亮　音響監督／本山哲　音響効果／櫻井陽子　音響制作／ダックスプロダクション　音楽／高梨康治、鈴木暁也、ヨハネス・ニルソン　音楽制作／ランティスアニメーション制作／旭プロダクション
製作／魔法少女にあこがれて製作委員会

✦ メインキャスト ✦
柊うてな＆マジアベーゼ／和泉風花　阿良河キウィ＆レオパルト／古賀葵　杜乃こりす＆ネロアリス／杉浦しおり　花菱はるか＆マジアマゼンタ／前田佳織里　水神小夜＆マジアアズール／風間万裕子　天川薫子＆マジアサルファ／池田海咲　阿古屋真珠＆ロコムジカ／相坂優歌　姉母ネモ＆ルベルブルーメ／津田美波　ロードエノルメ／日笠陽子　シスタギガント／井上喜久子　ヴェナリータ／福圓美里　ヴァーツ／阿澄佳奈

Chapter 1

キャラクター紹介

個性豊かなエノルミータメンバーや、
トレスマジアの面々ほか
物語で活躍した登場人物を一挙掲載！

うてな
表情集

うてな裸設定

柊（ひいらぎ）うてな マジアベーゼ

声／和泉風花

魔法少女オタクの女の子。悪の組織・エノルミータのマスコットであるヴェナリータに無理やり女幹部にさせられ、マジアベーゼとして魔法少女たちと戦っていくことになる。当初は脅されて渋々従っていたが、戦いのなかで「かわいいものをめちゃくちゃにしたい」という欲望を自覚し、積極的にトレスマジアたちを責め立てていく。ロードエノルメを倒したあとはエノルミータの総帥となり、自分の欲望を満たすために全力で悪役ムーブをすることを決意した。普段はおどおどしているが、変身するとサディスティックさが全面に出る。

うてなのファッション

控えめで大人しいうてならしさを感じる、落ち着いた装いが多い。

第３話私服１　第２話私服　下着　パジャマ

第13話水着　第13話私服　第12話私服２　第12話私服１　第５話私服　第３話私服２

うてなのあこがれ

魔法少女が大好き

部屋のクローゼットに大量の魔法少女フィギュアを箱入りで保存していたり、トレスマジアの手提げバッグを愛用したりしているうてな。そのあこがれの原点は幼いころに観たアニメ「魔法少女ミラクル☆みみる」である。

マジアベーゼ変身シーン

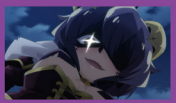
✦Utena Hiiragi ✦Magia Baiser

マジアベーゼ
表情集

マジアベーゼ裸設定

マジアベーゼ衣装スカートなし　マジアベーゼ衣装

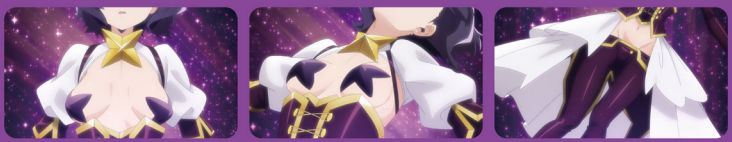
マジアベーゼの能力



鞭て魔物を生み出す

マジアベーゼの武器は「支配の鞭（フルスタ・ドミネイト）」。魔法少女を叩くだけでなく、物を魔物に変化させる能力も持っている。興奮してテンションが高まると、より強い力を発揮できるのだ。

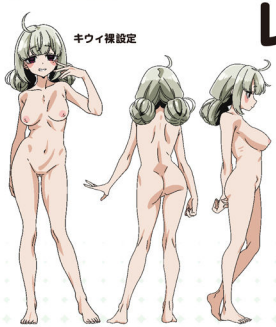
マジアベーゼ第二形態　禍々しい見た目に加えて、顔に刻まれたいくつもの星が印象的だ。



キウィ
表情集

阿良河キウィ レオパルト

キウィ裸設定

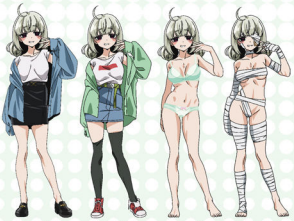


声／古賀 葵

承認欲求を満たすためにSNSをやっていたダウナー系女子。自分よりもちやほやされている魔法少女にイライラし、魔法少女を倒すためにエノルミータに入った。負けても笑っているうてなのことが気に入らず戦いをふっかけたが、敗北したときに「今のあなたは世界一かわいい」と言われて恋に落ちた。うてなと一緒にいるために転校したり、ホテルに誘ったりするなど積極的にアピールしている。強さを表す星の数は3だが、普段は力を隠して星0と偽っている。力を開放した際は強敵であるシスタギガントにひとりで勝利を収めた。

キウィのファッション

性格を反映したラフな格好が多く、上着を着崩すクセがありそうだ。


第3話私服2　第3話私服1　下着　包帯

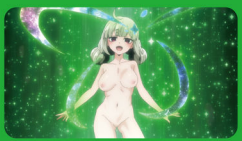
第13話水着　第13話私服　第12話私服3　第12話私服2　第12話私服1　第10話私服

キウィのあこがれ

大好きなうてなちゃん

2人でのお出かけをデートと言い、隙あらばうてなをホテルに誘うキウィ。普段の日常生活でもうてなにベタベタくっついている。シスタギガント戦でも、うてなのためなら命をも賭けることができるという覚悟を見せつけていた。

レオパルト変身シーン



✦Kiwi Araga ✦Leoparde

レオパルト表情集

レオパルト裸設定

レオパルト衣装

レオパルト本気モード表情集

レオパルトの能力

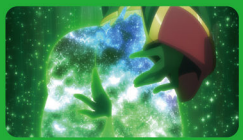
レオパルトの武器

ミリタリー系の武器

ダブルデリンジャーを構えながら多種多様なミリタリー系の武器を召喚し、相手を攻撃するレオパルト。大きさも自在に変えられるらしく、巨大な銃火器を大量に出すことも可能。閃光手榴弾で相手を翻弄することもできる。

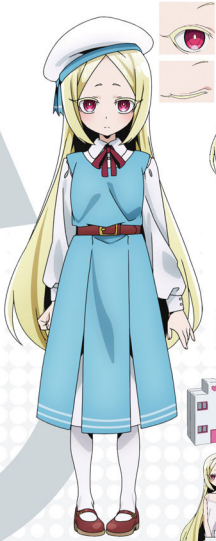
レオパルト本気モード

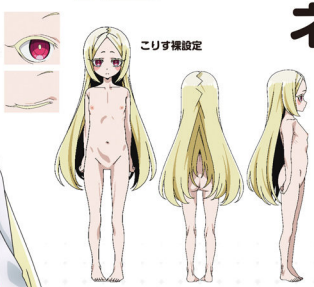
獣じみた見た目に変化し、通常時と比べて火力が格段に上がっている。



こりす
表情集

杜乃(もりの)こりす
ネロアリス





こりす裸設定

声／杉浦しおり

お人形遊びやごっこ遊びが大好きな女の子。無口なタイプで、「んっ」の一言以外ほとんど発さない。路地裏でお絵かきをしていたときにヴェナリータを見つけ、エノルミータに加入した。他のエノルミータの面々がおどろくほど強大な力を秘めているが、眠くなると魔法が解除されてしまう。当初はうてなやキウィとの間に壁があったが、うてながお気に入りの人形を修繕してくれたことをきっかけに心を開く。変化のとぼしかった表情も、うてなたちと過ごすなかで感激やおどろき、呆れといったさまざまな感情が表れるようになった。

こりすのドールハウス
屋敷や病院などさまざまなドールハウスを所持している。

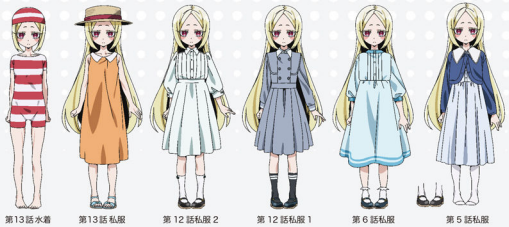
こりすのファッション
こりすの持つお人形さんめいた雰囲気が際立つ上品な服装が多い。

下着

こりすのあこがれ

楽しいおもちゃ遊び

母親が仕事で忙しく、夕飯もひとりで食べることが多いこりす。そんな彼女にとっていつでも遊んでくれる相手がおもちゃたちである。昔母親から買ってもらった赤い人形も含めて、すべてのおもちゃが彼女の友達だ。



第13話 水着　第13話 私服　第 12 話私服 2　第 12 話私服 1　第 6 話私服　第 5 話私服

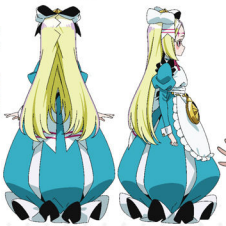
ネロアリス変身シーン

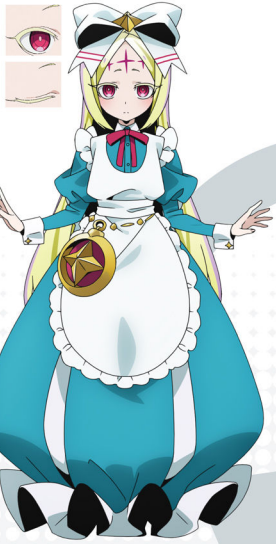
✦Korisu Morino
✦Nero Alice

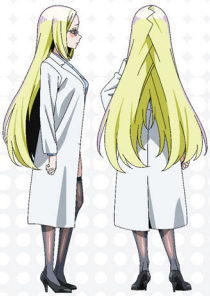
ネロアリス
表情集

ネロアリス裸設定

ネロアリス衣装

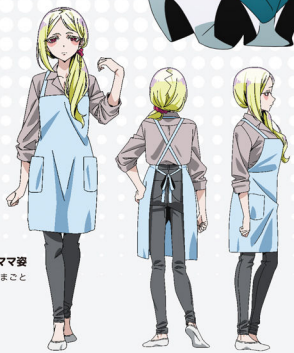






ネロアリスドクター

第５話でうてなの風邪を治したときの姿。大人びた妖艶さがある。



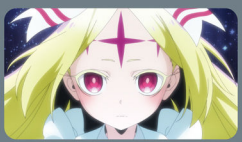
ネロアリスママ姿

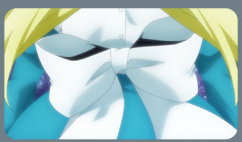
第６話のおままごとで披露した姿。

ネロアリスの能力

おもちゃを自在に操る

ぬいぐるみを巨大化させて操ったり、相手をドールハウスに閉じ込めてシチュエーションに沿った「おままごと」を強制させることができる。お医者さんごっこで風邪を治せるなど回復系の力も備えている。





はるか表情集

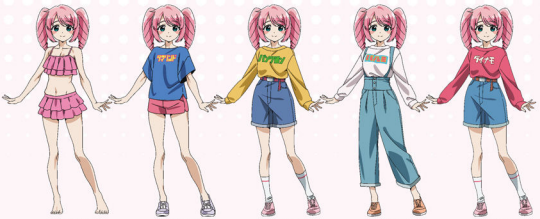
花菱はるか（はなびし）マジアマゼンタ

はるか裸設定

はるかのファッション

謎の文字のTシャツから、はるかの独特のセンスがうかがえる。

下着



第13話水着　第13話私服　第12話私服　第6話私服　第2話私服

声／前田佳織里

うてなのクラスメイトであり、魔法少女トレスマジアのひとり。コミュニケーション能力が高く、誰にでも分け隔てなく接する優しさがある。うてながクラスのなかで孤立していることに気づいたときも積極的に声をかけにいった。妹が３人いるため面倒見もよく、ひとりで遊んでいたこりすに声をかけておままごとをした。純粋な心の持ち主で、ベーゼに恥ずかしい目にあわされても決してへこたれない心の強さも備えている。ただしその優しさゆえにネロアリスのおままごとに付き合い、自ら恥ずかしい姿を見せてしまうこともあった。

はるかのあこがれ

クラスみんなと友達

うてなやこりすだけでなく、過去には転校してきた直後の薫子にも声をかけて仲良くなっている。どんな相手であっても物怖じせず話しかけて友達になろうとしており、薫子の「おかん」呼びにも納得できる懐の深さがある。

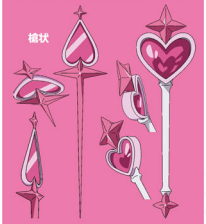
マジアマゼンタ変身シーン

✦ Haruka Hanabishi
✦ Magia Magenta

マジアマゼンタ
表情集

マジアマゼンタの能力

杖状



杖状のステッキで攻撃！

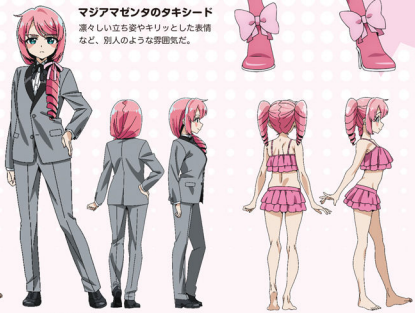
マゼンタはステッキを杖状に変化させて戦う白兵戦が得意。技名はマゼンタスピアー。シンプルな力だが、魔力の高まったベーゼと渡り合う程のパワーを持つ。どんな恥ずかしい状態でも戦える意志のもとで振るわれる槍は強力。

マジアマゼンタ衣装

マジアマゼンタ裸設定

マジアマゼンタのタキシード

凛々しい立ち姿やキリッとした表情など、別人のような雰囲気だ。



第５話タキシード

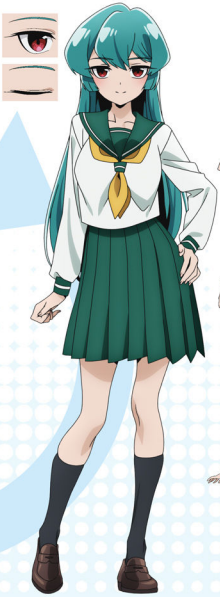
小夜
表情集

水神小夜
マジアアズール

みなかみさよ

声／風間万裕子

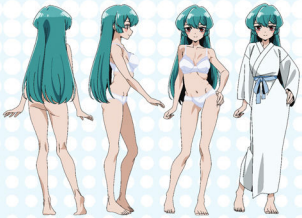
うてなやはるか、薫子と同じクラス。実家が神社で下校後は巫女として手伝いをしている。変身後はマジアアズールとして活動していたが、ベーゼから受けたSMプレイじみた攻撃によってマゾヒストの一面を引き出されて、無意識のうちに責められることを期待するようになってしまう。激しい責めに耐えきれず屈服し、闇堕ちまでしかけるが、ベーゼに魔法少女としての矜持を諭されて深く反省。はるかと薫子に修行に付き合ってもらうなかで愛の力に目覚めて、真化（ラ・ヴェリタ）に到達し、新フォーム・薄氷巫女に変身できた。



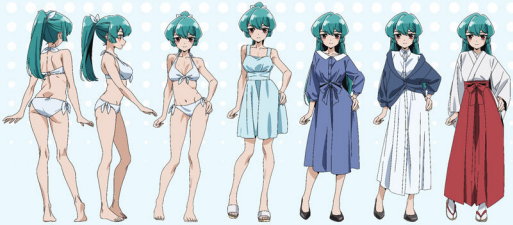
小夜裸設定

小夜のファッション

寝巻きは神社の娘らしい和装だが私服はシックで清楚な印象。

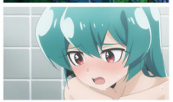


下着　寝間着



第13話水着　第13話私服　第7話私服　第2話私服　巫女服

小夜のあこがれ



戦いて目覚めたM心

はるかが裸で倒れていた時にどんなことをされたのか興味津々だったり、滝に打たれて快感を覚えたり、戦いを重ねることに強くなるM心。最終的には責められることを楽しみながらも力強く戦うことができるようになった。

マジアアズール薄氷巫女変身シーン

✦Sayo Minakami ✦Magia Azure

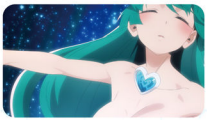
マジアアズール
表情集

マジアアズールの能力

氷の剣を生み出し攻撃

アズールは氷を自在に操ることで剣を作り出したり、氷の檻を射出したりできる。また、周囲一体を氷で包んで隔離したり相手の足を凍らせて足止めしたりするなど、幅広い使い方も可能で汎用性が高い。

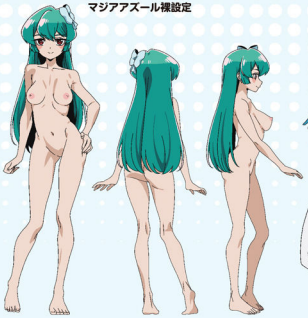
マジアアズール衣装

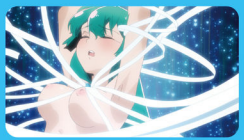


マジアアズール薄氷巫女（うすらいみこ）

大胆にカットされた袴や長尺の袖は、雪めいた涼やかさを感じる。

マジアアズール裸設定



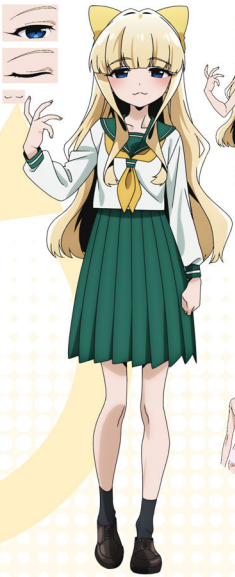


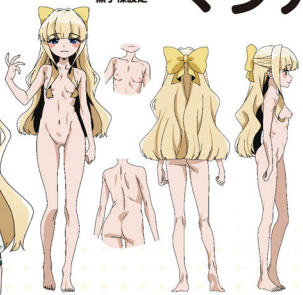
薫子
表情集

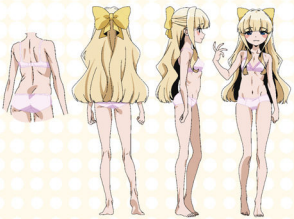
天川薫子（てんかわかおるこ）
マジアサルファ

声／池田海咲

トレスマジアのマジアサルファとして、マゼンタ、アズールとともに活動しており、２人を引っ張る場面も多い。京都弁で話し、一見するとおしとやかだがケンカっ早いところがある。転校した直後の孤立していた時期にはるかに世話を焼かれ、情にほだされて一緒に魔法少女をやることを決めた。子供たちを怖がらせないためにシールドを展開する戦い方を主体にしているが、子供の目線がないところでは巨大な手甲で相手を殴り飛ばす戦い方をとる。キウィとは変身前も変身後も犬猿の仲であり、顔を合わせるとすぐにロゲンカに発展する。




薫子裸設定


薫子のファッション

パンクな印象を受ける私服に薫子のアクティブさが表れている。

下着

第13話 水着

第 13 話 私服

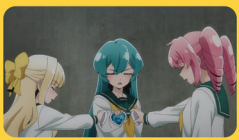
第 2 話 私服

薫子の憧れ

「おかん」のようなはるか

はるかのことを「能天気でおせっかい焼きで勝手なことばかり言う」と表現しながらも、彼女の前向きさに助けられてきたことを認めている薫子。言葉にはしないだけで、心の中ではるかのことを大切に思っている。

マジアサルファ変身シーン



✦ Kaoruko Tenkawa
✦ Magia Sulfur

マジアサルファ
表情集

マジアサルファの能力

手甲を使った肉弾戦

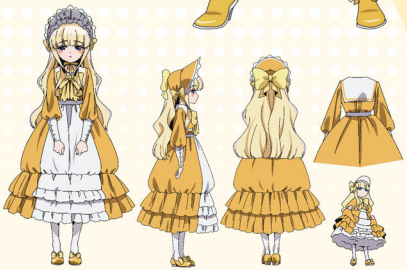
サルファの能力は魔力で手甲のついた巨大な腕を作り出し、激しいラッシュや一撃が重たいストレートパンチを繰り出すとても攻撃的な力だ。ただし、強力な威力の半面、魔力と体力の消耗が激しいという弱点を持っている。

マジアサルファ衣装

マジアサルファのロリータ服

普段の活発な雰囲気から一転、深窓の令嬢めいたかわいさがある。

マジアサルファ裸設定



第５話ロリータ服

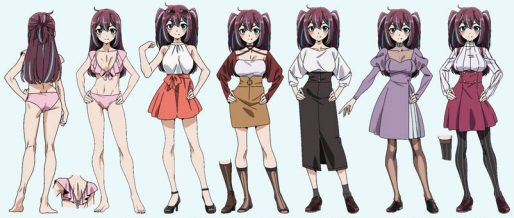
阿古屋真珠（あこやまたま）
ロコムジカ

声／相坂優歌

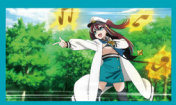
エノルミータ初期メンバーのひとり。幼いころからアイドルを目指しており、ロードエノルメが支配する世界でアイドルとして君臨するためロード団に加入した。自分では歌が上手いと思い込んでいるが、歌唱力はキウィに「絶妙にイジりにくい程度に下手」と評されている。ただし羞恥心を感じているときは上手く歌えるということが判明。歌い方に気づかせてくれたベーゼに負けを認めて彼女の仲間になった。幼なじみのネモとすれ違い、ケンカすることも多かったが、ベーゼの計らいによって互いの愛を確かめ合ったことで絆が深まった。

真珠のファッション

アイドルを目指しているだけあって、おしゃれ感が出ている。



ロコムジカの能力



歌声を衝撃波に！

ロコムジカの能力は、魔力によって歌声を音符状の衝撃波に変換する音波攻撃だ。大ぶりな攻撃という弱点こそあるものの、範囲・威力ともに強力。必殺技の名前は音楽用語がモチーフの「ヴォワ・フォルテ」。

姉母ネモ
ルベルブルーメ

幼なじみの真珠とともにロード団に加入した、エノルミータ初期メンバーのひとり。ロコムジカと並んで高い実力を持つ。影を利用した小回りのきく戦い方を得意としており、威力は大きいが隙も多いロコムジカをサポートし、数々の魔法少女を倒してきた。表には出さないが心のなかでは真珠を支えたいと思っている。よかれと思い、人々を操って強制的にロコムジカのライブの観客に仕立て上げていた。ベーゼに敗北し仲間となったあと、真珠と愛し合ってからは態度も少し柔らかくなり、彼女と２人で総帥となったベーゼを支えている。

声／津田美波

ルベルブルーメ裸設定

ネモ裸設定

ルベルブルーメ
表情集

ネモ
表情集

ルベルブルーメの能力

影を使って相手を意のままに

影に潜み、相手の動きを封じたり、操ったりする「影繰り」の能力。クナイなどを飛ばすことでその影に潜み、相手の影に乗り移ることも可能。攻撃力は低く影のない場所では使えない弱点もあるが、器用に戦える。

ネモのファッション

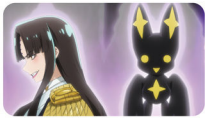
全体的に露出は少なめ。私服のポケットが多く実用性を感じる。

第 13 話水着　第 13 話私服　第 12 話私服 3　第 12 話私服 2　第 12 話私服 1　夏服

ロードエノルメ表情集

ロードエノルメ

声／日笠陽子

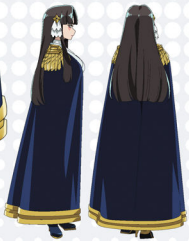


ロード団のリーダーにして世界征服を企む女性。エノルミータの強さの指標となる星を４つ持ち、圧倒的な力を誇っていたが、ベーゼにお仕置きされて敗北した。のちにロードエノルメの力はヴェナリータによって貸し与えられたものであると判明。星ひとつまでカが落ちたあとヴェナリータに用済みと宣告され、処分された。

ロードエノルメ裸設定

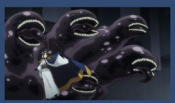
ロードエノルメ衣装マントなし

ロードエノルメ衣装



子供姿　服に着られている感のある姿。普段とのギャップが魅力的だ。

ロードエノルメの能力



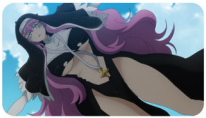
無尽蔵の魔力で戦う

底知れない魔力から生み出される魔物は無限に増え続け、物量で敵を制圧する。ロードエノルメを倒さない限り、消えることはないと言われていたが、真化を会得したアズールによって一掃されてしまった。

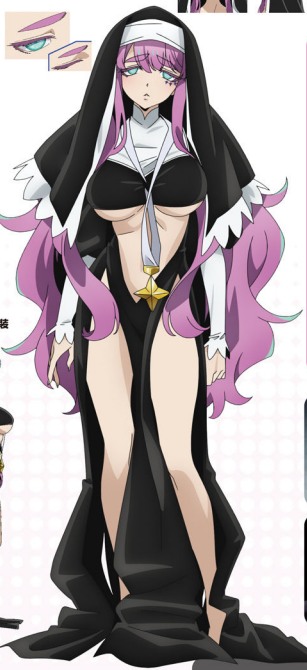
シスタギガント

シスタギガント表情集

声／井上喜久子



ロード団のひとりで、ロードエノルメの言葉に対して絶対服従。おっとりした口調だが、ひとたび命じられれば容赦なく相手を叩きつぶす。巨体ゆえのパワーに加えて嘘泣きをする抜け目のなさも備えていたが、レオパルトの策略にハマって敗北。のちにヴェナリータの命令でロードエノルメに従っていたことが判明した。



シスタギガントの能力

巨大化て相手を圧倒

ビルほどもある巨体に変化可能な能力。並大抵の攻撃ではびくともせず、圧倒的な質量で相手を押しつぶすことができる。また、単に巨大化するだけでなくヴェナリータの背に隠れられるほど小さくなることも可能なようだ。

シスタギガント衣装

シスタギガント裸設定

ロード団とは？

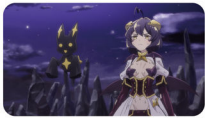
エノルミータ初期構成員て結成された世界征服グループ

ロードエノルメ、シスタギガント、ロコムジカ、ルベルブルーメによって結成された冷酷無比なグループ。魔法少女狩りと称して数々の魔法少女たちを再起不能にしてきたが、そのあり方はベーゼの逆鱗に触れてしまった。

▲たった４人で多くの魔法少女を倒してきた実力は本物だ。

ヴェナリータ

声／福圓美里

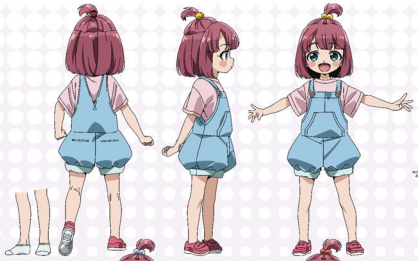


悪の組織エノルミータのマスコット的存在。悪の組織の素質を持つ者を感じ取ることができる。マジアベーゼたちを強くするためにロードエノルメを利用していたようだが、目的は不明。現在の状況は計画通りのようだ。

花菱なつな

声／小針彩希

第11話で登場したはるかの妹たち。3つ子であり、3人ともおもちゃが大好きでキウィと意気投合していた。



花菱みふゆ

声／ルゥティン

花菱あきほ

声／森山由梨佳

うてなの母

声／川上 綾

第3話ほかで登場。うてなに追試で合格してもらうため、魔法少女グッズを捨てると脅し彼女を奮起させた。

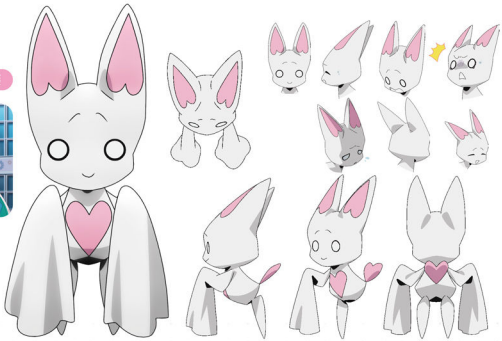
市民たち

トレスマジアが戦っている最中に見学したり、写真を撮ったり、魔法少女たちのファンが多いようだ。

ヴァーツ

声／阿澄佳奈

魔法少女のマスコット的存在。トレスマジア以外にもさまざまな魔法少女たちのマネジメントをしており、広報戦略に力を入れている。ヴェナリータに悪の組織をやめるよう訴えかけるなど因縁がありそうだが詳細は不明。



少女たち

第７話で登場。魔法少女展の入場時、あとから来たひとりがうてなの前に横入りして小夜から注意された。

先生

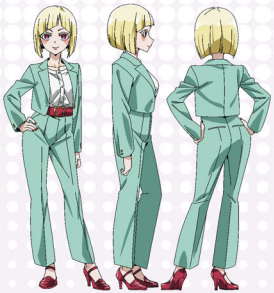
声／長谷川 暖

うてなのクラスの担任。第２話でボーッとしていたうてなに注意を促すなど、教室の様子をよく見ている。

こりすの母

声／ルゥティン

第５話で登場。仕事で家を空けがちだが、こりすの些細な変化に気づくなど娘への愛情の深さを感じる。



生徒たち

教室内でたびたび登場するうてなのクラスメイトたち。はるかや小夜と仲よく話している光景が見られた。

うてなの幼少期

「魔法少女ミラクル☆みみる」を見ていた幼少期のうてな。みみるがやられる姿にかすかな興奮を覚えながらも、彼女があきらめず何度でも立ち上がる姿に感動していた。

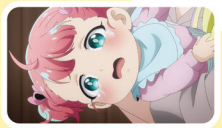
column 1

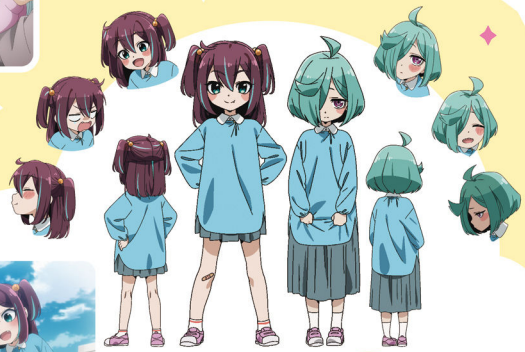
うてなたちの幼少期

作中で見ることができ、うてなたちの幼少期の姿。
ここでは設定画を交えながら、
彼女たちのかわいらしい姿を紹介する。

はるかの赤ちゃん姿

ネロアリスの能力により、赤ちゃんにされてしまったはるか。当初は姿だけだったが、次第に精神までも赤ちゃんになり、ママ（ネロアリス）に懐きながらお漏らしをしてしまう。





真珠＆ネモの幼少期

幼いころのネモは、ほかの子たちの輪に入れない孤独な少女だった。そんな寂しそうなネモに真珠が声をかけたことがきっかけで、２人は幼なじみの親友になっていった。

Chapter 2

フィルムストーリー

魔法少女にあこがれていた柊うてなが
葛藤し成長していく物語を
数々のエピソードとともにプレイバック！

Episode 01

悪の女幹部、誕生!?

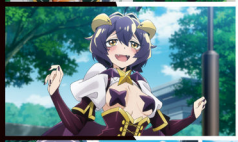
脚本／木村暢　絵コンテ・演出／鈴木理人　作画監督／鎌口香佳、山崎理璃花、服部恵知、青木真理子、重松佐和子、島崎克実、大野勉、ラプラス・アニメーション、青松アニメーション制作有限会社

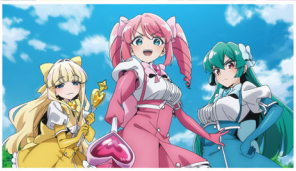
ごく普通の日常を過ごしていた柊うてな。魔法少女トレスマジアが大好きであこがれており、そんな彼女の前に「してみるかい？変身」と、ヴェナリータが現れた。「わたしが魔法少女になれるなんて！」と喜んだものの、変身後の姿は悪の組織エノルミータの幹部だった。

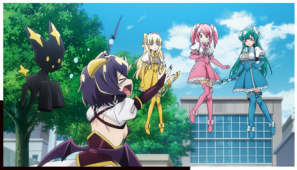
戸惑いつつも、トレスマジアと戦うことになり、支配の鞭（フルスタ・ドミネイト）を手に魔物を生み出し、魔法少女を苦しめているうちに込み上げてくる“ヘンな気持ち”。日常が一変し、夢か現実か自問自答する中で、「夢ならいっそ楽しんじゃおっかな」とサディストとしての本性を開眼させていく……。

変身後の姿を恥ずかしがり、「こんなことやめたい」と思う気持ちが湧く一方で、うてなは魔法少女たちの悶える顔に興奮し、葛藤の中で新たな悦びを感じるのだった。

わたしの手で……
魔法少女が悶えている……







監督CHECK

第一話
キャラの表情

第一話は作品の世界観を伝えなければいけなかったので、僕が絵コンテを担当しました。悪の組織と魔法少女の対決や、うてなの周囲に流されてしまう性格をご覧いただくため、作品のテーマ性を打ち出しています。こだわった部分はキャラの表情です。その豊かさを第一話から出していこうと制作しました。（鈴木）

本日のプレイ内容

鞭打ち

変身したうてなは、トレスマジアとの初戦で支配の鞭（フルスタ・ドミネイト）を使ってお尻責め。悶える魔法少女たちを見て、とろけた表情に。禁断の愉悦を覚えた。

本日のプレイ内容

くすぐり

トレスマジアとの２戦目は、足の裏、お腹、腋のくすぐり責め。前日のお尻責めによるダメージを抱えた魔法少女たちの動きを封じて、敏感な部分をコチョコチョコチョ。

絶頂コレクション

マネキンに動きを封じられてくすぐられるマゼンタ

触手で拘束され、お尻を責められ身悶えるサルファ

Episode 02

その名は、マジアベーゼ

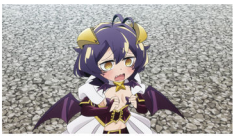
脚本／山田靖智　絵コンテ／大槻敦史　演出／神谷マキ
作画監督／久保山陽子、島崎克実、はっとりますみ、重松佐和子、富山大輔、育松アニメーション制作有限会社、十文 字 Shanghai Xuanzhou Culture Media、Jumondou Wuxi、Studio CL

うてなが冷静さを取り戻し、神社でお祈りした帰り道。参道脇に落ちていたのは、エッチな雑誌だった。先日のトレスマジアへの責めがSMプレイであることを知り、戸惑いつつも、抑えきれない欲望に呼応して魔力が溢れ、「トランスマジア」と唱えてないのに変身！

自らの内に眠っていたS心が目覚め、覚えたプレイを魔法少女たちに試していくうてな。悪の組織の幹部としての活動が増えてきたある日、ヴェナリータから名前を決めるようにと言われた。自分で意見を言わないと「怪人サド女」になってしまう!?

そんな時、サルファが出現し一戦交えることに。序盤は楽しそうにロウソク責めをしていたものの、激しい反撃をくらい、負け戦に。彼女に名前を聞かれ、うてなの口から出た名前は「マジアベーゼ」だった。

ベーゼ……マジアベーゼ
あなたたちの、悪となる者



監督CHECK

第二話 トレスマジアの掘り下げ

第二話は悪と正義の対立構造を際立たせるため、トレスマジア側の掘り下げを行いました。アズールやサルファの二面性を見せることを意識し、彼女たちのギャップを強調することで、各キャラクターにいろいろな面があるんだよと提示しています。この話数くらいまでは、まだエッチなシーンは、少し抑え気味だったかも。（大槻）

本日のプレイ内容

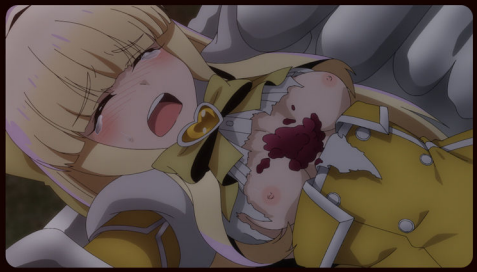
夢のなかで

魔法少女たちとの戦いは、うてなの中に眠るサディスティックな気質を目覚めさせた。そして、授業中に妄想するほどにトレスマジアの悶絶する姿の虜となった。

本日のプレイ内容

目隠し

拘束具によって視界を奪われ、気配を感じることもできなくなったマジアアズール。ベーゼからの蹂躙により、彼女もまたM心に目覚めつつあった。



本日のプレイ内容

ロウソク責め

ロウソク責めを受けるサルファ。序盤は防戦一方で喘いでいたが、実は肉弾戦を得意としており、強烈なカウンターを喰らわせ、ベーゼを悦ばせた。

絶頂コレクション

ベーゼの責めによって放心状態のアズール

ロウソク責めで身悶えるサルファ

Episode 03

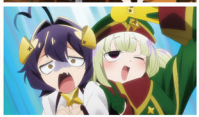
爆裂娘レオパルト

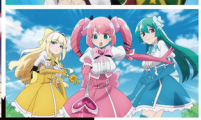
脚本／木村暢　絵コンテ・演出／森あおい　作画監督／久保山陽子、富山大輔、大野勉、森あおい、山﨑理瑛花

ヴェナリータによって連れて行かれたエノルミータの本拠地ナハトベース。うてなを待ち構えていたのは、阿良河キウィだった。「よろよろ～♪」と、手を握ってきて好意的なのかと思いきや、いきなり爆弾を仕掛けてきたキウィ。そしてサルファ戦の失態を責めながら、なぜトレスマジアと戦うのかと問うてきた。それに対するうてなの「かわいいからめちゃくちゃにしたいだけ」というＳ心たっぷりの告白を聞いたキウィは、彼女の虜に！

一緒に食事をしたり、買い物をするほどに仲良くなったニ人。そんな彼女たちの前に、トレスマジアの３人が現れた。そしてベーゼがレオパルトのピンチを救ったことにより、二人の仲はさらに急接近!?　感謝を述べつつ、キウィはうてなに「好き好きちゅーしよ」「一緒にホテル行こ」と好意を示すのだった。

うてなちゃん好き好き～！
ちゅーしてホテル行こ～！





監督CHECK

第三話
キウィ初登場

キウィの初登場回ということでここも力を入れた回でしたが、とてもかわいく表現できました。（大規）／演出・絵コンテの森あおいさんが、キウィを魅力的に描いてくださいました。レオパルトとしての強さだけでなく、キュートな日常シーンまでご覧いただける、とってもおもしろい回になりました。（鈴木）

本日のプレイ内容

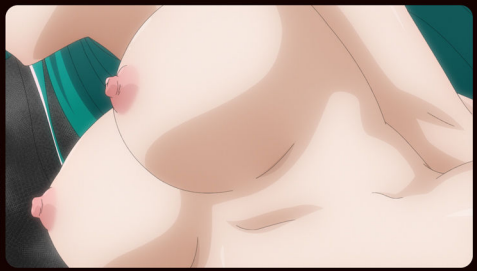
形勢逆転電撃責め

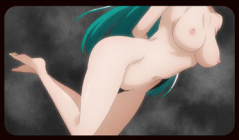
二人の出会いは、爆発的だった。余裕の表情で責めるレオパルトだったが、一瞬の隙を突かれ形勢逆転。ベーゼの責めとＳ心たっぷりの甘い言葉で完全に堕ちてしまった。

本日のプレイ内容

拘束からのピンタ

Ｍ心を自覚しつつあるアズールは、ベーゼに責められまくったことでさらに開発されていく。そして触手で縛られて強調されたおっぱいは、ベーゼのＳ心を大いにくすぐった。





絶頂コレクション

ベーゼの責めにより放心状態のレオパルト

おっぱいとＭ心を弄ばれるアズール

Episode 04

最強アイドル♡トレスマジア

脚本／山田靖智　絵コンテ・演出／天城こう太　作画監督／松下清志、雨伸一郎、藤井文乃、はっとりますみ、宍戸久美子、青木真理子、ラプラス・アニメーション、Ritera Pictures、十文字 Shanghai Xuanzhou Culture Media

神社でSM雑誌を拾ってから、勉強が手につかずテストの点数がパッとしないうてな。これ以上成績が下がると、お母さんからお気に入りの魔法少女グッズを捨てられてしまう。そんな折、マゼンタが「ばっちこいマジアベーゼ」と、公園でベーゼを待っていた。そして、戦いの中でベーゼは魔法少女への熱い想いを改めて自覚。後日、キウィに勉強を教えてもらい、赤点を免れたうてなだったが、まだまだ困難は続くのだった。

また別の日、ヴァーツの付き添いによりトレスマジアは広報活動の一環として、雑誌の取材を受けていた。しかし、結界が壊れてしまい、ベーゼとレオパルトに見つかってしまう。激戦を繰り広げ、満身創痍の面々。それぞれが全力を尽くすや、やっぱりアズールは触手によって拘束され、赤面してしまうのだった。

あの子って……本当にあたしたちを倒すために戦ってるのかな？

監督CHECK

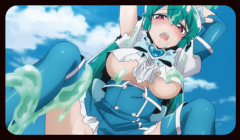
第四話
マゼンタの体にシール

第二話でアズール、サルファの魅力を紹介したので、この第四話はマゼンタです。原作の順番を入れ替えました。体にシールを貼るというエピソードはパンチが効いていて印象に残っています。（鈴木）／はるかは、ほかの子と違って裏表のない女の子です。そんな子が恥ずかしがっている姿がかわいいですよね。（大槻）

本日のプレイ内容

スライム責め

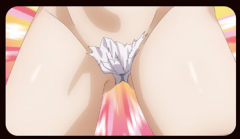
ベーゼを恍惚の表情にさせたのは、ぬるぬるのスライム責め。トレスマジアの３人が必死に抵抗する中、苦悶する表情をたっぷりと堪能したベーゼは闇に消えて行くのだった。

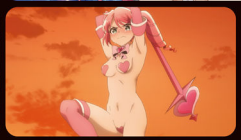


本日のプレイ内容

衣装破壊 羞恥プレイ

服が切り刻まれるなら、服など不要。大事なところはシールで守る！　そんな発想で戦いに挑んできたマゼンタだったが、それは単にベーゼを悦ばせただけだった。





絶頂コレクション

ほぼ全裸のマゼンタに鼻血ブーのベーゼ

ほぼ全裸であることに気づき赤面するマゼンタ

Episode 05

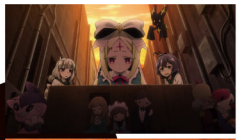
不思議の国のネロアリス

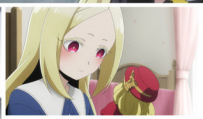
脚本／木村暢　絵コンテ／中山岳洋　演出／山内東生雄
作画監督／重松佐和子、島崎克実、大野勉、藤井文乃、桜井木ノ実

ヴェナリータに呼びだされ、ナハトベースへ向かったうてなとキウィ。二人の前に現れたのは、無口な少女・杜乃こりすだった。エノルミータに加わりネロアリスとなった彼女の特技は、玩具を意のままに操ること。トレスマジアの３人を、ドールハウスへとおびき寄せ、おもちゃのように弄んだ。

こりすが仲間に加わったことで、一緒に遊ぶことにしたうてなとキウィ。彼女の部屋にあったのは、使い古されたボロボロの人形だった。それを見たうてなは、「よかったら」と、こりすに声をかけて、修理してあげることにした。裁縫道具を使って綺麗に直った人形。一方、夜通し人形修理をしたうてなは体調を崩してしまった。それを見たこりすは、病院の診察室を作り出し、自ら女医となってうてなを優しく癒してあげた。

大切なこの子を預けてくれたんだもん……
ちゃんとキレイに直さなくちゃ……





監督CHECK

第五話
こりすは突飛!?

こりすは原作だともう少し後の登場なのですが、できるだけ早く全員登場させたいと思い、アニメでは第五話に。彼女の日常やエノルミータでの役割、うてなやキウィとの関係性がわかるように、いろいろ詰め込みました。（鈴木）／こりすは無口キャラゆえに、ちょっと行動が突飛に見えます。でも、そこが魅力的！（大槻）

本日のプレイ内容 認識操作で家族ごっこ

アズールを「ハニー」と言い出したマゼンタと、幼児退行して「おっぱい」を欲しがるサルファ。ドールハウス内で、ネロアリスによって認識操作をされた３人は、乱れに乱れた。

本日のプレイ内容 お医者さんごっこ

夜通し大事な人形を補修してくれたうてなを優しく癒してあげるこりす。おっぱいに聴診器を当てたり、押し倒して薬を塗ってあげたり、お注射を打ってあげた。

絶頂コレクション

マゼンタとサルファに求められたアズール

服を脱いで、こりすの治療を受けるうてな

Episode 06

トレスマジア誕生秘話

脚本／山田靖智　絵コンテ／村木一隆、森あおい　演出／大塚隆寛　作画監督／富山大輔、松下清志、松下純子、加藤真人、Ritera Pictures（金茶彬、鄭賢貞、朴鎭光、閔始恩、韓部而、ソン・ソフィアパン八、キエフ・ソティナ）、Rad Plus、ラプラス・アニメーション

ベーゼやレオパルトたち相手に、押されっぱなしのトレスマジア。はるかはみんなで体力をつけるためにスペシャルきのこ弁当を作ったり、戦いのフォーメーションを考えたりと、事態の打開を模索していたが、薫子はモチベーションがなかなか上がらない。

そんな中、ネロアリスに捕まってしまったマゼンタは、認識操作によって赤ん坊になってしまった……。ぬいぐるみや、積み木で遊び、おむつをしたあと、ミルクまで飲ませてもらうことに。「赤ん坊のままでいいや」と思う一方、マゼンタの脳裏に浮かんだものは、アズールと一緒に、サルファを魔法少女になるようにと誘った思い出だった。

同じ頃、公園で遊ぶ女の子を見て、初心を取り戻した薫子は、小夜と一緒にマゼンタの救出に向かった。

何って……なんだかんだで、スッキリしちゃった！

監督CHECK

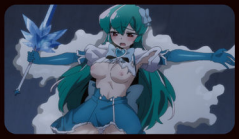
第六話
テーマは「過去」

この回は原作のお話を膨らませて、アニメならではの構成にしました。はるかがトレスマジアの中心人物だということを見せたかったので、薫子たちとの過去のエピソードを入れて、サブタイトルも「トレスマジア誕生秘話」に。赤ちゃんプレイを入れたのは、お話全体が「過去」をテーマにした回だったからです。（鈴木）

本日のプレイ内容

のりでベタベタ

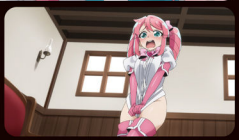
ベーゼやレオパルトに弄ばれる3人。今回は、のりで壁に貼り付けにされてしまい、服を溶かされ、柔肌があらわに……。薫子は己の不甲斐なさに憤るが、その姿もまたよし！



本日のプレイ内容

赤ちゃんごっこ

ネロアリスの認識操作によって、赤ん坊にされてしまったマゼンタ。ミルクを飲みすぎてしまい、オムツの中で……。最後は、いろいろな意味でスッキリした顔をしていた。



絶頂コレクション

のりで貼り付けにされるマゼンタの恥ずかし顔

赤ちゃんプレイで尿意が限界を迎え、失神寸前!?

Episode 07

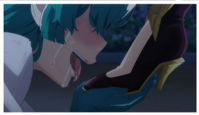
逆境アズール

脚本／木村暢　絵コンテ／鈴木理人　演出／神谷マキ　作画監督／Ritera Pictures（金茶彬、鄭賢貞、朴鎭光、閔始恩、ソン・ソフィアパンハ、キエフ・ソティナ）、Jumondou Wuxi、十文字 Shanghai Xuanzhou Culture Media、育松アニメーション制作有限会社、ラプラス・アニメーション

魔物から女の子を守る勇敢さを買われて、魔法少女に勧誘された小夜。最近は調子が出ず、落ち込んでいた。気分転換に街へ出たところ、魔法少女展が開催されていたので、入ってみることに。ひととおり展示物を見たあと、併設された上映会で魔法少女ミラクル☆みみるの活躍を目の当たりにし、自らの弱さを断つべく奮起する。

そして、公園でベーゼとの一騎打ち。巨大な魔物を一刀両断したかと思いきや、またもや服を切られてしまい恥ずかしい姿に。パンダの三角木馬で責められ、「わたしベーゼ様に勝てませんでした」と、正義の心は闇堕ち寸前。すべての女の子のあこがれであるべきトレスマジアの、そんな姿を見たベーゼは一気に興醒め。「解釈違いにもほどがある」「矜持をもちなさい」と、アズールに喝を入れた。

解釈違いにもほどがある
ヒロインとしての矜持をもちなさい



監督CHECK

第七話
うてなの幼少期

小夜とうてなの対比を描いた回です。注目ポイントは、アニメオリジナルのうてな幼少期。彼女が観ていた「魔法少女ミラクル☆みみる」という番組は、原案を小野中先生に描いていただき、新たにキャラクターデザインを起こしました。なぜ魔法少女が好きなのかが強調され、後の「解釈違い」というセリフにつなげました。（鈴木）

本日のプレイ内容

小夜のお風呂

お風呂に入っている時も、頭をもたげるのはベーゼたちの生み出した魔物に拘束され、おっぱいを叩かれて身悶えたM心。風呂の湯と一緒に負け癖を流したいところだが……。

本日のプレイ内容

圧倒的力で屈服

タイマンにも関わらず、下乳丸出しにされて、またして責められることになったアズール。最後はベーゼの言葉責めで、正義の心が折れてしまった。

絶頂コレクション

ベーゼに媚びるアズールの心は崩壊寸前に

アズールを責めまくり興奮するベーゼ

Episode 08

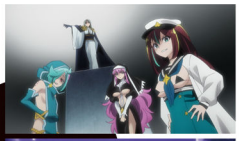
ロード団、現る！

脚本／木村暢　絵コンテ・演出／森あおい　作画監督／久保山陽子、大野勉、森あおい、樋口香住、島崎克実、藤井文乃

ナハトベースへやってきたベーゼたち。その前にロードエノルメ率いる悪の組織の先輩たちが現れた。彼女たちは魔法少女狩りをし、世界征服へ動き出していた。「覇権の一端を担わせてやる」と３人を勧誘するのだが、ベーゼは「興味がない」とそれを断り、怒ったロードエノルメは、「潰せ」とシスタギガントに命じた。ネロアリスのドールハウス内でも有効打が打てない３人は、辛うじて逃れることしかできなかった。そんな中、満身創痍のベーゼは、不適な笑みを浮かべ「気に入らないな」とロード団を堕とすと心に誓った。

うてなの入院中、キウィとこりすの前に、ロード団のロコムジカが出現。序盤はやや苦戦していたものの、「アイドルとして世界に君臨する」というロコの歌が、絶妙に下手であることを指摘し泣かせたところで、なんとか戦略的撤退に成功したのだった。

次にしくじれば貴様の望みごと潰す
よく体で理解しておくことだな



監督CHECK

第八話
歌が下手なロコ

ロード団の初登場なので、彼女たちの性格や団内での関係性をしっかりご覧いただこうと思って制作を進めました。ロコムジカの「L・O・V・E・リー　ロコ♡」が印象的ですよね。歌が下手であることを強調したかったので、挿入歌として制作し、相坂優歌さんにすこし拍子外れなニュアンスで歌っていただきました。（鈴木）

本日のプレイ内容

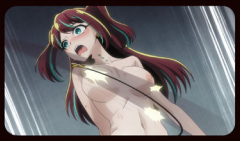
巨大おっぱい挟み

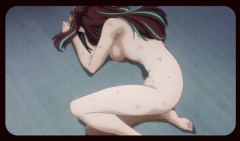
体の大きさを変えられるシスタギガント。ベーゼたちは、彼女のおっぱいに挟まれてしまった。絶体絶命のピンチで助けてあげたいのだが、なぜか羨ましい！

本日のプレイ内容

ロコムジカへのお仕置き

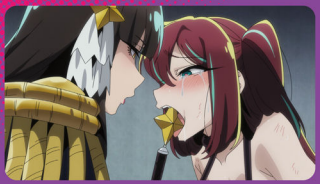
優勢ながらもレオパルトたちを逃してしまったロコムジカは、ロードエノルメから折檻されることに。服を一枚一枚脱がされ、羞恥心を抱えながら鞭打ちされた。





絶頂コレクション

ロードたちを倒すことを決めたベーゼ



痛々しいお仕置きを受けるロコムジカ

Episode 09

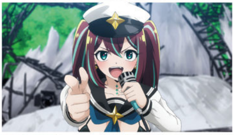
アイドルにあこがれて！

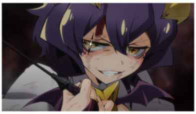
脚本／山田靖智　絵コンテ／天城こう太　演出／鈴木理人
作画監督／大飛龍狂一、大内正彦、はっとりますみ、重松佐和子、松下清志、富山大輔、Ritera Pictures（金茶彬、鄭賢眞、朴鎮光、閔始恩、ソン・ソフィアパンハ、キエフ・ソティナ）、Studio CL、ラプラス・アニメーション、育松アニメーション制作有限会社

アズールが滝行で精神を清めているかと思いきや、その水圧を愉しんでいた頃 、ロコムジカとルベルブルーメが再び出現。ベーゼたちも現地へ向かい戦うことに。ロコルベのコンビネーションに防戦一方の３人。しかし、ネロアリスのドールハウスを使うことでルベルの封印に成功。形勢逆転したベーゼは、ロコにお仕置きタイムを発動する。

ライブの客がルベルの仕込みであることをバラして、恥辱にまみれた彼女に、服を脱いで歌うことを要求した。ほほを赤く染めて、過去を振り返るロコ。ヤケになった彼女は、これまでにないパフォーマンスでベーゼたちを魅了することができた。そして、最後は「あんたたちの仲間になってあげる！」と宣言するのだった。

見られちゃう……ロコの恥ずかしいとこも
全部……見られちゃうッ……





監督CHECK

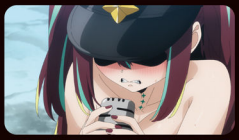
第九話
真珠とネモの関係性❶

バトル要素が強くなるので、アクションに力を入れています。とはいえ、違う雰囲気になりすぎてはいけないので、ロコムジカが全裸で歌うシーンなど『まほあこ』らしさを出しつつ演出を組んでいきました。意識したのは第十話につながる、真珠とネモの関係性をしっかりと見せることです。とくにネモの真珠に対する強い気持ちですね。（鈴木）

本日のプレイ内容

ロコムジカ全裸ライブ

アイドルを目指し、微妙な歌を歌っていたロコムジカだったが、ベーゼの指示によって全裸ライブを決行。魅了されたレオパルトたちの顔を見て、絶頂に達してしまった。



本日のプレイ内容

お風呂でケンカ？

ベーゼたちが戦っていた一方、トレスマジアは温泉へ。おっぱいを意識してモジモジしている小夜にその理由を聞いた薫子は、「嫌なこと思い出させよって」とおっぱい責めに！

絶頂コレクション

「ブラボー！」な歌を披露してとろけ顔のロコ

ロコの歌を聴いてヨダレが止まらないベーゼ

Episode 10

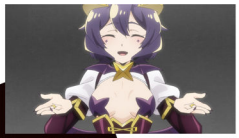
ロコ×ルベ

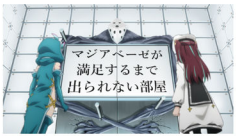
脚本／木村暢　絵コンテ／村木一隆　演出／山内東生雄
作画監督／島崎克実、富山大輔、藤井文乃、桜井木ノ実、大内正彦、山﨑理璃花、Studio CL、武遊

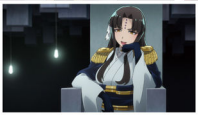
ロコムジカとルベルブルーメを呼び出し、視を課すことにしたベーゼ。二人を防音のドールハウスへ閉じ込めて、彼女たちの関係性を弄んだ。アイドルにあこがれるロコと彼女を陰ながら支えてきたルベルに、「仲良くなってほしい」と言いつつも、二人の絆を壊すような悪魔の甘言を囁きつづけた。それでも引き裂かれないロコとルベルに、今度は仲直りのキスを強いて、さらにはキスの向こう側へと旅立たせたのだった。

その直後、街にロードがつくりだした魔物が現れた。世界の侵攻に動き出したのだ。魔物はロードを倒さない限り消えない。巨大なシスタギガントまで出現して、超ピンチに！そんな中、レオパルトが「この戦いが終わったらホテルに行こうね」と、ベーゼをロードのもとに向かわせ、シスタギガントと対峙。敗北必至かと思われた中、胸元に３つの星を輝かせ、隠していた本当の力を発揮した。

お二人のもっと深い深い深い深ぁい愛を見せてください♡







監督CHECK

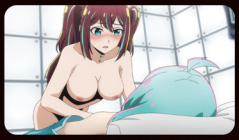
第十話
真珠とネモの関係性❷

シナリオ会議の段階から、「本当にやっていいの？」と疑いつつ、進めたエピソードです。よく放送できたなと思います（笑）。完成後にＴＶ放送では使えないシーンが発覚し、自分で修正カットを描きました。大変でしたが、真珠とネモのお互いに対する気持ちが見える重要な回でした。《超あこがれ Ver.》でぜひご覧いただきたいです。（鈴木）

本日のプレイ内容

ロコ×ルベ

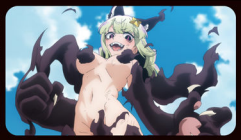
いろんなかわいいところを、ロコからいっぱい「いいこいいこ」してもらったルベル。二人は清らかな音楽の中で、ベーゼのＳ心をたっぷりと満たしてあげたのだった。



本日のプレイ内容

本気のレオパルト

今までの戦闘ではあまり活躍できなかったレオパルトだったが、シスタギガントを前に真の実力を発揮。「見せてやるよ、あたしの本気」と、こちらもドＳ心をメラメラと燃やした。



絶頂コレクション

ベーゼからキスを強いられた二人は赤面

かわいいところをいいこいいこされてとろけるルベル

Episode 11

世界征服にあこがれて！

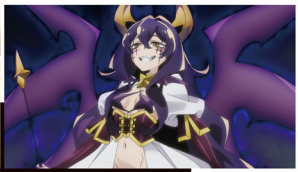
脚本／山田靖智　絵コンテ／森あおい、天城こう太　演出／神谷マキ　作画監督／服部憲知、南伸一郎、はっとりますみ、飯飼一幸、佐藤恵美、藤井文乃、久保山陽子、大内正彦、株式会社ユニゾン（高橋こう平）、ラプラス・アニメーション、青松アニメーション制作有限会社

ひどい傷を負いながらも、シスタギガントを倒して「ベーゼちゃんとホテルに行ける！」とレオパルトが興奮していた頃、トレスマジアもこの戦いに参戦。真化を果たしたアズールは、ロードの生み出した魔物を一瞬で倒したのだった。

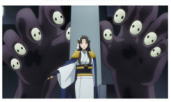
一方、ベーゼは、ナハトベースでロードの世界征服論を聞かされうんざりしていた。まったくテンションが上がらないのだ。そこで自らの興奮が高まるように、脳内で彼女を貶めがいのある姿に認識を改めた。テンションを上げることに成功したベーゼはロードを圧倒。お仕置きとして激しくお尻ペンペンされたロードは涙ながらに負けを認めた。

こうして暴走の末に敗北したロードは、ヴェナリータの指示によりシスタギガントの手で処分され、ベーゼはエノルミータの総帥に就くことに。

気付いてください、ロードエノルメ。
最早あなたには……何も残されていないんですよ



監督CHECK



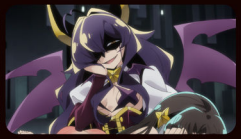
第十一話
ロード団との決着

普通の作品であればロード団はラスボスなのですが、戦いを長引かせてしまうと、第一話で提示した「魔法少女対悪の組織」という構図ではなくなってしまうので、第十一話で決着をつけるようにしました。（鈴木）／バトルシーンが派手でカロリーが高かったものの、スタッフみんなで乗り越えました。（大槻）

本日のプレイ内容

ロードへのお仕置き

圧倒的な魔力に目覚めたベーゼは、「ロードとの戦い」を「ロードへのお仕置き」に変換。お尻を叩かれ、撫でられたロードは、「ごめんなさい」をするしかなかった。



本日のプレイ内容

喜びのレオパルト

シスタギガント戦における、レオパルトのモチベーションは、戦いのあとにベーゼとホテルへ行くこと。ロード戦を制した彼女に、満身創痍ながらも抱きついて悦びあった。

絶頂コレクション

ロードを責めて悦に入るベーゼ

羞恥心と敗北を同時に味わうロード

Episode 12

総帥マジアベーゼの決断

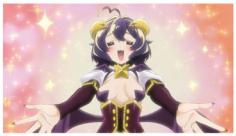
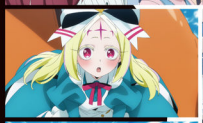
脚本／木村暢　絵コンテ・演出／森あおい　作画監督／鎌口香佳、佐藤恵美、森あおい、鈴木知里、星美貴子、久保山陽子、島崎克実、大野勉、十文字 Shanghai Xuanzhou Culture Media、Jumondou Wuxi

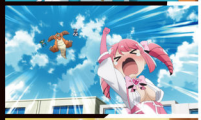
ロード戦で壊れた街を修復するトレスマジア。少しでも彼女たちの近くにいたいと、うてなは現場へ向かった。そして、慣れない作業で疲れたアズールにマッサージをしてあげたのだが、その手は肩から腰を経て、スカートをめくってお尻へ。執拗にお尻を責めるうてなと、お尻を責められるアズール。赤面してお互いに満足に至った。

後日、総帥に就任したベーゼは魔法少女の活躍を堪能するため、悪役ムーブを決意。修復したばかりの街で、ネロアリスがお気に入りの怪獣フィギュアを巨大化させてご満悦な表情をみせ、さらにはマゼンタをも巨大化させ対決させることに。この戦いに参戦することにしたベーゼたちは、巨大化したマゼンタの服の中に潜入。おっぱいやお尻を責めまくったのだが、最後は「いい加減にしなさーい！」とやっつけられてしまうのだった。

な……何なのこれぇ〜〜!?

みっ……みんな写真撮ってないで逃げてよぉ！



監督CHECK

第十二話
変わらない日常

ロード団の戦いでうてなたちは大きく成長しましたが、トレスマジアも裏で強くなっています。彼女たちの成長を見せつつ、両者が戦うという変わらない日常が続いていきます。（鈴木）／みんなの関係性はすこしずつ変わって、成長もしているのに、やることが何も変わらない。そこが本作の面白いところですね。（大槻）

本日のプレイ内容

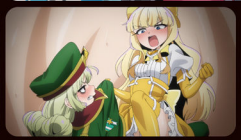
マッサージ

アズールのマッサージをしていたところ、S心が目を覚ましたうてな。丸くて柔らかくて、プリップリのかわいいお尻をたっぷり愛でたところで、ハッと我に返った。

本日のプレイ内容

巨大化＆くすぐり

巨大化したマゼンタは、パンツが下から丸見え！　ただでさえ恥ずかしいのに、服の中にベーゼたちが入ってきていたずらし放題。気づけばみんなパンツの中に!?



絶頂コレクション

うてなからお尻を責められ絶頂顔のアズール

恥ずかしさで目をうるませるマゼンタ

Episode 13

やっぱり魔法少女にあこがれて

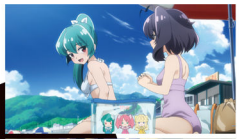
脚本／山田靖智　絵コンテ・演出／鈴木理人　作画監督／佐藤恵美、富山大輔、重松佐和子、藤井文乃、松下純子、樋口香住、大飛龍狂一、森あおい、大内正彦、久保山陽子、山﨑理璃花、Jumondou Wuxi、Ritera Pictures、ラプラス・アニメーション

撮影で海に来ていたはるかたちは、遊びに来ていたうてな一行を発見。声をかけて８人はそのまま一緒に遊ぶことになった。砂でお城を作ったり、泳いだり、とってもにぎやかな海水浴に。そんなや、うてなに迷惑をかけていた酔っぱらい客を見かけたことで、プチ切れたキウィがレオパルトに変身。それに気づいて、はるかたちもトレスマジアに。こうなったら、戦うしかない！

ベーゼはキウィの持っていたタコを魔物に変えると、敵味方関係なくヌルヌルの触手で拘束してしまった。ヌルヌルと恥ずかしいところをいっぱい責められながらも、成す術のない面々。そんなや、真化したアズールが魔物を撃破、エノルミータを全員蹴散らしてしまうのだった。

最後は、みんなで仲良く花火をして夏の夜はふけていった。

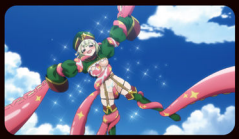
そう……それならもっともっと、私を攻め立てなさい！ マジアベーゼ！



監督CHECK

第十三話
アズール新フォーム

魅力的にアズールの真化を描けたと思います。魔法少女の新フォームは、うてながもっとも喜ぶポイントなので。変身シーンで主題歌を流してもらいましたが、途中で曲が止まる演出は音響さんの素敵なアドリブです。（鈴木）／真化の変身シーンがカッコよかったので、ベーゼの「美しい……」という言葉に説得力が出ました。（大槻）



本日のプレイ内容

巨大タコとの戦闘

タコが苦手なサルファは、責められまくって超ピンチ！　S心をたっぷりと刺激されたベーゼは、「いつもの威勢はどうしました？」と笑みを浮かべた。

絶頂コレクション

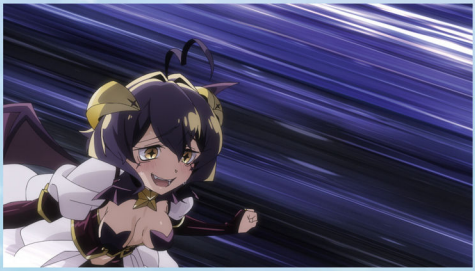
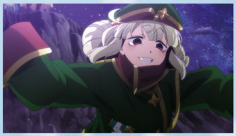
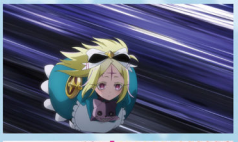
口もパンツの中もタコざんまいのサルファ

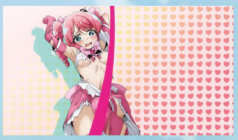
「このままじゃダメ」と嘆くマゼンタ

ベーゼたちの総攻撃で絶頂に達したアズール

オープニングギャラリー 「My dream girls」

作詞・作曲・編曲：Motokiyo　歌：NACHERRY



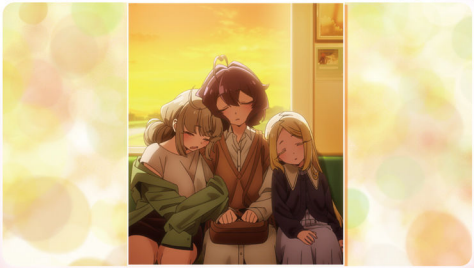
鈴木監督のこだわり

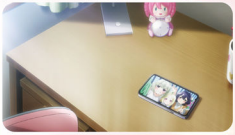
「本編が魔法少女ものかと思ったら、ちょっと（?）違うという導入でしたので、OPの曲はいわゆる魔法少女ものらしい楽曲としてオーダーさせていただきました。上がってきた曲を聴いたら、予想以上にかわいらしく、奥底に力強さを感じるようなテンションの上がる曲になっていて良かったです。映像に関しても魔法少女ものっぽい雰囲気の導入から、本編と同じくうてなの変身がきっかけになって、空気感が変わっていくようにしました。曲と合わせて楽しんでいただけていたらうれしいです」（鈴木）

エンディングギャラリー

「とげとげサディスティック」3人ver./5人ver.

作詞・作曲・編曲：鳥屋茶房　歌：エノルミータ　マジアベーゼ（cv. 和泉風花）、レオパルト（cv. 古賀葵）、ネロアリス（cv. 杉浦しおり）/（5人ver.のみ）ロコムジカ（cv. 相坂優歌）、ルベルブルーメ（cv. 津田美波）





／5人ver.＼

鈴木監督のこだわり

「ED は本編から通して観たときに『今週も楽しかった』と観終われるようにしたいと思っていました。楽曲に関しても大槻監督や皆さんと相談して、エノルミータのキャラソングとして、優しい雰囲気のものということでお願いいたしました。優しい中にも、うてなたちのちょっとトゲのある気持ちが表現されていて素晴らしい楽曲だったと思います。3人から5人に増える演出はプロデューサーから提案があり当初から予定されていたものです。観ていただいた皆さんには喜んでいただけたようで良かったです」（鈴木）

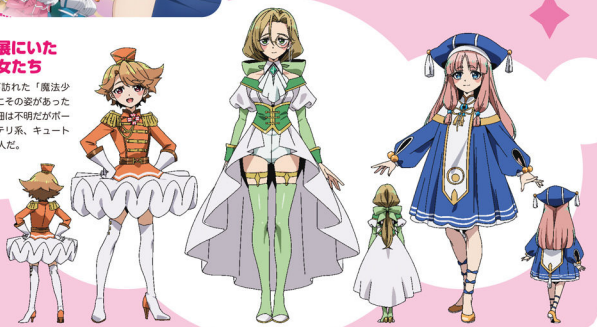
『まほあこ』世界の魔法少女たち

column 2

本作にはトレスマジアのほかにも、
多くの魔法少女がいることが示唆されている。
ここでは劇中に登場した魔法少女を紹介しよう。

魔法少女展にいた魔法少女たち

第７話でうてなが訪れた「魔法少女展」のポスターにその姿があった魔法少女たち。詳細は不明だがボーイッシュ系、インテリ系、キュート系と個性豊かな３人だ。



魔法少女 ミラクル☆みみる

うてなの魔法少女愛の原点と言える TV アニメ。みみるがマスコットのミプルンと協力し、敵を倒す内容。みみるのピンチや立ち上がるときの表情が、幼いうてなの性癖に刺さった。

ミラクル☆みみる

声／丹下 桜

ミプルン

声／久川 綾

Chapter 3

キャストインタビュー

魅力的な演技で物語を盛り上げた
声優たちの想いについて話を聞いた。
《超あこがれ Ver.》の制作秘話もちょっと紹介！

柊うてな／マジアベーゼ役

和泉風花

いずみ ふうか　1月11日生まれ。愛知県出身。アミューズ所属。『しかのこのこのここしたんたん』鳥車芽めめ役、『HIGHSPEED Etoile』輝室凛役など出演作多数

うてなを演じるなかで彼女と自分がひとつになっていきました

熱演の源にあるのはうてなとのつながり

――魔法少女にあこがれて」の原作コミックを初めて読んだときの印象について教えてください。

和泉　最初はエロギャグがメインの作品かと思ったのですが、読み進めていくと心情の変化を丁寧に描く作品であることがわかり、いい意味で予想を裏切られました。やっていることはおバカなことなのですが、みんなでマジに全力で取り組む姿がすごくくに刺さりました。シンプルなストーリーラインから始まって、日常やバトルを通してキャラ同士の関係性が構築されていく。その流れがとても楽しいですし、緩急がついていて気付けば一気読みしていました。

――うてなを演じることが決まったときの心境をお聞かせください。

和泉　何役かオーディションを受けさせていただいたなかで、うてながいちばんしっくりきて楽しく演じられたので、決まったときはうれしかったです。今まで演じたことがないタイプのキャラで、新しい境地が開拓できました。ただ、私自身もオタクだったりするので、うてなというキャラとの相性はよかったのではと思います。

――和泉さんとうてなは、ほかにどんな共通点がありますか。

和泉　私も普段はあまり人と目を合わせられないですし、モジモジしてどもったりするところは似ていると思います。大人になってから、ある程度直すことができたので今は大丈夫なんですけど、学生時代はまさに序盤のうてなと同じような状態でした。彼女の気持ちが自分のことのようにわかったので、積極的にアドリブを入れることができました（笑）。

――うてなの変化も意識した？

和泉　じつは彼女の変化を強く意識したことはなくて、物語が進んでいくと中で、自然と変わっていきました。演じるたびに自分とうてなのつながりがドンドン強くなっていって、彼女が好きなものを私が好きだと思うようになり、彼女のやりたいことを私もやりたいと思うようになっていました。なので、彼女が自分の欲望を解き放っているときは、私も自分の欲望を解き放っています。キャラクターと一緒に盛り上がることで、自然と作品に合った芝居になっていきました。

――仲間のキウィについてはどんな印象をお持ちですか。

和泉　うてなは彼女の好意を一身に受け取る立場です。そのそばに寄り添っている私は、皆さんが思っているよりも、ずっとキウィちゃんのことをかわいいと思っています（笑）。一方的に気持ちをぶつけてくるだけかと思いきや、たまに一歩引いていじらしさみたいなものを出してくるところがズルかわいいですよね。バトルをがんばる理由も、ベーゼのため。キウィちゃんの行動の根源のすべてにベーゼが存在している。そこに古賀（葵）さんのかわいすぎるお芝居が合わさるものだから、どうしたって好きになってしまいます。うてなが自信を持てるようになればきっとキウィちゃんの気持ちに応えられると思うので、それまで待っていてね、という気持ちです。

――キウィの次に仲間になったこりすの印象はいかがですか。

和泉　キウィちゃんがドキドキタイプなら、こりすちゃんはほっこりタイプ。幸せにしてあげたくなります。あの魅力には誰も逆らえない！　あと唯一うてなを嫌がせたのが、じつはこり

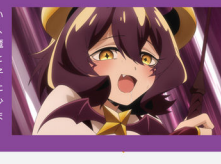
Q　SとMどちらのキャラが演じやすい？

A　私は「S」キャラ

どちらも演じてきましたが、演じていて楽しいのは圧倒的にSです。エッチなシーンのアフレコ中も、魔法少女たちがとにかくかわいくて。「私の手でもっとかわいくしてあげます」って本気で思っていました。演じるキャラクターとリンクしやすい性格ではあるのですが、それを抜きにしてもSのほうが楽しいかもしれません。

Q 魔法少女になったら何がしたい？

「大きくなったシスタ☆ガンントのおっぱいにロードエノルメが座っていましたが、あれすごく羨ましかったんです。もし魔法が使えるなら敵でも味方でも言うことをきかせられる能力がほしいな。女の子たちを和泉ガールズみたいな感じにしたいです。……どう考えても正義の魔法少女ではないですね。やっぱりねはどこまでいってもエノルミータでした（笑）。



和泉　ようやく現れてくれた識人！今まで誰も止めてくれず、ツッコんでもくれなかったところに、ようやくツッコミを入れてくれる人たちが来てくれました。真珠とネモならこれからのベーゼたちを支えることができると思うので、よろしくお願いしますという気持ちです。

――第10話で描かれた2人のシーンは濃厚でした。

和泉　内心で「うわー！」と叫んでいました。ただ、あのシーンはエッチなところに目が行きがちですけど、2人の感情が重なった尊さに本質があると思っています。普段の感情の矢印は真珠からネモに向いていますが、恋愛モードになると急にネモからの大きすぎる想いが真珠に向けられて、そうかと思いきや行為中にリードをするのは真珠という。その関係性がシンプルにいいなって思いますし、それがエッチなことに奥手で恥じらいが強いところがグッときます。

「解釈違い」のセリフに込められた想い

――次はトレスマジア組の印象についても聞かせてください。

和泉　ほかのキャラクターがドンドン自分の思う方向に突き進んでいくなか、はるかだけは一貫して道の魔法少女らしさや正義の気持ちを忘れませんでした。「正義のために戦う魔法少女を苦しめて楽しむ」というテーマを忘れずにいられるのは、彼女の存在が大きいです。二面性のあるキャラクターが多いなか、最初から最後まで変わることなくみんなを守ろうとするるかは本作の良心ですし、彼女がいるからこそ「まほあこ」という作品が成り立っているんだと思います。

――今夜はいかがですか。

和泉　本作の魅力の大きな部分を担っていますよね。とても力のこもった、心のなかは完全に終わっていたり、戦闘中によだれを垂らしていたり、ほかの魔法少女にはない一面を持っています。「まほあこ」だからこそ許されているキャラクターですよね。第12話でひどいセクハラをされたりに、うなると仲良くしているのもピックリ。

――第7話のベーゼとアズールのやり取りは圧巻でした。

和泉　ベーゼと同じような気持ちを感じたことがあるので、その経験が生きました（笑）。とあるアニメに推しのキャラクターがいるのですが、映画館での先行上映会のときに推しが着ぐるみで登場したんです。私の推しはすごくぶっきらぼうで、絶対にファンサなんてしないはずなんです。なのに子供の頭を撫でたり、手を振ったりしたんですよ。解釈違いを目の当たりにしたあのときの気持ちを収録中に思い出して芝居しました。「解釈違いにもほどがある」というリフは完全に私の心の声でもあったのです（笑）。

――「解釈違いにもほどがある」は本作を象徴するセリフですよね。

和泉　その解釈も、うてなが勝手に思い描いている魔法少女像でしかないんですけど、彼女はそれを心の底から愛しています。あれほど強大な力を発揮できるくらい強い愛を持っているという点は、本当に尊敬します。ちなみに、第7話のパート私と風間（万裕子）さんの2人だけで収録して、テスト録りもさせていただきました。だからこそ集中して、遠慮することなく全力でお芝居をぶつけ合うことができたのですが、そんな掛け合いができたのはきっと風間さんだったからなんです。風間さんと私は声優になったタイミングが同じで、普段からとても仲良くさせてもらっているので、そういう関係性も第7話のお芝居に繋がっている気がします。

――薫子の印象についてもお聞かせください。

和泉　視聴者が思わずツッコミを忘れてしまうようなシーンでも、しっかりツッコミを入れてくれるので、「まほあこ」における“ツッコミ”という存在かも。ものすごく大好きなんですけど、じつは原作を読んでいたときは登場人物のひとり、くらいな気持ちでした。でも、いざアフレコが始まって薫子役の池田（海咲）さんの演技に接していたら、すっかりハマってしまいました。池田さんの役作り、とても魅力的でした。小柄なのにパワフルで、トレスマジアの2人を引っ張っている。はんなりとした京都弁だけど、気が強くて口が悪い。そんなギャップが見事に表現されていて素晴らしかったです。

――和泉さんの中で、とくに印象に残っているシーンは？

和泉　第6話でロードエノルメたちの元から逃げたときに、“決めた。あの星は堕とす”と宣言したシーンです。魔法少女を扱っている作品とは思えないほど禍々しく描かれていてどうやって表現しようかすごく悩みました。

――ED主題歌「とげとげサディスティック」は、エノルミータの皆さんで歌っていましたね。

和泉　うてながみんなと一緒に歌うところが想像できなかったのですが、音響監督の本山（哲）さんに「ひとりカラオケをしているイメージ」と言っていただけたので、あまり悩むことなく歌えました。うてな、ベーゼとしての歌い分けを意識しつつ、出したかったのは今までの過激な部分ではなく“あこがれ”だったので、その気持ちが皆さんに伝わっていたならうれしいです。

――最後にファンに向けてメッセージをお願いします。

和泉　ファンの皆さまのおかげでファンブックができて、コラボカフェなどいろんな展開もさせていただけて、すごくありがたいです。続編ができたらいいなと私も思っていますので、ぜひこれからも応援してください。

阿良河キウィ／レオパルト役

古賀 葵

こが あおい　8月24日生まれ。佐賀県出身。81プロデュース所属。『ひろがるスカイ！プリキュア』プリンセス・エル／キュアマジェスティ役、『かぐや様は告らせたい～天才たちの恋愛頭脳戦～』四宮かぐや役など出演作多数

重い女だけどアツい男気もある そんなキウィが最高です

欲望の先にあるのは少女たちの青春！

――原作を初めて読んだときの印象について教えてください。

古賀　一見するとお気楽なビジュアルに目を奪われそうですが、それぞれのキャラクターが目的を明確に持っているところがおもしろいなと感じました。欲望にまみれた目的もありますが、少年マンガのようなアツい部分もあって、読み始めたら止まらなかったです。

――キウィの第一印象は？

古賀　ものすごくタイプでした。見た目も個性的がドーンとあふれていますし、ひとりだけ目にハイライトがないところもかわいいし。ぶっ飛んだ行動をするし、キャラクターによって態度をガラリと変えるし、自分に正直で素直ですよね。原作を読んで、ぜひ演じたいと思いました。普段はうてなに「好き好き！」って態度を取りつつ、戦闘になるとアツい展開をみせてくれるところもカッコいい！

――そんなキウィを演じる際に意識したことは？

古賀　うてなにタメをしているときと戦っているときのギャップを大きくすることで魅力が伝わりやすそうだと感じたので、その変化は強く意識しました。監督や小野中（彰大）先生からも「ストーリーの最初と最後で変わってくキャラクターなので、思った通りに変化を演じてください」と言っていただけたので、演技のプランを変えることもありませんでした。最初はうてなを試すし感じだけど、負けてからはLOVEになって、こりすと出会ったことで意外と世話好きな面が見えたり、情に厚かったり、掘れば掘るほど人情味が見えてくるので、その魅力をしっかり見せていくことはつねに心がけていました。

――キウィが想いを寄せているうてなは、古賀さんから見てどんな女の子でしょうか？

古賀　オタクであることを恥じてコソコソしている感じは、学生時代の私と似ているかも、表立って自分の好きなものを言えないけど、家に帰ったら好きなことばかり考えている。一部の友人以外にはアニメ好きであることを隠していたので、うてなの気持ちがよくわかります。度胸や愛嬌があったら止められないところも共感できる。

――こりすについての印象を教えてください。

古賀　近くにいたら絶対に構いたくなるようなかわいさがありますよね。原作の時点でかわいかったのですが、アニメになって声がつくとさらに魅力的に。アフレコのときも杉浦（しおり）さんが演じるときはみんなで静かにしてジッと聞き入っていました。しゃべることが少ないからこそのセリフのプレミアム感みたいなものがありますよね。もちろん話していないときも感情は動いていて、それをうてなやキウィ、はるかが読み取ってコミュニケーションを取るところもいいですよね。

――キウィとこりすの関係性についてどんなイメージを持っていますか。

古賀　だらしない姉としっかり者の妹……かな。キウィはお姉ちゃんとしておもちゃや遊んであげているのでしょうが、客観的に見てこりすに遊ばれていることもありますよね、それともか、こりすがキウィをあやしているときもあるくらい。うてなが話しているときもケンカしていることもありましたし、姉妹のような雰囲気もありますよね。とは言えキウィからすると初対面は「なんだこの女って印象だったと思うので、今の関係性を見ると、仲良

Q　SとMどちらのキャラが演じやすい？

A　私は「M」キャラ

キウィって、最初はガンガンいくSっぽいところがありつつ、この人には敵わないってわかるとコロッとMになるところがあるようが気がします。私はこれを「強気M」と呼んでいるのですが、黒子との言い合いで押し負かされているときもあるので、ちょっとM寄りなのかな。そんなキウィがとても演じやすかったので、Mキャラのほうが演じやすいかも（笑）。

くできて一安心ですかね。

――真珠とネモの印象についてもお願いします。

古賀　2人のやり取りを見ながら、「早くくっつけよ！」という気持ちでした（笑）。つかず離れず、想い合っているけど素直になれない、みたいな感じがじれったいですよね。すごくかわいいですし、こういう関係性もいいなって思います。ケンカップル感は見ていて微笑ましいかも。すれ違ったり、意図が通じていなかったり、気遣いが裏目に出てしまったりしていましたが、第10話をきっかけにいい感じの仲になってよかったです。本当にいいコンビだと思います。

――第10話の絡みはインパクトが大きかったですね。

古賀　かなり際どいことになっていましたね（笑）。ただ、ようやく結ばれたね、おめでとう、って気持ちでした。その後、うてなたちと5人一緒に過ごしている光景に青春を感じますし、2人をイジるうてなたち3人っていう構図も好きだから、個人的にはハッピーエンド感があります。

戦いのなかで描かれる感情の動きも魅力的

――次はトレスマジア組の印象についても聞かせてください。まずははるかからお願いします。

古賀　誰もがあこがれる王道の魔法少女3人組に見えて、それぞれに強い個性がありますが、そのなかでもはるかは独特の感性を持っている気がします。物事の見え方がほかの人とは違いそう。でもみんなに分け隔てなく接することができる優しさがあって、誰にでも声をかけられるところもあるから、友達にひとりはいてほしい子ですね。ちょっと抜けているところもかわいいですし、クラスにいたら人気者になってそう。

――小夜はいかがですか。

古賀　心のなかで身悶えして葛藤しているところはいろんな人の心に刺さると思いますし、凛とした雰囲気が崩れるギャップ的なおもしろさも感じます。いちばんそういうシーンが多いキャラクターなのですが、風間（万裕子）さんの演技と相まって「いいぞもっとやれ」って気持ちになってしまいます。個人的にはうてなと小夜は、「いけないとわかっていても本能で従ってしまう」という点で、SとMという対極でありながらも似ている気がします。

――一方、薫子はキウィとの絡みが多かったですね。

古賀　薫子はキウィと顔を合わせるといつもケンカしていて、変身してサルファとレオパルトになっても変わらないところがおもしろい。戦いのなかで見せることがある性悪な感じも大好きです。京都弁でケンカっ早いところも魅力的ですし、上品そうに見えてゴリゴリの肉弾戦に持っていくギャップにキュンってします。素晴らしい部分がギュッと詰まったキャラクターなので、「ありがとうございます小野中先生！」って気持ちです。キウィとは同類嫌悪なんでしょうね。キウィがあそこまで「ムキーッ！」て表情を見せるのは薫子くらいなので、すごく貴重な存在です。

――キウィにまつわるエピソードでとくに印象に残っているシーンはどこですか。

古賀　第10話でレオパルトが力を解放したところですね。原作を読んでいてとくにおどろいた場所でもあります。ロード団の面々から星がないことをチクチク言われていて、気にしていたので、星をしっかり持っていたことにビックリしました。ただ、力を制御できないところにレオパルトらしさを感じます。見事に激闘を制した姿はアツかったですし、勝利に繋がったモチベーションが「うてなとホテルに行くこと」というのもおもしろいです。し、キウィのいろいろな魅力が詰まった回でした。重い女の部分がありつつ、カッコいい男気もあって、キウィは本当に最高ですね。私も全力で演じましたし、迫力満点の映像に仕上げていただけてありがとうございます。

――ほかにも印象に残っている場面があれば教えてください。

古賀　トレスマジアの面々がネロアリスの家に閉じ込められたところ。第5話で3人が家族ごっこをするところも、第6話のマゼンタが赤ちゃんになるところも、どちらもすごく印象に残っています。おままごとをさせられるというシチュエーションが衝撃ですし、それを熱演するトレスマジア組のお芝居もとてもおもしろかった。エロギャグのおもしろさがとくに出ていた印象があります。あとは、なんと言っても光の表現。「そんなに光が入るの!?」ってビックリするくらい多くて、思わず笑ってしまいました。

――アフレコ現場はどういった雰囲気でしたか？

古賀　和気あいあいとしていました。みんなで笑いながら楽しく演じていました。ただ、エッチな目にあう回では、少し気恥ずかしさみたいなものはあったと思います。そんなときは後ろから見ているほかのキャストが応援してくれて、すごく雰囲気のいい現場でした。

――ED主題歌「とげとげサディスティック」は、エノルミータの皆さんで歌っていましたね。

古賀　たしか私がいちばん最後に収録したのですが、ほかの皆さんの歌い方を聴きながら合わせていきました。AメロとBメロはキウィらしいダウナーな感じで歌いつつ、サビの部分はうてなに対して抱えている想いを伝えるイメージで歌わせていただきました。劇中の演じ方と同じで、歌い方も変化させました。『まほあこ』の世界観がたっぷり詰まったステキな楽曲です。キウィの気持ちが皆さんにも伝わっていればいいなって思います。

――最後にファンにメッセージを！

古賀　最初にアニメ化の話を知ったときはどうやってアニメにするんだろうと思いましたが、修正のありなしで複数のバージョンが出ていて、スタッフの皆さんの努力が伝わってきました。ドキッとするようなシーンばかりではなく、自分のなかの欲望と戦う部分や、誰かを想う気持ち、尊い関係性、戦う女の子たちのカッコよさ、かわいさ、日常生活の青春感。いろんな方向から楽しめますし、噛めば噛むほどうまみが出てくる作品です。ぜひこれからもいっぱい楽しんでいただいて、応援してください。

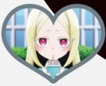
Q 魔法少女になったら何がしたい？

いろいろなアニメを観てきた中で「風の力を操って戦う姿がカッコいいな！」と思っておりまして、その能力が欲しいです。あとは力をいっぱいためて爆発的な威力を出すタイプの戦い方が好きなので、怒ると嵐がぶわっと吹き荒れて一撃必殺の威力になるような、天候を操るタイプの風使いになってガンガン戦ってみたいです。

杜乃こりす／ネロアリス役

杉浦しおり

すぎうら しおり　7月1日生まれ。愛知県出身。アイムエンタープライズ所属。『響け！ユーフォニアム3』剣崎梨々花役、『ウマ娘 プリティーダービー』スイープトウショウ役など出演作多数



「ん」の一言でどこまで喜怒哀楽を表現できるかチャレンジの連続でした

しゃべらないキャラを演じる秘訣とは

――原作の印象や魅力について教えてください。

杉浦　キャラクターが個性豊かで、テンポがいいなと感じました。サクサクと読むことができますし、エッチだけど下品さは感じませんでした。全力で戦って、全力でバカをやる作品だからとても爽やかな作品だと思っています。

――こりすの魅力とは？

杉浦　外見はかわいいのですが、しゃべらないので内面が見えてこなくて顔でしか判断できないですよね。何を考えているかわからなかったので、最初はちょっと怖かったです。私は主人公に感情移入して作品を読むタイプなので、うてなを通してこりすを見ていたのですが、「裏切らないよね？　仲間になったんだよね？」といった緊張感を持って原作コミックを読んでいました。ただ、物語が進むと、いろいろな表情が出てきたので、ホッとしました。

――ほとんど話さないキャラクターということで、演技も難しかったのではないでしょうか。

杉浦　セリフは基本的に「ん」や息の演技が多いのですが、口が開いていないときは「ん」しか使うことができないので、その声の出し方はすごく難しかったです。とくに、前半はほとんど表情に感情が出ないので、より難易度が高かったと感じました。後半も難しかったのですが、喜怒哀楽みたいなものが顔に出ていましたし、わがままを言うところもあったので、楽しく演じられるようになりました。「どこまで表現できるのか」という、やりがいもありました。

――具体的な演じ方も気になります。

杉浦　「このボリュームだと聞こえなくなるかもしれない」「もっと声を出したほうがいいだろうか」。そんなふうに考えて、ものすごく悩んだ末に出た結論が、自然体で演じることでした。こりす自身は「自分の声が聞こえないかもしれない」なんて考えないので、そんな彼女になりきるよう意識しました。ディレクションに関しては、最初に張り切りすぎて「もう少しお人形さんみたいにお願いします」とご指摘をいただいたのを覚えています。その場その場におけるこりすの気持ちを考えて演じました。

――第5話のラストでは母親が登場しましたね。

杉浦　こりすとしてはお母さんも好きだし、みんなのことも好きなので、そこまで普段と変わらない演技をしました。ただ、お母さんとの会話には、純粋なうれしさがあったように思います。あの話数の時点では、まだこりすはうてなたちとそこまで親しくないので、若干暗くて、お人形感が強かったのですが、だからこそお母さんと話すシーンではその暗さが和らいで、年齢相応のかわいさが出ていた気がします。

――エノルミータの面々に対してこりすはどう思っているのでしょうか。

杉浦　うてなは大事にしていたお人形を直してくれたので特別な人ですよね。出会った当初は「仲良くなれるのかな」と少し警戒していましたが、うてなが寄り添ってくれたからこそ、その後のこりすがあると思っています。こりすのなかの印象が「ヤバい人」から「ヤバいけどいい人」に変わったんじゃないかな（笑）。

――キウィについては？

杉浦　いちばん対等な存在として認識している気がしますね。精神年齢も近いのでは？　いいお姉さんでもある

Q　SとMどちらのキャラが演じやすい？

A　私は「S」キャラ

こりすはどちらかと言えばS寄りかなと思いつつ、私自身は明確にSキャラもMキャラも演じたことがないんです。ただ、Sのほうがおもしろそうだなっていう予感はしています。うてなと小夜を観ていても、できるならうてなのほうがやってみたいと思いますし、S側で相手を言葉巧みに追い詰めてみたいです！

し、友達でもあるし、問題児に対してやれやれと思う気持ちも持っている。2人は立場が逆転することもあって、いちばんの友達かもしれません。キウィの存在に助けられているところはたくさんあると思いますし、キウィがいるからいろいろな面が引き出されているようにも感じます。

――真珠とネモに対してはいかがでしょうか。

杉浦　アニメではまだそこまで絡んだわけではないですが、それでも真珠に対しては「面倒見がいい、歌が上手い、残念な人」みたいな印象を持っていると思います。立場的にはどっちが上とか下とかは考えていなくて。ネモに対しては、精神的にいちばん大人なまともな人として認識している気がします。この2人を含めて「エノルミータのメンバーは全員大好き！」なのではないでしょうか。

――ちなみに、杉浦さん自身はうてなに対してどんな魅力を感じていますか。

杉浦　推しに対する理解、愛情を突き詰めていますよね。第7話で闇堕ちしかけたアズールに対して「矜持を持ちなさい」と告げるシーンはとてもカッコよかったですし。共感できます。魔法少女たちを際立たせるために存在している悪なんですよね。それを明確に認識している点が素敵です。

――うてなは「あこがれ」を原動力に動いていますが、杉浦さんにとってのあこがれは？

杉浦　もともとマンガが好きだったので、その延長でアニメも観ていました。そこで、同じ声優さんが違うキャラクターを演じていることに気がつきまして。いろんなアニメで違う役を演じている声優という職業にあこがれて、声優を目指すようになりました。これからも、初心を忘れずに少しずつステップアップしていきたいと思っています。

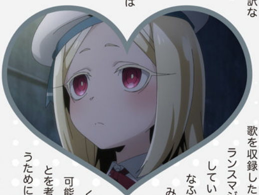
不安を乗り越えて こりすを演じきる

――次はトレスマジアに対して、こりすはどのように感じていると思いますか。

杉浦　マゼンタは「激ヤバちょろい人」。アズールは「ただ激ヤバな人」。サルファは「いちばん良識人でがんばっている人」。そんな認識だと思います（笑）。私としては、こりすの中に善や悪などの倫理観がまだあまり確立されていないと感じていて、彼女が魔法少女になっていた可能性もあると思っています。ただ、マゼンタに対してSっぽい部分が出てくるので、意外と悪属性もあるかも。はるかとマゼンタがイコールであるとは気づいていないこともあって、素のはるかは、こりすにとっていいお姉さんなのではないでしょうか。

――こりすとはるかと言えば、第6話の赤ちゃんプレイが話題になっていました。

杉浦　収録中、こりすはしゃべらないのでマゼンタ役の前田（佳織里）さんがひとりでしゃべっていたんです。がんばって演じているのにこちらは見ているだけで少し申し訳なくなりました。心の声まで含めて全部ひとりで演じていたので、すごく大変だったと思います。こりす的には普通にごっこ遊びがしたかっただけで、終わったあとは「付き合ってくれてありがとう」という気持ちだった気がしますが、マゼンタは赤面していましたからね（笑）。



――全13話を通して印象に残っているシーンはどこですか。

杉浦　パッと思い浮かぶのは、第6話で魔法少女になる前の薫子が魔物をボコボコにするシーン。見た目は小柄だし、雰囲気もおしとやかなのに、すごく強い。魔物に対する乱暴な口調も含めてすごく印象に残っています。あと、第13話でアズールが真化したところ。開き直った姿がおもしろすぎて、原作のなかでもとくに好きなエピソードです。3つ目は、第1話のトレスマジアたちの戦いです。普通に魔法少女をやっていて、「こんなに王道の戦いをやっていたんだ」と、おどろきました。初心に返るための大切な話だなって感じます。

――ED主題歌「とげとげサディスティック」は、エノルミータの皆さんで歌っていましたね。

杉浦　ただでさえこりすはしゃべらないキャラなうえに、エンディング主題歌を収録した当時はセリフも「トランスマジア」の一言しか収録していなかったので、どんなふうに歌えばいいか悩みました。とくに私が一番手だから、ほかの方の歌い方を聞くこともできなくて、苦労しました。可能なかぎりこりすのことを考えて、もし彼女が歌うために声を出すならこうやるだろう、と感じたものをそのまま表現しました。完成した曲を聴いて感動しましたが、聴くまではずっと怖かったです。

――最後にファンの皆さんにメッセージを！

杉浦　正義と悪、魔法少女と悪の組織、そのぶつかり合った先にあるのは愛にあふれた展開でした。そんな『まほあこ』はおもしろすぎて、気づけばあっという間に放送が終わっていました。ステキな作品に参加できたことがとてもうれしいですし、私と同じくまだまだ『まほあこ』の世界を楽しみたいと感じている方も多いと思います。アニメはひと区切りつきましたが、原作はまだまだ続いていきますので、ぜひ一緒にこの作品を楽しんでいきましょう！

Q 魔法少女になったら何がしたい？

ジャガイモが好きなので、魔法少女になったら相棒にしたいです。ジャガイモにチュッてすると変身して、アツアツの揚げたてポテトになって、火傷地獄で敵を倒したり、マッシュポテトに変身してもらって敵を閉じ込めたりする。サツマイモなどのいろんなお芋を仲間にしていきたいです（笑）。

ヴェナリータ役

福圓美里

ふくえん みさと　1月10日生まれ。東京都出身。StarCrew所属。『僕のヒーローアカデミア』トガヒミコ役、『天国大魔境』ミヒヒメ役など出演作多数

ただのマスコットではないヴェナの魅力を引き出すために怖さを演出しました

目指したのは怖さの混じった演技

――魔法少女にあこがれて」の原作コミックの印象、魅力について教えてください。

福圓　うてなが次に何をするかわからないから、登場人物たちはもちろん、私もドキドキしながらページをめくっていきました。エッチなシーンももちろん魅力的ですが、うてなが非常にまっすぐな動機で恥ずかしがりながらも行動するし、自分が楽しいと思える一点に突き進んでいくので、SMチックな描写もエグみがなく、笑いながら受け入れることができます。女性も楽しめるコメディとして、とても魅力があります。

――福圓さんが演じたヴェナリータは、可愛い見た目に反して悪側のマスコットのような存在でした。

福圓　思わせぶりなセリフや、現時点では不可解な行動をとるので、まだ明らかにされていない設定や物語が気になり、興味をそそられますよね。オーディションを受けるときも、得体のしれなさが香るよう意識しました。最初にオーディション用に録音したあと、自分のなかで納得がいかなくて、マネージャーにお願いしてもう一度録り直させてもらいました。選んでいただけて、とてもうれしかったです。

――録り直したのはどんなセリフだったのでしょうか。

福圓　ヴェナの裏の顔がポロッと出るような部分でした。オーディション用のセリフはギャグっぽいシーンが多かったのですが、「ヴェナリータってもしかして……？」と一瞬垣間見えるくもないセリフで、「恐ろしさ」をより強調して演じなおしました。

――オーディションと本番のアフレコ時で演じ方、演技プランに変化はありますか。

福圓　ヴェナのようなタイプのキャラクターって、フラットな声で演じてもいいですし、かわいい声でお芝居をしてもおもしろいんですよね。だからこそ、オンエアに向けてあらためてキャラクターを作っていくなかで、演じ方の方向性に悩みました。最終的には「優しさは出さずクールな感じでお願いします」というディレクションを受けたので、変化の少ない表情に合わせたフラットなお芝居に調整していきました。でもうてなたちと掛け合いをしているとつい楽しくなってしまって、感情が出すぎてすこしリテイクすることも多々……。

――ヴェナリータの真の目的について、監督や原作サイドから話を聞いていましたか。

福圓　まったく聞いていません。ヴェナが本当は何を考えているかについては、小野中（彰大）先生の頭のなかにしかないんだと思います。ただ、案外ヴェナの目的が、実はものすごくどうでもいいことである可能性もゼロではないんじゃないかなと思ったりもします。"まほあこ"って、真剣なやり取りをしていたり、シリアスなシーンが描かれていたとしても、コメディとしての面白さを際立たせるための演出だったりしますからね。今後がどうなるのかが気になるので、これからもずっと原作を追い続けています。

――ヴェナリータが悪の道に勧誘したうてなの印象を教えてください。

福圓　予想の斜め上をいく発想をして、追いつけないところに行ってしまうキャラクターって、普通はなかなか共感しづらいように思います。だけど、うてなはすごく共感しやすくて、自分の道を貫いていく姿を応援したくなるキャラクターです。序盤の悪の組織が板についていない状態も、ちょっとがんばってしまっている状態も、いよいよ振りきって悪の組織の総帥に相応しくなっていく変化も、すべてが魅力的で

Q　SとMどちらのキャラが演じやすい？

A　私は「M」キャラ

Sっぽいキャラクターを演じていてもしっくりこないことのほうが多いかも。私自身が人の上に立って高い位置から何かを言うことが得意ではないのかな……。どちらかというとMキャラのほうがしっくりきますし、演じる機会が多いのもM寄りのキャラが多い印象です。ヴェナのお芝居は私のなかで新境地でした。Sキャラも上手く演じられるよう、がんばっております！

した。原作はテンポよく読み進められるぶん、うてなの変化を早く感じましたが、アニメではじっくりと変わっていく過程が描かれていたので、より身近に感じられたかも。

Q 魔法少女になったら何がしたい？

魔法少女の戦闘と言えばハートのステッキのような武器が王道だとは思うのですが、個人的にはサルファのようなフィジカルに振り切った戦い方にあこがれます。巨大な拳を使って戦っていましたが、ああいったごつい戦い方をしてみたいかも（笑）。ただ、戦わずに済むならそれがいちばんですよね。でも、話しあいで解決できたら魔法少女はいらないから、難しい問題ですね！

――うてなのどんなところが魅力的でしたか？

福圓 くるくる変わる表情も制御できないほどの情熱をいっそ楽しんでいくようになるさまも魅力ですが、アニメで言えば和泉（風花）さんの声の力も大きいと思います。大人しくて内気な女の子という特徴を前面に出しておりつつ、ドSな本性とのギャップがとても良かったです。魔法少女が大好きだけど、それを周囲に話すことができず、心のなかで愛情を育んでいた子が一転して、大きく様変わりする。そのインパクトは、アニメでより一層強く感じました。

――うてなの成長や変化についていは、ヴェナリーダの扱い通りといったところでしょうか。

福圓 うてなが変わるきっかけはたしかにヴェナの勧誘ですが、話数が進むごとに少しずつエッチな雑誌を家に持って帰るなど、彼女自身の自発性も現れてきましたし、早い段階でヴェナの手を離れた印象があります。キウィやこうりすと出会い仲良くなったり、本人の個性的な面が出てきたりして、その成長というか変化も丁寧に描かれていました。SMシーンがしっかり描写されている点はもちろんですが、それ以外のシーンも丁寧にキャラクターの心情を追いかけているところが素晴らしい！

――本作で共演されたうてな役の和泉風花さんには、どんな印象をお持ちですか？

福圓 登場人物の女の子がエッチな顔をしているところを見て「表情がいいですよね」と言っていたこともあるし、「かなり際どいシーンだけど大丈夫だろうか」と感じていたら、「あの姿がかわいいですよね」って笑顔で話していて、「対決」ではなく「お仕置き」にしてしまうという、誰にも予想できない展開になったことがすごい。ロードエルメのセリフは悪役の王道セリフですが、うてな自身は世界征服にはまったく興味がなく、「なに言ってんだこの人」というドン引きの反応を見せるところも大好きです。

――ほかにも印象に残っている場面があれば教えてください。

福圓 キウィもお気に入りなので、彼女が「パーカ」って言うシーンはすべて好きです。あの言い方が好きすぎて、聞くだけで笑顔が浮かびますね。それと、「L・O・V・E・リ ロコ♡」の曲が流れるシーンもパンと頭に浮かんだので、ロコムジカによるライブシーンも強く印象に残っているんだと思います。あの絶妙な歌は、何度も聴きたくなります。

――「まほろこ」は放送のたびにXなどのSNSで話題になっていましたが、人気の理由はどんなところにあると思いますか。

福圓 「あこがれ」という気持ちの解像度がすごく高くて、そこが共感しやすいポイントなのかもしれませんね。

――福圓さんも共感するところは多かったですか？

福圓 普段はその奥にしまってある自分の気持ちを解放させた瞬間のうてなたちを見ていると、彼女たちもにはいつも輝いていてほしいんですが、日常の中で我慢をしていたからこそ解放された瞬間がひときわ輝くままならなさというか、誤解を恐れずに言うなら、"面倒臭さ"が感じられて、そこがとても好きです。私自身も、推しがいて、推しに声をかけてほしいという気持ちがある一方で、推しから認識されたくないという面倒臭いオタクなので（笑）。

――アニメの放送は終了しましたが、原作は続いていますね。

福圓 序盤のほうはヴェナがボケてうてながツッコむというギャグの流れができていて、その関係性を純粋に楽しむことができていました。ただ、魔法少女たちが増えていくにつれていろいろな設定が明らかになってきて、ヴェナがいよいよ黒幕感が出てきたえにギャグに絡むこともなくなってきた印象なので、ちょっと寂しさを感じています。アニメでもうてなを中心にギャグパートでも絡んでいたのですが、後半はだんだん真面目な話になってきて、みんなと会話しなくなってきているので、今後また違った機会があるなら、ギャグもぜひやりたいです。

――最後に、本作を応援してくれているファンにメッセージを。

福圓 一見するとエッチなところが目につきやすい作品ですが、実際に覗こうになった方ならエッチな展開の、その中核にあるストーリーや設定の魅力に気づいていただけると思います。そんな"まほろこ"の魅力を、まだ知らない方に布教してほしいです。その輪が広がって縁が続けば続編が出るかもしれません。今後とも応援よろしくお願いします！

花菱はるか／マジアマゼンタ役

前田佳織里

まえだ・かおり　4月25日生まれ。福岡県出身。アミューズ所属。『ぼんのみち』十返舎なしこ役、『ラブライブ！虹ヶ咲学園スクールアイドル同好会』桜坂しずく 役など出演作多数

「あこがれ」の気持ちが原動力になるところは私にとっても同じです

ギャグと感動が入り乱れる作品の魅力

――原作コミックの印象について教えてください。

前田　タイトルだけ聞いたときは「魔法少女と悪が戦うのかな」と思いましたが、主人公のうてなが、いきなり悪の組織の女幹部になるという意外な幕開けで驚きました。また、各キャラがわいくてエッチな要素もあるけど、そこには深い愛情も描かれています。戸惑ったり、葛藤しながらも、好きなものに愛情を傾けていくうての気持ちを追いかけていくのが楽しいです。オーディションに向けて第1巻を読み始めましたが、ハマった勢いで全巻買ってしまいました（笑）。

――はるかやマゼンタの第一印象はいかがでしたか？

前田　オーディションの資料を拝見したときに直感的に「この子を演じてみたい」と思いました。ピピンときました。純粋な正義の心の持ち主で、魔法少女として一生懸命がんばっているけれどもいい子。だけどいい子すぎて、エッチなことに関しても免疫がないから、エロトラブルに巻き込まれてしまう。第4話の身体にシールを貼りつけるところがわかりやすいかもしれません。すべては純粋さゆえなんです。

――芯がブレないところも魅力的ですよね。

前田　一本軸を通すのは演じる上で意識していたところです。同じトレスマジアの小夜がどんどんMに目覚めていくなかで、はるかがブレてしまうとトレスマジア側がおかしくなってしまう。だからどんな目にあっても、ピュアに正義を追い求め、平和を守るために一生懸命なお居をしました。後半にいくにつれてツッコミする機会も出てきたので、そんなときは限られた言葉、尺のなかでどれだけおもしろくできるかを意識していました。

――今お話に出た小夜のイメージについても聞かせてください。

前田　クールなお姉さんタイプの巫女。子供から人気が出そうですよね。個人的にもそういった魔法少女が好きなので、最初に登場したときはまさにあこがれのキャラを見ている感じでした。ただ、物語が進むにつれてだんだんとおかしくなっていって、ドM化し、この弱さを乗り越えようと真化を果たす。SMやコメディが物語を豊かにしていて、そのかの部分がすごく感動する。『まほあこ』の真髄を体現しているようなキャラだと思います。

――薫子についてはいかがでしょうか。

前田　おしとやかな見た目と京都弁を使うはんなりした印象もありますが、心のなかに狂犬を飼っています。そのギャップが素晴らしい。原作を最新話まで読んで、薫子とはるかの接点が増えていくことを知っていたので、アニメで薫子との掛け合いを演じるときも、すこし特別な思い入れを持っていました。演技の面で言えば、もちろん壁ドンステキなお芝居をされていましたが、池田（海咲）さんは朝イチの収録というだんだんとおかしくなっていって、ドM化し、この弱さを乗り越えようと真化を果たす。SMやコメディが物語を豊かにしていて、そのかの部分がすごく感動する。『まほあこ』の真髄を体現しているようなキャラだと思います。

――薫子についてはいかがでしょうか。

前田　おしとやかな見た目と京都弁を使うはんなりした印象もありますが、心のなかに狂犬を飼っています。そのギャップが素晴らしい。原作を最新話まで読んで、薫子とはるかの接点が増えていくことを知っていたので、アニメで薫子との掛け合いを演じるときも、すこし特別な思い入れを持っていました。演技の面で言えば、もちろん壁ドンステキなお芝居をされていましたが、池田（海咲）さんは朝イチの収録という声が出しづらい状況のなかでも薫子の威勢のいい声を見事に演じていました。

Q　SとMどちらのキャラが演じやすい？

A　私は「M」キャラ

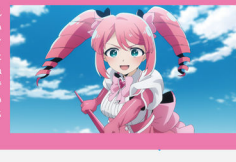
なぜかドMなキャラクターを演じさせていただく機会が多いんです。ほかの作品でもお尻を叩かれる役を演じたことがあります。Sっぽいキャラクターをまだ演じたことがない、というのもありますが、どちらかというとMのほうがやりやすいかな。Mっ気のあるキャラクターを演じているほうがいきいきしてます。

意外性にあふれた2つの陣営の交流風景

――エノルミータの面々の印象についても聞かせてください。

前田　うてなは第1話と最終話を比べると別人のように成長しましたよね。最初は気弱でおどおどしていたけど、かわいいものをイジメたいという気持

Q 魔法少女になったら何がしたい？



もし自分が魔力として手に入れるなら、ネロアリスみたいにぬいぐるみを使いたいです。ぬいぐるみを大きくしたり、命を宿したり。部屋にぎっしと並んでいるぬいぐるみたちはみんなお友達ですし、小さい頃から大切にしている宝物もあるので、その子たちと一緒に戦えたらうれしいかな。

ちを自覚していって、最終的には総帥として発言するまでに……。カリスマ性があるのもいいですよね。ロード エノルメと戦っているときに「まらないって言い放つところも自分を貫いていました。総帥になっても組織を大きくしようなんて考えず、あくまで自分の欲望を満たそうとするところが純粋でカッコいい！

――変身前は、はるかたちと仲良くしていますね。

前田　認識阻害がない条件下とはいえ、悪と正義が仲良くしている光景ってなかなかないですよね。不思議な感覚です。はるかとうなの関係性については、はるかが「放っておけない」と思っているところが大きい気がします。純粋に仲良くなりたいという気持ちがレスマジアとエノルミータの変身前の関係性においては大事です。

――次はキウイについてお願いします。

前田　最初は曲者が来たなと思って、厄介な展開になりそうだと感じたんですが、ベーゼに負けてからの一途さがたまらない（笑）。あのまっすぐな愛は涙腺をゆるめるし、戦っている姿がまたカッコいい、その戦いのなかでもねにうなることを考えているので、キウイの戦闘シーンは毎回ティッシュやハンカチが必須でした。

――はるかと絡む機会の多かったこりすについては？

前田　かわいいですよね。見た目だけで見るならダントツでこりすちゃんが好きです。不思議な国のアリスみたいなリボンがついていて、実の自体はとても高いけど、すぐに眠くなるところや、じつは寂しがり屋なところがものすごく好きです。日常パートでも、はるかがお姉ちゃんらしさを発揮してこりすちゃんの面倒を見ていましたが、ああいう関係性がすごく大好きなんです。まさかその後にエッチな展開になるなんて思いもしませんでした（笑）。

――真珠についてはいかがですか。

前田　ネモと一緒に本作でいちばん濃厚なシーンを担っていますよね。一生懸命で、ちょっと強気でキャンキャン言うけど、最終的にはいじられキャラになるところにキュンとします。そしてなんと言っても挿入歌の「L・O・V・E・リー ロコ♡」が頭から離れない！ YouTubeの動画もものすごく再生されていますけど、本当に中毒性があって、こんなに上手にさざと千な芝居で歌うことができるんだ、って驚きました。

――ネモの印象も教えてください。

前田　津田（美波）さんと演じるネモのツッコミがすごく気持ちよかったです。収録現場でもナイスツッコミで思わず笑ってしまうことが多くて、クールでツンケンしていて、最初のほうは真珠とケンカップルのような描かれ方をしていますけど、じつはネモのほうが激重な愛情を持っている、そこがたまらないですね。すごく尊い最推しカップリングですね。

――はるかが登場するシーンで印象に残っているのは？

前田　おもしろピソードです。第1話の収録が始まった段階で、みんなで「第何話に来るんだろうね」って話をしていて、第4話の身体でシールを貼るピソードとおわせていう来るのか気になっていました。第6話は赤ちゃんモノローグ、普段のはるかの話し方、喘き声、そういったいろいろな演じ方を切り替える必要があるので、とても大変でした。音響監督の本山（哲）さんが役者がやりやすいように配慮してくださったおかげで、スムーズに進行できてありがたかったです。

――第6話が印象に残っているファンもいると思います。

前田　赤ちゃんプレイを通して、トレスマジアの過去が描かれる天才的なストーリー構成でした。ちょっとつついんとんな薫子、真面目な小夜、2人を優しく包むはるか。トレスマジアの3人が、ますます大好きになりました。

――第12話のマジアマゾンタが巨大化するシーンも衝撃でした。

前田　最終話手前の大事な役割を任せていただけました。服のなかにみんなが入ってきてモゾモゾして、マゾンタが喘いでいるシーンが楽しかったです。市民の人たちも、マゼンタのパンツをスマホで撮影しまくっているし、コメディとして最高でした。わちゃわちゃと戦って最高でした。わちゃわちゃとされる流れは、大団円感があってステキでした。巨大化弊がりで言うと、第11話のシスタモガンントとオバルトの戦いも大好き。キウィのベーゼに対する想いがあふれているところもそうですが、今まで扱いきれていなかった自分の力を解放してパワーアップして戦う姿がとてもカッコいい！ 戦闘シーンのこだわりもこの作品の大きな魅力です。

――アフレコ現場で印象に残っている出来事はありますか。

前田　「はるかは天真爛漫に演じていただければ大丈夫です」というディレクションをいただいたおかげで、第1話から自信をもってはるかを演じることができました。それに、音響監督の本山さんを始めとしたスタッフの皆さんがとても支えてくださったので、安心して演技に集中できました。

――キャストさん陣との思い出深いエピソードはありますか。

前田　津田（美波）さんと日笠（陽子）さんは、私がアニメで初めてレギュラー登場する役を担当したときの作品なご一緒させていただいたご縁があるのもしれません。それ以降もずっとあこがれの役者さんです。今回そんな2人と共演できたので、あこがれを力に変えて演じました。これからも共演した方とのご縁を大切にしていきたいなと思っています。

――最後にファンの皆さんにメッセージを！

前田　『まほあこ』は自分の好きという気持ち、愛情に対してまっすぐになることの大事さを教えてくれる作品です。エッチなシーンがたくさんありますが、笑えて、泣けて、アツくなることもできる超すごい作品です。まずは一超あこがれV er.）をぜひ楽しんでいただいて、そのあとは原作もお手に取ってみてください。そして私自身、再びはるかを演じたいなと強く思っています。引き続き応援よろしくお願いします。

水神小夜／マジアアズール役

風間万裕子

かざま まゆこ　10月2日生まれ。東京都出身。アイムエンタープライズ所属。『怪獣８号』五十嵐ハウア役、『六道の悪女たち』櫛子台唯役など多数出演

アズールとベーゼの気持ちは「好き」と「宿敵」の感情が混じり合っている気がします

ボロボロになるほど小夜の魅力が輝く!?

――原作の魅力や印象について教えてください。

風間　うてなをはじめとするすべてのキャラクターがとても素敵で、お話のテンポもよくコミカル。エッチなところもありますが、楽しく原作を読ませていただきました。SMがうまくコメディとして落とし込まれていて、「なるほど！」と思いました。

――小夜の第一印象は？

風間　凛々しく見えたのですが、過激な責めを受けていく中で悶々としているところや滝行のシーンを読んで、クールなだけではないということがすぐにわかりました。お芝居をするなら恥ずかしさを捨て思いきりやらないといけないキャラクターなので、カいっぱい演じさせていただきました。何度も原作を読み込んだので、アフレコの際もしっかり気持ちをのせることができました。

――ディレクションについてもお聞かせください。

風間　第10話で、サルファルぶっ飛ばされてお星さまみたいになるシーン。最初は普通に「あ！」って言いながら飛ばされていたのですが、ディレクションで「このとき小夜は愛に目覚めているので、『い』をつけて『あーい』と言ってください」とご指摘を受けました。「そこまで遊んでいいの!?」と驚きました。

――小夜は第７話の敗北シーンがSNSでも話題になっていましたね。

風間　アフレコ当日は、ものすごく緊張しました。いずれくることがわかっていたので、第１話の収録が始まったときからずっとソワソワしていたのですが、実際収録に臨むときは、全力の戦闘態勢で演じました。全話を通していちばん集中していたんじゃないかな。演じきることができたのは、うてなの和泉風花さんのおかげです。２人きりで収録させてもらえて、テストの段階から掛け合いの熱量が高くて、お互いに激しくラリーを繰り返している雰囲気でした。本番になると和泉さんのアドリブがテストの倍くらいに高まっていたので、「それなら！」と思いつつ、こちらも楽しく演じました。

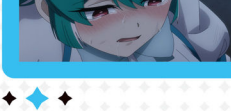
――演じるうえでとくに意識した点はどこですか。

風間　私は、好きな子ほどボロボロになっていてほしいんですよね。もちろん小夜のことは大好きなのですが、うてなに感情移入することも多く、「いいぞもっとやれ」と思うことがあって。ですが、その気持ちは小夜を演じるうえで、必要ない気持ちでもある。だから小夜の気持ちにしっかり寄り添って、感情のロードマップを作りました。この時点ではこういう気持ちだけど、ここに来たらこんなふうに変化する、みたいな流れを自分のなかで用意しました。第７話の掛け合いでも、あまりに早くアズールが闇堕ちすると、ベーゼも萎えてしまうと思ったので、それを避けるためにギリギリのタイミングをはかって演じました。

――そんな小夜を支えるトレスマジアの２人に対する印象は？

風間　はるかは“まほあこ”の良き友。魔法少女らしさがギュッと凝縮されていますし、トレスマジアのセンターは彼女しかいない！　小夜はエノルミータの責めを受け入れ、菫子はものすごく抵抗しているなかで、はるかは一貫して自分がエッチなことをされている自覚がない。そんなところが、この作品のエロ度をマイルドにしているのかな

Q　SとMどちらのキャラが演じやすい？



A　私は「M」キャラ

小夜はドMでしたが、じつは以前、ドSなキャラクターを演じたこともあるんです。両方を演じたところ、どちらかというとMの演技のほうがやりやすいかな……と。楽しい時間が「え、もう終わりなの？」と感じて残念に思う気持ちはすごく共感できるので、演じやすいです。ただどちらの演技もすごく楽しかったのは間違いないです。

と感じます。はるかがいることでバランスがとれているので、とても大事な存在です。

――薫子についてはいかがですか。

風間　いないとトレスマジア組がまとまらないし、ワチャワチャとした雰囲気のなかで貴重なツッコミ役を担ってくれているというのが大きいと感じます。ちょっとオカンめいたところもありますよね。薫子がいるからこそほかの2人が輝けるので、感謝の気持ちでいっぱいです。小夜に対する当たりが強いですが、それすら小夜は愛として受け止めてはっちゃけているので、とても大事なメンバーです。

――小夜は2人をどう思っているのでしょうか。

風間　親友であり大事な仲間だと感じます。マゼンタとサルファががんばっているのに、自分だけ愉しんでしまったとき、肩を落として下を向いて「ごめんなさい」と詫びますよね。そういうところからも、2人を大切に思っていることが伝わってきます。

小夜を演じるなかで自分自身も成長！

――アズールとベーゼの関係性については、いかがでしょうか。

風間　いちばんバチバチやりあった宿敵であり、敵同士という関係を越えてしまったかもしれません。アズール自身もベーゼに特別な想いを持っている気がします。この特別な想いというのは、「敵」「好き」「正義」「悦び」など、いろいろな価値観と感情が並存するぐちゃぐちゃなもので、これが"愛"なんだと思います。敵同士なのに、変身前は一緒にオイル塗りをするくらい仲がいいところも含めて、一筋縄ではいかないいびつな関係性で、だからこそすごく魅力的。ままならない想い、一言では表現できないカップリングに魅了されますよね。またベーゼは「かわいいものをめちゃくちゃにしたい」という屈折した愛情を持っていて、そのために一生懸命邁進する。最高の大人のエンターテインメントです。

――キウィについては？

風間　最初の印象はダウナー系のギャルでした。アニメになって古賀（葵）さんの声がついたことで、精神的な幼さ、一途さが感じられて愛着がわきました。原作とアニメで大きく印象が変わったキャラクターです。「うてなラブ」の気持ちを表す「チューしよチュー」のセリフも表現の仕方がとっても素直でかわいくて。服装もエッチですし。うてなをめぐって小夜と三角関係が形成されそうな雰囲気もありますが、私としては、うてなの本妻は小夜だとうれしいなって思います（笑）。

――こりすの魅力もお願いします。

風間　かわいくて強い！　さらなる力に覚醒したらうてな以上のすごい存在になるのではないか、という気がしております。それに、杉浦（しおり）さんがものすごく悩まれていた記憶があります。ほとんどしゃべらないうえに、小さな声だけで会話することになるので、大変そうだなと思っていました。小夜目線だと、ドールハウスを通して責められたことはあったけど、こりすとはあまり関わっていないんですよね。今後2人の絡みがあったらおもしろそうですし、見てみたいです。

――真珠とネモ、二人の印象も気になります。

風間　尊い関係性ですよね。私は、ネモも大好きなんです。ギザ歯のビジュアルがいちばん刺さりました。オーディションのときにネモを受けるか悩んで、好きすぎるからこそ逆に私が演じてはいけないと思ったほど、すごく好きです。津田（美波）さんの演技を聞いて何度も「ありがとうございます」と、心の中でお礼しました。この2人に関しては、第10話でいちばん過激なことをやっているのでそちらの印象が強いかもしれませんが、離れた視点から物語を見てみるとじつはいちばん常識的だと思っています。トレスマジアでいうところの、薫子ポジション。エノルミータにいなければならないツッコミ役だけどたまにボケる、みたいな。そのポジションがいいなと思いますし、5人で行動するようになってからのコミカルさも好きです。なにかあっても、最終的には一緒に行動してくれるところも含めていい子たちだなと感じます。

――小夜にまつわるシーンでとくに印象に残っているのは？

風間　やはり第7話です。演じたときだけでなく、地上波放送をオンエアで視聴するときも緊張しすぎて、和泉さんと通話を繋ぎながら観ました。全13話のなかでいちばん記憶に残っています。アドリブで一生懸命演じた声がすべて消えていて驚きましたが、《超あこがれVer.》には全部収録されていると聞いて安心しました（笑）。また、第11話でヴェナリータがシスタギガントに指示を出してロードエノルメをベチャッとするところ。画面全部がヴェナリータになっているところに福圓（美里）さんの淡々としたお芝居も合わさって、原作よりも遥かに怖かったです。

――第13話では、マジアアズールの真化が描かれましたね。

風間　第1話から第7話を経て最終話に至る流れは、うてなとは別の方向で成長していく展開が描かれていたので、お芝居も組み立てやすかったです。小夜を演じるなかで私自身の演技も成長していったので、すべてがいい思い出です。真化をしてからの演技は、言葉に出しているところはカッコよさを意識しつつ、心の声に関しては視聴者の方たちが笑ってくださるような方向に振りきって演じました。バトルシーンでOP主題歌まで流してくださって、まるで主役のように描いていただけたことがすごくうれしかったです。小夜以外のキャラクターにももちろんスポットが当たっていて、アニメを観終わったときには自然と拍手していました。

――最後にファンの皆さんにメッセージを！

風間　毎週楽しくアフレコさせていただきましたし、記憶に刻まれるシーンもたくさんありました。ネットで「こんなエッチな演技をするなんて、声優の家族が人質に取られているに違いない！」みたいな反応を拝見することもありますが、人質に取られているわけではないので安心してください（笑）。もし第2期があるならぜひまた演じたいので、応援よろしくお願いします。

Q 魔法少女になったら何がしたい？

もし本当にどんな能力でも手に入るなら、時間を止められる魔法少女になりたいです。時間を止めている間にたっぷり寝て、時間を動かしている間は仕事や遊びに費やしたいかな。ただ、時止め能力は代償も大きそうなので、あくまで自分にしか使わない予定です（笑）。

天川薫子 / マジアサルファ役

池田海咲

いけだ みさき　1月25日生まれ。京都府出身。賀プロダクション所属。『恋は双子で割り切れない』浅野麗良役、『超普通県チバ伝説』舎川あこ役など出演多数

大好きなキャラクターの演技に自分の故郷である京都の方言を生かせてうれしかったです

京都弁を駆使して薫子の魅力を引き出す！

――原作の魅力を教えてください。

池田　気がついたらマンガを全巻購入していて、ただのファンになっていました（笑）。エッチなシーンはもちろん、コメディ部分とシリアス部分のギャップもとても魅力的です。主人公のうてなは、普段は魔法少女オタクなのですが、変身するとドSの本性を出したりして、なんだか応援したくなる存在です。そして魔法少女たちもただエッチなやられ方をするだけでなく、それぞれの矜持や自分の目指すヒロイン像を持っているところが素敵です。うてなの本気と魔法少女の本気がぶつかり合うところから目が離せません。

――池田さんは本作で薫子を演じられています。

池田　京都出身なので、京都弁のキャラクターには親近感がありますし、絶対に演じたいと思っていました。オーディションで合格したときは、とてもうれしかったです。日常シーンとバトルシーンで、それぞれのキャラの振れ幅が大きいなかで、とくにジェントコースターみたいな子でした。京都弁でおっとりしているかと思いきや、エピソードを重ねることに好戦的な面性が明らかになっていくし。小野中（彰太）先生の描き方がとても素敵で、「まだこんな面もあるんだ。え、こんな面も!?」と、次々と新たな表情が見えてきて、いろんな面を楽しむことができる子でした。

――京都では薫子のようなしゃべり方をする人が多いのでしょうか？

池田　舞妓さんや、お茶を召した方は薫子のような話し方をします。私の場合は、両親が共働きで祖母に面倒を見てもらうことが多かったので、その影響が大きいかも。京都弁がわかるのがアフレコ現場で私だけだったので、私が実質的な方言監修係でしたが、ミスしても誰にもわからないからこその緊張感はありました。SNSなどで視聴者の皆さんから「本物の京都弁だ！」というコメントをいただけたので、ホッとしています。

――薫子の魅力とは？

池田　自分に正直で、芯をしっかり持っていて、やりたいことを貫いています。だからこそ、嘘をついたり誤魔化したりしないところはあこがれます。私は「あれもいいな、これもいいな」と、目移りしてしまうので、尊敬するとともに、活躍を応援したくなります。

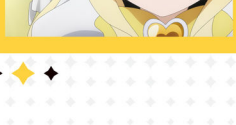
――アフレコ現場で印象に残っている出来事も教えてください。

池田　アニメでは初めて大きな役をいただきました。現場では、「有名な方がいっぱいいる！　私、大丈夫かな……」といった緊張と不安でドギマギになっていましたが、皆さんがすごく優しくて、すぐに打ち解けて仲良くお話できるようになりました。打ち解けてからはのびのびと演じることができ、「ステキな現場に恵まれた！」と感じていました。ラジオ収録も和気あいあいとした雰囲気で、エッチなシーンに関する話題があっても恥ずかしさは一切なく、話すのが楽しすぎて言葉が止まらなくなりました。収録が終わって時間も経っていますが、皆さんと会うと今でも楽しくお話ができるくらい仲良くなれました。

――スタッフとのやり取りで印象に残っている思い出はありますか。

池田　SNSで公開するボイサンプルを収録したときに、マゼンタ役の前田（佳織里）さんとアズール役の風間（万裕子）さんは「褒められているとき、ちょっといかがわしい感じでお願いします」という指示を受けていたのですが、「いかがわしい感じ」ってなんだろうと思いながらやっていました。

Q　SとMどちらのキャラが演じやすい？



A　私は「S（?）」キャラ

京都弁のなかに含まれる複雑なニュアンスを生かすならSキャラだと思いますが、ベースを見ていると、気持ちよさを与えなければいけないからSって大変だなって感じるんですよね。薫子はSがしっくりきますけど、私自身はまだ見えてこないので、これからいろんな役を演じるなかでどちらがしっくりくるのか見極めていきたいです。

が、私に来たディクションは「もっと汚い声で演じてください」だったんです。「え、ここまでやっていいんですか？」と思いながら、全力で荒々しい声を出してOKをいただきました。以降の収録ではどんどん荒れたときの声を激しくしていきました。自分が思う薫子をすべて出しました（笑）。

――仲間である、はるかの印象を教えてください。

池田　妹が3人いるのもあり、面倒見がいいですよね。小夜や薫子に対してもお姉さんぶりたくてうずうずしているような気がして、そんなところに惹かれます。変身後はいわゆる王道の魔法少女なのですが、ちょっと天然っぽさがあって、そんなところも愛らしいです。つまり、とてもかわいくて最高の女の子です。変身前も変身後も、優しい太陽みたいな空気感なのがたまらないな。

――小夜の印象は？

池田　クールで背が高く、巫女としてキリッとしている。そんなお姉さん系キャラかと思いきや、じつはドMのド変態。頭がよさそうに見えて補習を受けているところといい、ギャップがとても魅力的。SNSなどで見かける「アズールはもうダメだ」のコメントに、思わず笑ってしまいましたが、この落差が愛おしい。ダメな姿をたくさん見せながらも、最終話では真化を遂げて最高でした。アフレコ現場でも、最終話のアズールの変身は大盛りあがりでした。

アニメの先にある薫子の活躍に期待！

――エンディームの面々の印象についてもお聞かせください。

池田　うてなは、序盤はヴェナリータに振り回されるかわいそうな女の子で、「がんばれ！」と、心の中で応援していました。ところが、いつの間にか「うてな様！　ベーゼ様！」と崇拝してしまう存在になっていて、あまりの変化にビックリしました。

――キウィについてはいかがですか。

池田　ドSに目覚めていくてなと、彼女に対する好意が高まるにつれて、おかしくなっていくキウイ。さらに2人が相乗効果でどんどんおかしくなっていく。この絶妙なスパイラル構造がすごく好きです。見た目のデザインも第5話でうてなが熱弁していたように「癖のかたまり」。軍服って萌えますよね。薫子にとっては犬猿の仲ですが、掛け合いをしている私はすごく楽しいです。第13話で泳ぎの対決をしていましたが、あのようなところからも薫子にとっては決着がつくことが大事なんだろうなって伝わってきます。

――こけすの印象も教えてください。

池田　かわいい！　不思議な力に守られているのか、他の面々と違ってあまり安心感がありません。アニメでは変身するときに、こそこそセリフをしゃべっていますが、あのセリフを聞いたときはアフレコ現場がドッとわきました。精神年齢はいちばん幼いなのではと思うシーンも多いです。キウィと遊んであげている感もありますし、周囲の状況をいちばん俯瞰で見ていそう。

――真珠とネモの印象は？

池田　この2人はセット感！　原作を読んでいたときに、登場した瞬間「この子たちは人気が出る！」と直感しました。ロコムジカが歌う「I・O・V・E・リーロコ♡」も、たまらないです。YouTubeの動画の再生数が100万回を超えていますし、私もSNSで応援した甲斐がありました（笑）。ネモの素直じゃない態度から漏れ出す真珠への愛も大好きです。2人に対する王さまは、ほかのキャラクターに感じる王モとちょっと違う気がします。永遠に見ていたくなります。

――お気に入りのエンドは？

池田　変身前の敵味方関係なく和気あいあいとしているところもすごく好きなんです。アニメは原作の内容を膨らませるような展開が多かったので、原作を読んでいたときにはわからなかった一面が見えたり、アニメでしか描かれていない掛け合いがあったり、そういうところが、とくに第6話は原作にはないシーンがいろいろ描かれて印象に残っています。薫子が転校してきてはるかたちと出会うシーンはアニメならではだったので、こんなにエモいエピソードを追加してくださったことに感謝しています。

――変身せずに魔物を倒していた姿はインパクトがありました。

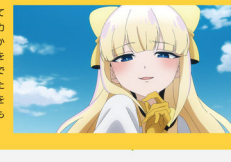
池田　魔物をタコ殴りにしてマヤンタに勧誘されるシーンが原作にもあって、ものすごく楽しみにしていたところです。それまで一匹狼だった薫子が2人にちょっと近づいて、「仲間ができるのもいいかも」って思う大事なシーンなので、しっかり演じることができて本当によかったです。同じ第6話のなかでマヤンタの赤ちゃんプレイがあったので、そこもインパクトありましたよね（笑）。

――サルファが褒められているシーンでとくに思い出深い場面はどこになりますか。

池田　じつはやられシーンで強く印象に残っているところはほとんどなくて。どちらかというとやられた後のほうが印象に残っていて、たとえば第13話でタコに歯が立たず気絶してしまうところ。真化したアズールに助けられましたが、あのときのサルファは複雑な気持ちだったと思うんです。「変態と変態が楽しんどるだけやろ」っていうセリフが挟まったので、わかりづらくなっていますが、何もできず助けられたことにサルファなりの悔しさがあって。その結果、彼女自身の成長に繋がっていくのですが、そこはぜひ原作コミックスをご覧いただければと思います。

――最後にファンの皆さんにメッセージを！

池田　キャスト同士で「この先も演じたいよね」と、よく話していました。私自身も『まほあこ』の大ファンで、すでに原作を持っていたのにアニメ放送後の特典冊子目当てにマンガを全巻購入するくらいハマっています。このインタビュー記事を読んでいる皆さんもきっと熱心なファンだと思いますので、一緒に好きの気持ちを発信していけたらと思っています。みんなの応援が、第2期につながりますように！



キャストの皆さんが選ぶ!
《超あこがれVer.》名シーン

キャストの皆さんに《超あこがれVer.》でしか見られない・聞けないシーンのおすすめを聞いた。
数々の名シーンをチェック!

「第10話のロコムジカとルベルブルーメの絡みは、この作品でも屈指のエッチなシーンで、すごく印象に残っています」(福圓)

「自分が関わっていないところですが、第10話もすごく好きです。私たちトレスマジア組の収録はAパートで終了したので、Bパートのロコルベの絡みをモニター越しに聞いて、『え、これ大丈夫なの?』と、ずっと思っていました。ぜひこちらも《超あこがれVer.》をチェックしていただきたいです」(風間)

「第10話のロコムジカとルベルブルーメの絡みは、相坂優歌さんと津田美波さんがどこまで声を入れるか、どんなふうに演じるかを深く相談しあって作り上げたシーンです。ぜひ音声がフルに収録された《超あこがれVer.》で楽しんでほしいです」(古賀)

「第10話のロコムジカとルベルブルーメのエッチなシーンです。アフレコ現場でずっと2人のお芝居を聞いていましたが、『これは私たちが聞いていいのか? 2人だけにしたほうがいいのでは?』と思うくらいの熱演でした。そんなところも、ぜひノーカットで聞いていただきたいです」(前田)

推し コメント

「第10話のロコムジカとルベルブルーメのエッチなシーンは、声がカットされまくっていましたね。こちらも《超あこがれVer.》では、何倍もすごいことになっているのでぜひチェックしていただきたいです」(池田)

Episode10「ロコ×ルベ」

ロコムジカ&ルベルブルーメの絡み

マジアベーゼに強制されながらも、2人が愛を確かめあった名シーン。インパクトが強く、ほとんどのキャストがこのシーンを挙げていた。

Episode07「逆境アズール」

屈服するマジアアズール

口枷を付けられ、パンダの魔物にされるがまま責められてしまうマジアアズール。屈服したときの表情も印象的だった。

「第７話のパンダの遊具を三角木馬に見立てた演出も見どころです。巨大化した花などもまがまがしさよりファンシーさがありますし、道具を使って演出されるシーンはとくにいいなって感じます。この作品は規制部分が全解放された状態こそ完成形だと思いますし、エッチなシーンも重要なバトルシーンのひとつだと思うので、ぜひどのシーンも見逃すことなく見届けていただきたいです」（福圓）

「アズールは責められるシーンが多くて裸になる機会も多かったですし、そのぶん光もたくさん使われていたので、彼女が乱れるシーンはどこもおすすめです。彼女が作中でいちばん乱れていたと思います」（古賀）

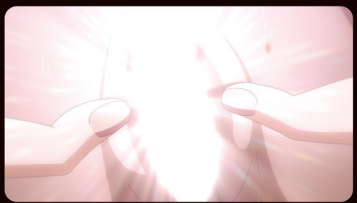
「第７話はもう、言わずもがなだと思います。TV放送ではガッツリ音声が削られていました」（風間）

推 厭 コメント

Episode12「総帥マジアベーゼの決断」

うてなからアズールへのマッサージ

マジアベーゼに変身していなくても、欲望を解放してしまったうてな。そのコミカルな演出も含めて、キャスト間で話題になった。



推 厭 コメント

「第12話のうてなからアズールにマッサージするシーンが印象に残っています。お尻がピカって光りますけど、あの部分、脚本の上書きに『臭が光る』って書かれているんですよ（笑）。アフレコのときは『臭が光るってなんだ!?』と思ったんですけど、オンエアを観ると『本当に光ってる！』と、深夜なのに大笑いしてしまいました。あのマッサージシーンは《超あこがれ Ver.》でも必見です」（池田）

「第12話でうてながアズールをマッサージするシーンはおすすめです。地上波放送ではアズールの喘ぎ声がカットされていたので、《超あこがれ Ver.》で風間さんの熱演をぜひとも聞いていただきたいです」（和泉）

Episode03「爆裂娘レオパルト」

妄想のなかのマジアアズール

マジアベーゼに叩かれながら、妄想のなかで全裸になってしまったマジアアズール。このころから次第に小夜の欲望が目覚めていく。

推 萌 コメント

「第３話で触手に拘束されたアズールがなぜかいきなり全裸になるシーンは、「どうしてそうなった!?」とビックリして印象に残っています。《超あこがれ Ver.》は、制作さんのこだわりが堪能できます。プロの仕事を楽しんでいただけるので、ぜひチェックしてみてください」（杉浦）

「第３話のアズールが触手で責められているシーンは謎の光がたくさん入るので、《超あこがれ Ver.》で観るのがオススメです。《超あこがれ Ver.》を観るとキャラクターの肌感など細部までこだわりぬいて作られていることがよりよくわかります。腹筋がバキッとしている子がいればモチモチとした子もいて、女の子の体型のかわいさが全部詰まっています。はるかがまた絶妙なサイズをしていてすごいので、ぜひ確認してみてください」（前田）

Episode05「不思議の国のネロアリス」

トレスマジアの家族ごっこ

ドールハウスに閉じ込められたトレスマジアが、家族ごっこを始めてしまう。みんながノリノリだったことがキャストの印象に残ったようだ。

推 萌 コメント

「第５話でトレスマジアの３人が家族ごっこをしながら絡み合うシーンは印象に残っています。アズールがママ役だから姫役のサルファにおっぱいを吸われるのはわかるのですが、マゼンタまで「どれ私も」とか言い出して、「なんでお前も吸うねん！」って思わず内心でツッコんでしまいました」（杉浦）

「第５話でトレスマジアがエッチな家族ごっこをするシーンも好きなので、ここも《超あこがれ Ver.》でご覧いただきたいです。３人がだんだんおかしくなっていくところもおもしろいですし、アズールとほか２人の温度差もおもしろいです」（和泉）

Episode02「その名は、マジアベーゼ」

目隠しで責められるマジアアズール

マジアベーゼに責められ、ゾクゾクしてしまっているマジアアズール。風間さんはものすごい熱演をしたものの、TV放送されなかった。

推 萌 コメント

「第２話はTV放送ではがっつり音声が削られているんです。《超あこがれ Ver.》で観るとまた違った印象になります」（風間）

Episode06「トレスマジア誕生秘話」

のりでベタベタにされるトレスマジア

魔物の放ったのりでベタベタにされたトレスマジア。服まで溶けてしまい、大ピンチになっていた。

推 萌 コメント

「第６話冒頭の、トレスマジアが服を溶かす白い液体で貼りつけにされるところ。アパンにも容赦なくエッチなシーンをぶっこんでくるのがいいですよね。光がすべて消えたあのシーンからは、視線を釘づけにしてやるぞという凄みを感じるので、《超あこがれ Ver.》のすごさがよりいっそう実感できると思います」（池田）

Chapter 4

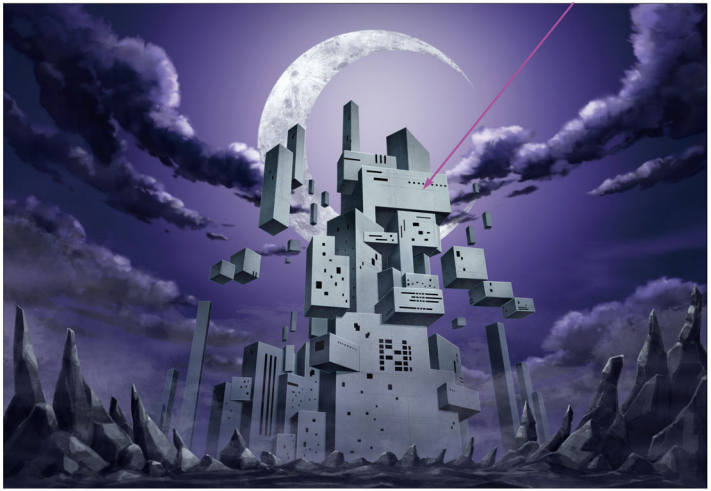
設定資料

エノルミータとトレスマジアが戦った舞台ほか
物語に登場した学校、公園、施設などを
た〜〜っぷりと掲載！

背景設定

本作に登場する場所の背景設定（美術ボード）を紹介。設定を見ながら、うてなたちの辿ってきた足跡を確かめよう。

※建物は順光でお願いします。



外観

内部

ナハトベース

不思議な空間に存在する、悪の組織エノルミータの拠点。うてなは第３話で、ヴェナリータに導かれて初めて訪れた。戦いで破壊されてしまうことも。

大穴の空いたナハトベース（月光）

大穴の空いたナハトベース（曇り）

うてなの家

うてなの家は普通の一軒家。やさしそうな母親と共に暮らしている。うてなの部屋はなかなかの広さがあり、机にはSMの本が隠されている。

外観

リビング

うてなの部屋

キウィの部屋

キウィの部屋も普通の女の子のようだが、ところどころ散らかっているのは彼女らしい。ベッドの上では、キウィがエロい自撮りをしていたことも。

こりすの部屋

整然としていて、かわいらしい家具が備わっているこりすの部屋。棚の上にはドールハウスが置いてあり、床には彼女の好きな人形たちが散らばっている。

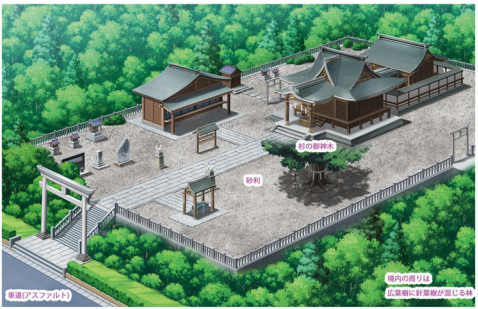
ドア側

机側

小夜の家／神社

小夜の家とその近くにある神社。小夜はよく巫女服を着てお手伝いをしている。境内は広く、マジアベーゼとマジアアズールの戦闘が起きても平気なほどであるようだ。

自宅外観



神社全景

うてなたちの学校

うてなやキウィ、トレスマジアの面々が通っている学校。うてなたちの交流のほか、第６話のトレスマジアの過去を描いた回想シーンの舞台ともなった。

全景

教室

教室（過去）

全景

✦繁華街

うてなたちの住む街。うてなたちやトレスマジアたちが遊びに出かけることも。なかなかの都会であり、広々とした駅前広場ではうてなと小夜などさまざまな出会いもあった。

路地裏

駅前広場

✦カフェ

キウィがうてなとの初デートの際に訪れたカフェ。キウィが甘いパンケーキをうてなに食べさせてあげるなど、甘々のシチュエーションが描かれた場所だった。

✦児童公園

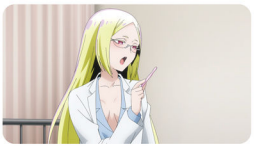
第4話のマジアベーゼ対マジアマゼンタの決戦の地。マゼンタが子供たちと交流したり、服を破かれてしまったりと、さまざまな出来事があった思い出の地だ。

外観

✦HOTELワンナイト

キウィが何度もうてなと一緒に行きたいと言っていたホテル。繁華街にあるようで、周りには「無料案内所」という看板が。少しいかがわしい場所に見えるが……。

電光掲示板



✦ドールハウス／診療室

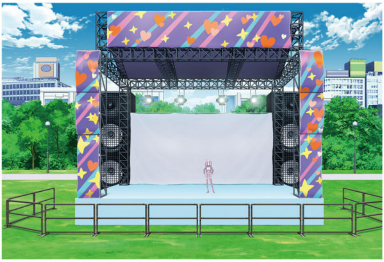
第５話で風邪気味だったうてなが、こりすから看病を受けていた場所。ネロアリスの能力で生み出された診療室で、うてなは、胸に聴診器をあてられるなどの診察を受けた。

✦ドールハウス／子供部屋

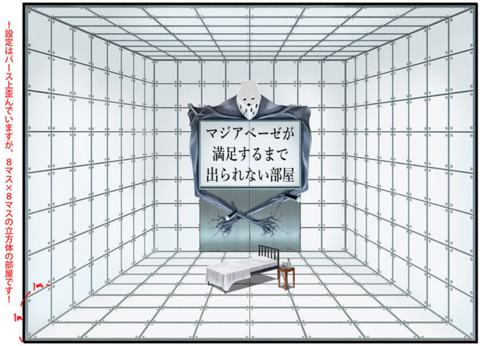
ネロアリスによって生み出された空間で、第６話のマジアマゼンタの赤ちゃんプレイの会場となった場所。ネロアリスはお母さんのような姿になっていた。

野外ステージ

第９話で実施されたロコムジカの野外ライブのステージ。大勢のお客さんが来ていたが、マジアベーゼたちとの戦闘が始まったことで逃げてしまい、ステージも崩壊した。



崩壊したステージ



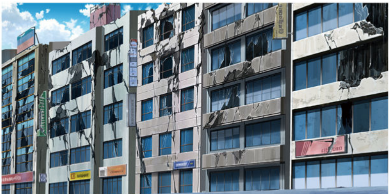
マジアベーゼが満足するまで出られない部屋

白く囲まれた無機質な空間に、ベッドとモニターだけが置いてあるという不気味な場所。マジアベーゼの陰謀により、結果的に真珠とネモが愛を育んだ場所となった。

傷ついた街

第 10、11 話のロード団とマジアベーゼたちとの激しい戦いにより、傷ついてしまった街。第 12 話ではトレスマジアが、駅前広場の工事を手伝っている姿もあった。

駅前広場



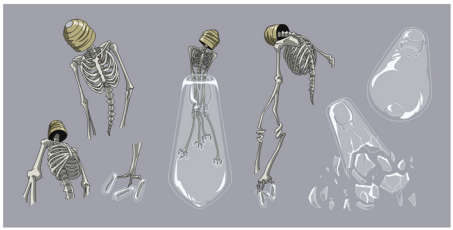
戦い後の街並み

魔物設定

本作に登場した個性豊かな魔物たちを紹介。さらに貴重な資料の一部もここで紹介しよう。

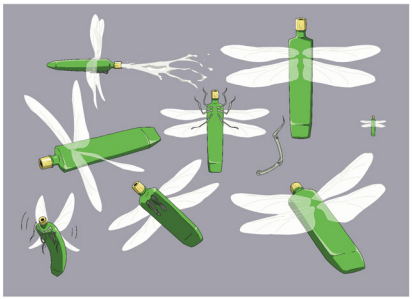
ロウソクの魔物

第２話で登場したろうそく型の魔物。マジアサルファを捕らえ、胸を露出させたあと鋏による攻撃を繰り出していた。



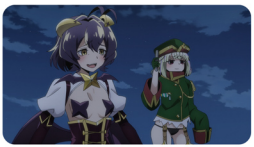
電球の魔物

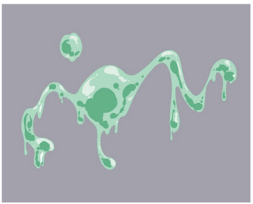
第３話でマジアベーゼがレオパルトを懲らしめるために創り出した魔物。電撃攻撃でレオパルトをノックアウトした。



のりの魔物

第６話でトレスマジアを苦しめた魔物。虫のように飛行し、魔法少女たちにのりを浴びせる。のりは体がくっつくだけでなく、服を溶かす効果もある。



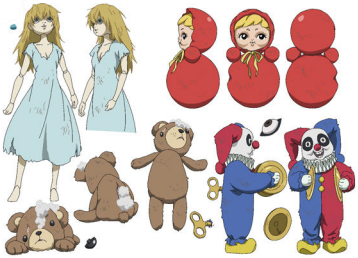


スライムの魔物

第４話冒頭でトレスマジアが戦っていた魔物。拘束し服を溶かす力があるようで、３人をエッチな格好にさせていた。

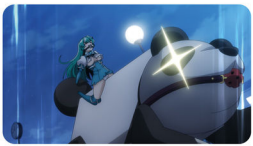
✦チェシャ猫ぬいぐるみ＆ドールハウスの玩具

ネロアリスが愛用する猫のぬいぐるみは、第５話のドールハウスでトレスマジアを襲ったのが初登場。ネロアリスはほかにも多数のぬいぐるみを使用する。



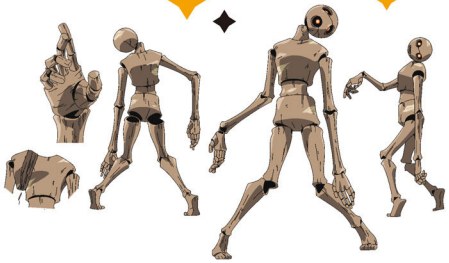
✦パンダの魔物

パンダの形をした、かわいいけれどえげつない魔物。ボールギャグを出したり、三角木馬のような形になったりしてマジアアズールを苦しめた。



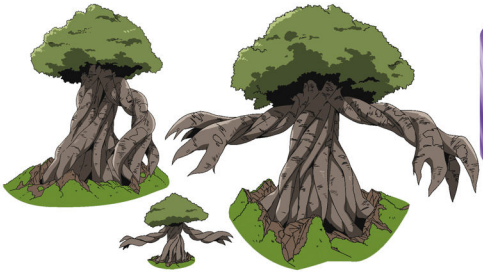
✦さそり怪人（ミラクル☆みみる）

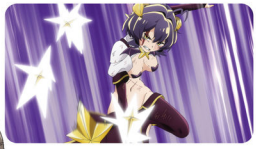
第７話の劇中劇「魔法少女ミラクル☆みみる」に登場。みみるが苦戦した、少し妖艶な巨大さそりの怪人だ。



✦木製人形の魔物

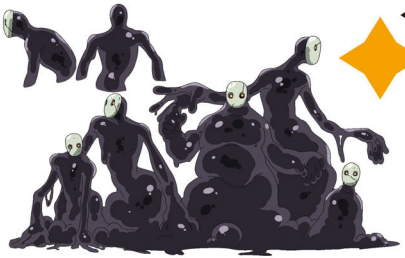
第７話の回想シーンに登場。まだ魔法少女になる前の小夜を襲っていたところに現れたマジアマゼンタに倒された。

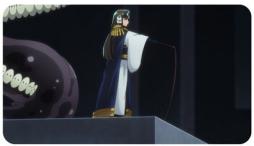




✦木の魔物

第９話でマジアベーゼが使用。ロコムジカの攻撃に苦戦していた彼女は、木の魔物を使役して対抗しようとした。





✦ロードエノルメの魔物

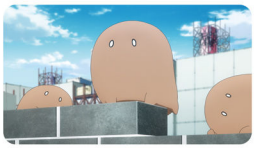
ロードエノルメの魔物創造能力によって生み出された魔物。すさまじい数がまるで軍隊のように統率されていることが特徴。

✦タコの魔物＆ビーチパラソルと傘鳥の魔物

海が舞台だった第 13 話に登場した魔物たち。とくにタコの魔物はタコが苦手なマジアサルファを苦しめていた。

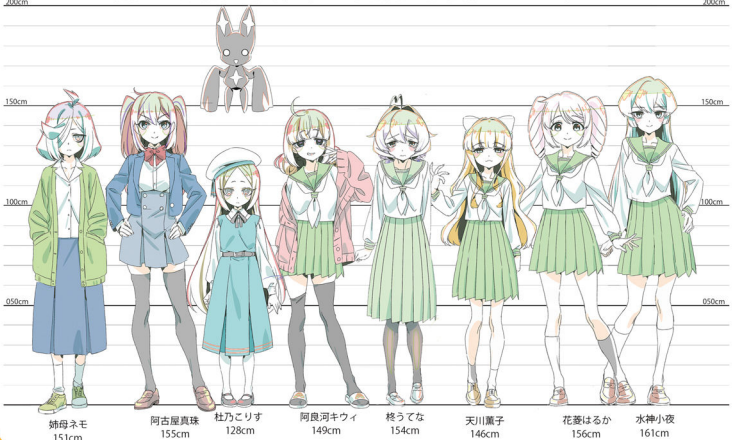
✦お手伝いゴーレム

第 12 話で駅前広場の復興を手伝っていたゴーレムたち。魔法によって生み出されたもので、力仕事などを担当してくれている。



✦うてなたちの身長表✦

※うてなは猫背のため表記身長より頭の位置が低いです。変身後は表記身長合わせとなります。



内装

キッズスペース

column 3

第12話 おもちゃ店の設定

第12話でうてな、キウィ、こりすが
はるかたちと出会ったおもちゃ店。
このひとつのシーンを作るために用意された
設定を紹介しよう。

背景設定

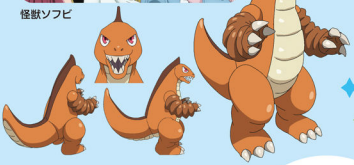
うてなたちの訪れたおもちゃ店はかなり広く、子供が遊べるスペースまで設けられている。ワンシーンのため、店の内装から店に置かれているアイテムまで用意された。

プロップ設定

おもちゃ店に並んでいた人形や、キウィが子供たちを楽しませようと手に取っていた変身アイテムなど。怪獣の人形はこりすが気に入り、購入していた。

人形

怪獣ソフビ



ウルトラマムの変身アイテム

怪獣の魔物

ネロアリスの魔法で巨大化し、魔物と化した怪獣の人形。巨大化したマゼンタを追い詰めた強敵であり、人形のときよりもだいぶ凶悪そうな顔をしている。

Chapter 5

スタッフインタビュー

人気を博した物語の制作舞台裏を披露。
スタッフもまた理想を追い求め
葛藤し、戦っていた。その軌跡に刮目せよ！

監督
鈴木理人

すずき まさと
アニメーション監督、演出家。『魔法少女にあこがれて』が初監督。ほかに『おとなりに銀河』などに参加

小野中先生協力のもと攻めた映像づくり

――W監督の役割分担についてお聞かせください。

大槻　基本的には鈴木監督がメインで、僕は事前準備のお手伝いをしていました。作業が安定するようになってからは、鈴木監督にお任せしました。

鈴木　これまで演出をやっていたのである程度の作業はわかっていたのですが、監督は初めてでした。そこで、大槻監督にフォローしていただきました。

――初めて原作を読んだときはどのような印象を持ちましたか？

大槻　主人公のうてなは、みんなが共感できるような悩みを抱えているんですよね。そんな子が妙な状況に巻き込まれながら、だんだん内面を解放させていく展開がおもしろかったです。

鈴木　彼女はスタートの時点では、とても感情移入をしやすい身近な主人公なんです。ただ物語が進んでいくうちに、どんどん読者から離れた存在になっていくのが、この作品の大きな魅力だと思いました。なので、アニメでも、ほかのキャラクターたちに振り回されながらも徐々に欲望を解放していくうてなの様子を描きたかったんです。序盤のおどおどしていたうてなが大好きなので、そんな子が物語をぶんまわす側になっていったのは、感慨深いです（笑）。

――アニメ化するにあたり、鈴木監督、大槻監督が大切にしていた部分は？

大槻　この作品の一番のキモは、うてなの成長物語です。そこをしっかり見せなければいけないと思っていましたが、自分が想定以上のアニメになったのでよかったです。しっかり考えて作っていった鈴木監督の手腕は素晴らしかったです。

鈴木　このアニメの重要なポイントは、第7話でマジアベーゼがマジアアズールに「解釈違い」と、叱咤するシーンです。ここでうてなは自分のスタンスを確立させ、どんどん成長していった。そして第8話で、自分の向かうべき方向が決まるんですよ。「あの星を堕とす！」とうてなが宣言するシーンは、情報量が多いカットで、何度もリテイクを重ねました。

大槻　あのシーンはカッコよかったです。この作品は全体的に、キャラクターに寄り添った画面づくりになっていましたよね。画面からキャラクターへアプローチしていく感じがすごくよかったです。

鈴木　あと、深夜アニメなので、仕事に疲れた人が気楽に観られるものにしたかったんです。誰かが仲違いをしているシーンとか、そういうところはできるだけ柔らかくしつつ、頭空っぽで楽しめて、ストレスを感じないような作品を目指していました。

大槻　あともうひとつ。SMってどうしても、上下の構図になってしまいがちなんです。でも、うてなは別に魔法少女たちの上に立つことをしたいわけではなく、あくまで楽しんでいるだけなので、一般的なSMの見せ方をする必要がない。ここの塩梅もお見事でした。

第1話と第13話のうてなたちの変化を楽しんでください（鈴木）

――本作が3バージョン作られることになった経緯を教えてください。

鈴木　最初の顔合わせの段階で、原作の小野中彰大先生やプロデューサーとお話をする機会がありました。原作では乳首が描かれていないので、原作でもやってないことをアニメでやっていいのだろうかという悩みはあったのですが、小野中先生から「ぜひやってほしい」とおっしゃっていただいたので、「行けるところまで行っちゃおう！」と、なりました。ただもちろん地上放送できない表現もあるので、3バージョンを作ることになったんです。《TV放送ver.》は、放送直前にもかかわらず「このカットはNG」など言われることもあり、僕が自分で差し替えカットを作ったりもしていました（笑）。

――小野中先生の協力があるのは心強いですね。

鈴木　小野中先生は最初の打ち合わせからシナリオ会議まで、アニメに関する話し合いの場にほとんど参加いただいていました。アニメの構成やオリジナル要素の相談までさせていただき、ときにはアイデアを出していただいたこともあります。おっぱいの設定も含めて、とてもありがたかったです。

魔法少女が勝つことこそうてなの願い

――キウィについて教えてください。

鈴木　キウィは、ビジュアル面での魅力もあるし、「うてなが好き」と言う部分は一貫しているのですが、その気持ちのスイッチが入る場所が掴みにくかったです。アフレコでは小野中先生にキウィの行動の動機などを伺い、その場で補完することもありました。

大槻　すごく直情的で、おもしろい子ですよね。キウィは、そのまっすぐなところをかわいく表現したかったんです。ファンやキャストの皆さんに受け入れていただいたので、結果的にうまくいったのではないかと思っています。

――こりすについてはいかがですか。

大槻　本作に限らず、無口キャラは描くのが難しいんです。なにを考えているのかわからないから、行動が唐突に見えがちで。でも、こりすは優しい子なので、そういったところがちゃんと見えるよう気をつけていました。

鈴木　最初は、なにを考えているのかわからないお人形さんのようなキャラクターという雰囲気で見せていました。でも、うてなたちとの交流により、少しずつアグレッシブになり、どんどん魅力が増していきます。それにつれて感情や想いを感じてもらえるようになっていく、そこが魅力ですね。初登場だった第5話の時点では、できるだけ表情を付けないよう気をつけてもらっていましたが、そこから表情を豊

かにしていきました。

――真珠とネモについては？

大槻　第10話は「本当に放送できるの？」と、会議で何度も話題になりました（笑）。

鈴木　でも、ネモと真珠がお互いを思い合っているのは揺がないといけない。あのエピソードはストーリー的にも重要なんです。とくにネモは、あのエピソードがないと真珠が大好きであることが伝わりきらない。いろいろと苦労しました。

――次はトレスマジア側の子たちの印象をお聞きします。

大槻　はるかはこの作品で一番真っ直ぐな、裏表のない子です。まさに魔法少女モノの主人公というべき、ストレートなかわいさがありますね。それを上手く引き出していきたいと思っていました。

鈴木　この作品は5Mが大きなテーマになってくるので、ドロドロした雰囲気を感じてしまうかもしれません。はるかはそんな雰囲気を、ポップに変えてくれる存在だと思っているんです。裏表がなく、かわいくて、ちょっとおバカで。ベーゼがトレスマジアの子たちを真っ白な展開に染めていこうとしていることで、重くなりませんでした。

――小夜は見せ場が多かった印象です。

鈴木　第7話でアズールが負けてしまうので、アニメの最終回まで彼女の巻き返しの機会を与えなければならないと思い、原作ではもう少し先のエピソードである展開を第13話にもってきました。これを最後にもってきたのは、魔法少女に勝たせて終わらせたかったからです。

うてながだんだん内面を解放させていく展開がおもしろかった（大槻）

大槻　この「魔法少女に勝ってほしい」というのは、うてなの願望なんです。だから最後にエルミーンが負けることで、彼女の希望を叶えたかった。うてなが成長した結果でもあるし、このような結末になるのがよいかなと考えました。

――薫子はおしとやかな一方で好戦的と、ギャップが大きい子です。

大槻　おっしゃるとおり、彼女については二面性を見せることを意識していました。うてなだけでなく、魔法少女側も二面性をもっていることを描きたかった。薫子が第2話であのように逆転したのは、インパクトを感じていただけたのではないでしょうか。

鈴木　本来の薫子は好戦的な姿なので、それを後半の話数で出すと視聴者がびっくりしてしまう。だから薫子含め、彼女たちの二面性は前半の話数で描きました。

――ロード団の印象はいかがですか？

鈴木　ロードエルメルは、好きなキャラクターなんです。ラスボスっぽい雰囲気とか含め、魅力的なキャラクターです。原作だともっと活躍の機会があるのですが、アニメだと第11話で退場なので、少し寂しかったです。

大槻　いい悪役でしたよね。やられっぷりもかわいくて嫌味がない。僕も魅力的なキャラクターだと感じました。

――エッチなシーンで、とくに印象に残っているのは？

大槻　僕はすべてのシーンを魂込めて作りましたから、全部です。最終的には感覚が麻痺して我々としてはかなり攻めたつもりでしたが、放送できてしまって、「まだ足りないんじゃないか」と思ってしまっていました（笑）。ただこれ以上やって、エグみや苦みが出るのも本意ではないので、バランスはよかったのかな。

鈴木　僕は、第13話のタコに襲われるシーン。最初と最後をつなげるのが好きなので、第1話の花のツタに捕まるところと対比を描きたかったんです。第1話にあえて寄せた見せ方にして、第1話だとまだ魔法少女として抵抗しているけど、第13話になるとやられ慣れちゃってる、みたいな変化を楽しんでいただければ幸いです。

――最後にファンの皆さんへメッセージをお願いします。

大槻　最後までご覧いただき、ありがとうございました。スタッフ一同で楽しんで作った作品なので、これからも愛していただけるとうれしいです。そしてうてなたちキャラクターのことも、愛していただければと思います。

鈴木　たくさんの方にご覧いただけたようで、本当にありがたいです。小野中先生が作ったユニークな世界を今後も楽しんでほしいです。もしまた機会があり、お会いすることができればうれしいです。これからも応援してください！

監督
大槻敦史
おおつき あつし
アニメーション監督、演出家。『To LOVEる -とらぶる- ダークネス』『BanG Dream!』などに監督として参加

シリーズ構成

木村 暢

きむら のぼる

脚本家、シナリオライター。直近は、『俺だけレベルアップな件』『コードギアス 奪還のロゼ』などにシリーズ構成として参加。ほかにも『境界戦機』『ヒーラー・ガール』など多くの作品で脚本を手がけてきた

原作に沿いながらもさらなる楽しさを追求

――原作の魅力について、どうお考えでしょうか。

木村 魔法少女モノは、「変身願望」「魔法」「友情」などが複合的に重なって構成されることが多いですが、この作品はそういった王道要素をいかに逆転させて遊ぶか、みたいな視点が感じられて、そこがおもしろいです。「魔法少女なんてただの夢物語だ」と否定するのではなく、魔法少女という夢物語を別方向に開拓していく。今まで知らなかった世界を見せてくれる楽しさです。

――構成を作る際、どのように作業を進めていったかも教えてください。

木村 まず「原作をどこまでやりますか」という話から始めました。パターンとしてはロード団との戦いで終わらせるのもありですし、その後にもう一度日常に戻ってくるのもありでした。何パターンか話し合いながら、戦いのあとにもう1回くらいは日常回が欲しいよね、という結論になって、それをもとに逆算して構成を作っていきました。あくまでも原作の魅力を生かしたアニメにする、というのは鈴木理人監督、大槻敦史監督とも一致した意見でした。

――第13話は原作の展開から先回りして、マジアアズールの真化が描かれました。

木村 そこは偶然の産物でした。ロード団との戦いのあとにもう一度何かをやるとなると、まずはうてながロードエノルメを脳内で幼女化した影響で疲れ果ててしまうエピソードも入れる必要がありまして。そんな彼女のテンションを上げる必要があったので、第12話を用意して、第13話で日常エピソードを描こうと決まったわけですが、最初の打ち合わせでは、うてなとキウィのベッドシーンで最終話を作る案もありました。ただ最終話にはトレスマジアも出したいよねという話になり、それなら海で遊ぶエピソードを持ってこようとなりました。

――構成を考えるうえでとくに工夫した点も教えてください。

木村 うてなが悪の組織の幹部としての階段を駆け上がっていく様子を、原作と同じくアニメでも丁寧に描きました。うてなはもともと引っ込み思案でオタク気質ですし、段階的に欲望に素直になっていくのが彼女らしい。ストーリーの構成を話し合う会議のときに、第1話の段階でうてなにかわいいものをメチャクチャにする楽しさを自覚させてもいいのでは、という意見もあったんです。ただ、それだと一足飛びすぎて不自然さが出てしまうと思ったので、原作の流れをふまえて作っていきましょうと提案しました。

――エッチなシーンの多い作風に戸惑うことはなかった？

木村 ほかの作品でもいろいろ経験してきたので、とくに意識することはなかったです。両監督との事前打ち合わせの段階でもエッチな要素を増やしていきましょう、という同意を取っていきましたし、積極的に原作の要素を膨らませました。

――戦闘描写とエッチなシーンのバランスを取るのは難しかったのでは？

木村 アクションを書くのは好きなのですが、本作では派手な戦いや魅せる戦いは意識的に抑えて、キャラクターがどう動くかに重点を置きました。カッコいい戦闘シーンよりもエッチなシーンに尺を割きたかったので。ただ、映像になるとアクションシーンもとてもカッコよく描かれていて、そこは作画チームの努力の賜物でした。後半になるにつれて勢いや熱量、クオリティが格段に上がっていくのが見てとれて、「いい作品になっているな」と実感しました。もちろんエッチなシーンに関しても気合の入り方が素晴らしくて、想像を超えていきました。まさか乳首を出すとは思っていませんでした。

――バトル中のエッチなシーンも魅力的でした。

木村 魔法少女作品で一番カタルシスを感じる瞬間って、変身して敵を倒すときだと思うんですけど、『まほあこ』に関してはエッチなシーンに入ったときが一番盛り上がると思っていて。戦いの内容に関しては、どうすればよりエロい展開に繋がるか、ということをよく考えていました。そういった部分はかなりおもしろく描けたと思います。

――エノルミータ側の引き際が鮮やかで、テンポもいいですよね。

木村 戦闘に関しては、本気で挑んでいるトレスマジア側に対して、うてなは「苦しめることができればいい」というスタンスなのでギャップがあります。だからトレスマジアを手のひらで転がしたり、不利になったらすぐに逃げたり、そういった動きをさせやすかった。コメディ寄りでお約束の展開がある『ヤッターマン』のようなイメージに近いかも。ドロンボー一味がヤッターマンに懲らしめられて、いつものようにキリのいいところで帰っていくパターン。そこにキャラクターの心理描写を付け足して味付けを変える感じで脚本を書いていました。

――手応えを感じた部分は？

木村 第2話冒頭の心象風景の中で、うてなが「もう一度触れられたら」と思うシーンがありますよね。あそこで無意識下の欲望を描いておいたから、その後の神社でのSMプレイを楽しむ様子に説得力が生まれたのだと思っています。彼女の心がだんだん変化していく様子を、視聴者の皆さんにも楽しんでいただけたのではないでしょうか。

――お気に入りのエピソードについても教えてください。

木村 第1話、第7話、第12話はとくに好きです。第1話に関しては、一度は悪の組織の幹部になることを断るけど結局巻き込まれてしまい、自分の性癖にだんだん目覚めていくという流れ。変化の仕方がいいですよね。第7話はそれまでの話数と違って、ほぼうてなと小夜の2人の感情のやり取りだけで作り上げたということで、ほかの話数にはないおもしろさがあります。第12話ははるかが巨大化してパンツが破れるというコメディ全開のバトルでしたが、ロード団との激しい戦いのあとにああいった笑える戦いが起こるという

のが楽しい。「おバカな話をエッチにやる」というのがこの作品の王道展開な気がするので、それで締めくくることができたという意味で第12話もお気に入りですね。

演技や演出によって引き出される脚本の魅力

――ここからは各キャラクターの印象を教えてください。まずはうてなから。

木村　「自分の欲望を抑えなければいけない」と、思っていたうてなが真逆の方向に成長していく姿はコメディの王道でおもしろいですよね。ただ、原作を読み始めたときは、彼女がここまで欲望に積極的になるとは予想できませんでした。この作品を象徴する存在ですし、和泉風花さんの演技も素敵。

――キウィはいかがですか。

木村　すごく動かしやすかったです。自分の感情に正直で裏表がない。自己顕示欲が強くて、惚れたら一本気。キャラクターとしてわかりやすかったので、原作にはないセリフを言わせるときや原作からセリフを変更する必要があるときも、芯がブレることなく書きやすかったです。

――こりすはいかがですか？

木村　キウィとは対照的に、何を考えているかわからないミステリアスさが魅力の女の子。表現の仕方に悩むことがあったので、原作の描写を積極的に拾い上げていきました。たとえば原作では友達が少ないという描写があったので、第5話のラストでお母さんから「新しいお友達でもできた？　よかったわね」と言われたときに、少しだけうれしそうに微笑む演出を入れてみました。こういったところでかわいさを表現しました。

――真珠とネモの印象は？

木村　2人の魅力はコンビ感と言いますか、カップル感。少し倦怠期に入った夫婦じみたところもありつつ、照れくさくて気持ちを素直に言えない初々しさみたいなものもある。絶妙なバランスのコンビですよね。うてなたちの仲間になったのは終盤ですが、それまでの3人とはまた違う個性あふれる子たちが掛け合いに加わって、さらにおもしろくなりました。ちなみに第10話の脚本も私が担当していますが、ベッドシーンをあんなにしっかり描くとは思っていなかったです（笑）。

エッチなシーンの数々は打ち合わせの際に満場一致でOKが出ました

――エッチなシーンのセリフについて教えてください。

木村　覚えている範囲にはなりますが、脚本で書いたセリフが、《超あこがれVer.》で消えていることはなかったかなと。地上波放送版やWEB版では、喘いでいるところやアドリブのところが無音や綺麗な音楽になっていました。エッチな声が出るところは脚本には「（喘ぎ声）」としか記載していないので、どの程度演じるかは完全に声優さんにお任せしていました。《超あこがれVer.》には、すべて収録されているので、気になる方はチェックしてみてください。

――トレスマジア側の子たちを描く際に意識した点も。まずははるかから。

木村　はるかは一言で表すとアホの子になるんですけど、そこを強調しすぎるとキャラクター性が乖離してしまう。誰にでも優しく純粋な心を持っているので、かわいいアホっぽさだけでなく、いろんな魅力が見えるよう意識しました。とくに人のために動こうとする気持ちについては3人のなかでいちばん強いので、そこは外さないようにしました。第6話の赤ちゃんプレイに関しては、どこまでやるかという話が脚本会議で出ましたが、全員一致で現状のような形になりました。

――小夜についてはいかがですか。

木村　まっすぐ成長したキャラクターです。原作を読み始めたときはマジメな委員長タイプだと思っていたんですけど、じつは要領が悪い設定があったり、凛としていた雰囲気がどんどんはがれ落ちていったり。そういったところが視聴者の皆さんの性癖に突き刺さる部分だと思ったので、ギャップは意識していました。

――第7話はとくに丁寧に描かれていた印象があります。

木村　小夜が堕ちかけるシーンは原作では単話の内容だったので、最初はAパートで描いてBパートは別の内容で、という案もありました。ただ両監督から堕ちかけるシーンで1話まるまる使いたいというオーダーがあったので、オリジナルシーンを多く入れました。変身アイテムにヒビが入る演出はとくにこだわったところです。心が砕けている状態を映像で表現できればと思って入れさせてもらいました。次の話では元に戻りますし、小夜自身もすぐに復活するんですけど、一度は負けを認めてしまったことをわかりやすく伝えたかったんです。

――薫子については？

木村　トレスマジアの3人のなかで、とくに好きなキャラです。京都弁も素敵ですし、何よりステゴロ感がたまらないですよね。アクション好きとしては、あの巨大な腕で殴り合うところが書けると楽しいだろうなって想像が膨らみました。私の脚本担当話数に彼女の戦闘シーンが出てこなかったのであまり書けなかったですが、小柄な見た目で暴力的というギャップが魅力的です。

――全話振り返って、とくに印象に残っているシーンはどこでしょうか。

木村　第11話のロードへのお仕置きや、先ほども挙げた真化したアズールのエピソードは、想像していたよりもクオリティが高くて、脚本担当の山田靖智さんの功績です。自分の担当した回ですと、第7話が印象に残っています。自由に書かせていただいた上に、スタッフ陣の演出やキャスト陣の演技が素晴らしい。映画館でうてなが目をキラキラさせてだんだん顔を上げていくのに対して、小夜は顔が下がっていく。その対比は今でも強く印象に残っています。それとアズールが靴を舐めるところ。和泉さんの演技がとにかく迫力があって役者の実力を感じました。

――最後に読者へメッセージを！

木村　アニメ化企画の話をいただいたときは、まさかファンブックが出るところまで成長するとは思っていなかったです。スタッフ陣やキャスト陣のがんばりだけでなく、応援して盛り上げてくださった皆さんのおかげです。原作はまだまだ続いていますので、変わらず応援していただきたいです。

キャラクターデザイン
総作画監督

大滝那佳

おおたき やすか
アニメーター。携わった作品は『ドールズフロントライン』(サブキャラクターデザイン・作画監督)、『アルスの巨獣』(サブキャラクターデザイン・作画監督)、『おとなりに銀河』(キャラクターデザイン・総作画監督)など多数

キャスト陣の演技に負けない作画を目指す

――初めて原作を読んだときの感想を教えてください。

大滝　今まで読んだことのないタイプの作品でした。ギャグのなかにエロいシーンも多かったので、「これアニメ化できるのかな?」と思いつつ、「私が描かなくちゃいけないんだ」という緊張感を持ちながら読んでいきました。ただ、物語が進んでいくと、うてなたちキャラクターの表情がとても豊かなことがだんだんわかってきまして、魔法少女をモチーフにしたコメディとしてとても魅力的だと感じるようになっていきました。読み終えたときは、はやく描きたくて仕方なかったのを覚えています。

――実際にうてなたちを描いてみて、いかがでしたか?

大滝　本作はアフレコを終えてから作画に入ることが多かったのですが、キャストの皆さんの演技が素晴らしかったので、それに負けないようにしたいと思いながら作業を進めていきました。

――本作はエッチなシーンもありましたが、作画はどんなお気持ちで取り組まれていたのでしょうか?

大滝　「ここまでやっていいのかな?」と思いつつ、私もほかのアニメーターさんたちもノリノリでした。所属スタジオのメンバーの皆さんと一緒に取り組んでいたんですけど、とにかく楽しくやって、見せるところはしっかり見せるという意識で取り組みました。

――原作・小野中彰大先生の絵の印象や、原作絵をアニメに落とし込む際に意識したことを教えてください。

大滝　小野中先生のイラストは独特の雰囲気がありますよね。例えば、黒い影を付けて全体をパキッとさせている印象がありました。それはアニメでも表現したいと思い、各エピソードのポイントとなる部分で黒い影を意識的に付けたりしました。一方、鈴木(理人)監督から「全体的にかわいい系にしたい」という要望がありました。私はどちらかというと柔らかい雰囲気の絵が得意なので、それを生かしたデザインができるよう気を遣っていただいたのもあるかなと思っています。それぞれのバランスをとりながら描いていきました。

――小野中先生とのやりとりは?

大滝　小野中先生は設定のチェックや、作画監修もしていただきました。あと、アニメのために原作で一度も描かれていないキャラクターの胸の設定を描きおろしていただきました。小野中先生のご提案だったのですが、まさかそこまでしていただけるとは思わなかったので、ありがたかったです。

――キャラクターデザインをする中で、いちばん苦労したキャラクターは誰でしょうか?

大滝　最初に設定を作ったのがうてなと小夜でした。作品の方向性を悩んでいたタイミングだったので、この2人は苦労しました。最初は、よくアニメで見るオーソドックスな描き方をしていたのですが、監督からもう少し生っぽい感じや匂いを感じるデザインがいいと言われまして。「匂いってなんだ!?」と思いつつ、人体をリアルに描くことは好きだったので、リアリティを取り入れていったらOKをいただけました。小野中先生が作ってくださった胸の設定一覧には、とても助けられました。

――逆に描きやすかったのはどのキャラクターですか?

大滝　原作を読んだときからずっと薫子を描きたいと思っていたので、彼女の設定画はすんなり描くことができました。原作の設定資料集に「昔は病弱だったが、身体を鍛えるためにいろいろな格闘技を習わされた」と書いてあったので、筋張った体型なのかなと考えてデザインに生かしました。個人的に筋肉を描くのがすごく好きなので、薫子はいちばん楽しんで描くことができました。

キャラクターらしさを出すための工夫

――各キャラクターのデザインをする際に意識した点について教えてください。

大滝　うてなは自分に自信のない女の子なので、普段からちょっと前かがみになっている印象がありました。そのため、猫背っぽくしてポーズを内側に寄せるようにすることで、彼女らしさが出るようなデザインになっています。もしファンイラストを描く際は、ここを意識するといいかもしれません。あとは後ろ髪を正面から見たときに、出しすぎず少なすぎずの分量になるよう気をつけました。

――マジアベーゼに変身すると、表情を含め印象が変わりますね。

大滝　マジアベーゼに変身した後のうてなは、自信が出るというか。別の自分になっているような感覚なのだと思います。なので背筋が伸びて、お腹のたるみがなくなるんです。そこを意識するように描いていました。

――次はキウィについてお願いします。

大滝　デザインの全体的なポイントは肉感です。小柄だけどダイナマイトボディなので、肩幅は小さくするけど胸とお尻は大きいというところを意識して描きました。キウィは、ポーズも含めてシンメトリーにならない感じが合うと思っています。制服のイラストでも靴下が片方だけずり下がっていますが、ああいったアシンメトリーを入れるとキウィの悪戯っ子めいた雰囲気が出ます。表情に関しては本人の素直さをそのまま出しています。

――こりすについてはいかがですか?

大滝　一番気をつけたのはおでこです。広くなりすぎるとかわいくなくなってしまうので、バランスをとることを意識しました。後ろの髪の毛が中心にいくにつれて短くなっていく原作のデザインがおもしろいと思っていたので、そこはアニメにも反映しています。

――うてなたちと交流することによって、感情が少し変化するようになりましたね。

大滝　そうですね。ただ、最初のほうはとにかく感情をあまり出さないよう

徹底していました。本編でリテイクが出たところも「表情の動きをなくしてください」といった内容が多かった印象です。とはいえ、徐々に豊かになっていく表情にも気をつけました。けっこういろんな表情をしていて、驚いた方も多いと思いますが、後半は子どもらしさをいい感じに出せていた気がします。

――うてなたちの仲間になった真珠たちについてもお聞かせください。

大滝　真珠はネモとのセット感が大事。まったく違うタイプの2人が一緒にいるっていうのが個人的に刺さったので、このコンビも好きです。描き方で言うと真珠は比較的王道のツインテールなんですが、髪の毛のメッシュは描くのが大変でした。作画をしているときにやけに時間かかるな、と思ったら真珠のメッシュの部分だった、ということもありました。ただ体型はいちばん均整が取れているので、胸が大きいアイドル風の描き方をすると真珠らしくなります。あとは八重歯が特徴なのでそこは忘れないようにしていました。

――パートナーであるネモについてはいかがですか？

大滝　ネモも髪の毛の形が特徴的なのでそこのシルエットを大切にしつつ、体型の細身感は大事にしていました。それと、ネモはゲームをたくさんしているのではないかと思っているので、ストレートネックで背筋もピンと伸びていないのでは、と。その点をデザインの上でも反映し、作画でも気をつけてもらっていました。

――トレスマジアの面々についても聞かせてください。

大滝　はるかは、魔法少女の王道です。とにかくかわいさを意識して描いていました。少し厄介なのが縦巻きロールで、描くのが難しいんですけど彼女のチャームポイントなので大事にしていきました。制作中も動きの絵でなびかせるのが大変でしたが、かわいさを出すためにがんばりました。体型的には、いちばん標準的なので、胸も含めて大きすぎず小さすぎずのバランスを意識しました。

――小夜についてはいかがですか。

大滝　小夜は胸キャラだと思うので、いかに魅力的に描くかということばかり考えていた気がします。ほかのキャラクターと同じように髪の毛のシルエットは意識していて、前髪の山感は大切にしました。「あとはいい感じにエロく描くことができればよし」と、思っていました（笑）。小夜はやることなすことが全部おもしろいですし、みっともない姿であればあるほど輝くので、作画チームの皆さん一緒にノリノリでいろいろな小夜を描きました。ただ第7話の靴を舐めているところは大変でした。

原作の印象を崩さないようパキッとした黒い影を要所要所につけました

――どのあたりが大変だったのですか？

大滝　あのシーンは小夜がうてなに責められ悦んでいますが、方向性としては小夜がかわいそうなシーンなので、そのように見せないといけません。なのでとにかく彼女が悦びすぎているように見えず、かわいそうな雰囲気になるよう修正を重ねました。

――薫子は見た目と性格のギャップが魅力でした。

大滝　薫子は肩の三角筋のところが出ていたり、腹筋の線が出ていたり、筋張っている感じが出るよう意識しました。あとは口元ですね。動物っぽい口元が特徴的なので、猫っぽく描くのがひとつのポイントでした。本当はパワフルなタイプなのに、序盤それを隠して上品に見せようとしているところがおもしろくて、終始笑いながら描いていました。

不思議な気持ちで作画を描いた話数も

――大滝さんは総作画監督も務められました。とくに大変だった話数は？

大滝　第1話です。その後の作品の指標となるので、すごく気を使いながら作業していたので思い出に残っています。あとは第11話でロードエノルメが小さくなって、マジアベーゼにお尻を叩かれるシーンも印象深いです。同じ話数のなかでロードエノルメの存在感のギャップが大きすぎて、どんな気持ちになればいいのかわからなくて、不思議な気持ちで描いていました。ロードエノルメがすごく辛そうなのに、思わず笑っちゃうところがおもしろかったです。

――とくにお気に入りの話数を挙げるならどこになりますか。

大滝　バトルはもちろんですけど、私は日常シーンが好きなんです。もともと友達の少なかったうてなが、みんなと仲良くしているのを見るとほっこりします。第3話でうてなとキウィがデートしているシーンは、観ていて「いいなぁ」って思いますし、第13話のみんなで海に行くシーンも楽しそうですよね。

――ちなみにエッチなシーンで印象に残っているのは？

大滝　第6話でマジアマゼンタが赤ちゃんになって、ネロアリスに遊ばれちゃうシーンです。はるか好きには第6話はたまらないと思います。はるか繋がりとしては第12話のマジアマゼンタが巨大化して、パンツを見られたり、みんなが服の中に入ってきたりと、大変な目にあうところも印象に残っています。お姉ちゃんとしてがんばりながらエッチな目にあう展開がおもしろかったです。

――《超あこがれVer.》ではキャストの皆さんの演技がノーカットで楽しめますね。

大滝　迫真の演技すぎて、グイグイと引き込まれました。第10話のロコとルベルが絡むシーンや、第13話のマジアサルファがタコに襲われるシーンとか、キャストの皆さんの演技があまりにも素晴らしいので、《超あこがれVer.》もチェックしてください。

――最後に読者へメッセージをお願いします。

大滝　皆さんの応援があったからこそ、ここまでの人気作になれました。ぜひこれからも『まほあこ』を応援し続けていただけるとうれしいです。また、地上波放送版はいろいろな部分が削られていますが、《超あこがれVer.》にはすべて収録されています。気合いを入れて描いた作画がたっぷり詰まっているので、ぜひそちらもよろしくお願いします。

Team-MAX

ヨハネス・ニルソン

よはねす・にるそん

作曲家。Team-MAX所属。『回復術士のやり直し』『異世界のんびり農家』などに音楽担当として参加

鈴木暁也

すずき あきなり

作曲家。Team-MAX所属。『異世界ゆるり紀行 ～子育てしながら冒険者します～』『ひとりぼっちの異世界攻略』などに音楽担当として参加

高梨康治

たかなし やすはる

作曲家、編曲家、キーボーディスト。音楽制作集団Team-MAX主宰。『プリキュアシリーズ（フレッシュ～スマイル）』『美少女戦士セーラームーン（Crystal～Cosmos）』などに音楽担当として参加

意識したのはカラフルな音づくり

——Team-MAXとして音楽担当することになった経緯について教えてください。

高梨　最初、僕にご依頼をいただきまして、音楽を担当することになったあと原作のコミックスを読みました。この作品には、いろんな色がついていたほうがおもしろくなると思ったので、Booska（鈴木）とJojo（ニルソン）に協力をお願いしたんです。2人は僕とは違う音楽をつくりますから。

——皆さんはそれぞれ、どの楽曲制作を担当されたのでしょうか？

高梨　僕に制作依頼が来た理由はこれまでに担当した作品の変身シーンを評価してくださったからだと思っています。だから自然と変身シーンは僕が担当することになり、変身後の戦闘シーンも基本的に僕が作っています。それ以外のシーンを2人に担当してもらいました。「それぞれの得意なところをよろしくお願いね」と、託しました。

鈴木　3人でわいわい話しながらどこを担当していくか決めていきました。

ニルソン　原作を読みながら、「ここの場面の曲を作りたいです」と挙手をして、担当を決めていきました。

——劇伴全体のコンセプトは？

高梨　一定の方向に定まった音楽をつけるタイプの作品ではないと感じたので、カラフルにしようと思いました。バラエティ豊かな食べ物があるお店に来たら、いろんなものを食べたくなりますよね。『まほあこ』もいろんなネタが詰まっていたので、そのネタを盛り上げる音楽もさまざまなパターンがあるほうが楽しくなるだろうなと。

——制作にあたっては、どのようなやり方で取り組まれたのでしょうか。

高梨　経験則ですが、コミカルなアニメにシリアスな音楽をつけると意外とおもしろくなるんです。過去に担当した作品の話になりますが、早食い競争の場面でメタルの曲をかけたことがありまして、すごくおもしろいシーンになって視聴者の皆さんの反応もよかったんです。なので、コミカルよりもシリアスに振るようにしていました。

ヨーロピアンならではの音楽性を生かした曲作りができたと思います（ニルソン）

鈴木　高梨さんがカッコいい曲を作ることはわかっていたので、自分は日常系の雰囲気を意識しました。高梨さんの曲とのギャップでいい効果が生まれるかなと。使う楽器もオーケストラ仕様ではなく、ソロ楽器などのシンプルな編成にしました。あとは、悪の組織の女の子たちが主人公なので、悪っぽいニュアンスも少し入れてみました。

ニルソン　僕の作り方は鈴木さんと近いです。暗めの雰囲気の曲を作るのが得意なので、それを生かせるシーンを選びました。何度も読んでいるうちに頭のなかで音が鳴りはじめるので、その音に合わせて曲を作っていきました。

——楽曲制作で気をつけた点は？

高梨　エロいシーンで露骨にエロいムードにするのは避けました。たとえばサックスを鳴らすとベタなエロさになるけど、そうではなくキャラクターの心情を表現する音にしようという話はしたよね。

鈴木　「このシーンの心情の解釈わかる？」という話は、よくしました。

ニルソン　何回かエロい曲を作って2人にどうですかって聞いたんですけど、「それはちょっと考え方が違う」と言われることもありました。

鈴木　日本とスウェーデンでエロに対する考え方が違うんだな、っていうのを感じました。

高梨　Jojoのエロはヨーロピアンな激しさがあって、攻撃的なエロなんですよね。制作の最中に「日本のエロはもっとアンニュイなんだよ」というニュアンスを伝えた記憶があります。

ニルソン　そうやって調整していくのも楽しかったです。

高梨　逆にヨーロピアンな感覚が上手くハマったのがJojoの作った「変な気持ちになっちゃう」の曲でした。エロいシーンにタンゴを使うというのは日本的な発想だと出てこない。最初にタンゴを使うと聞いたときは「どうなんだろう？」って思ったけど、実際に聴いてみたらすごくおもしろかった。普段の私生活でも興奮するとタンゴが流れてくるの？

ニルソン　そうです。タンゴが頭のなかに流れますね（笑）。

高梨　結果的に、海外でも受けそうな楽曲になりました。

ニルソン　作っているときはヨーロッパのアニメ視聴者にも喜んでもらいたいという狙いもありました。実際、僕が作った曲のなかでも「変な気持ちになっちゃう」はＳｐｏｔｉｆｙでいちばん聞かれていますし、すごくうれしいです。ドSなシーンでかかる曲はどれも作るのが難しかったのですが、上手にできたと手応えを感じています。

——高梨さんと鈴木さんがいちばん手応えを感じた曲は？

高梨　僕は変身用のBGMです。どれもこうすれば視聴者に喜んでもらえるだろうと思って作って、実際にSNS上のタイムラインでも話題になっていたので安心しました。

鈴木　SNSの投稿を見ている「このBGM、やっぱり高梨康治か」みたいな書き込みも多かったですね。

高梨　とくに「トランスマジア！」は、王道の魔法少女作品を意識して作りましたし、あの曲が第1話でかかることで、掴みになればいいなと思っていました。BD&DVDのコマーシャルなどでもよく使われているとのことで、イメージにも合っていてよかったです。

鈴木　自分はやっぱり、第8分挿入歌の「L・O・V・E・リー ロコ♡」です。原作者の小野中（彰太）先生のイメージが平成初期のアイドルソングとのことだったので、それを再現しました。歌詞は原作マンガの時点ですでにあったので、その歌詞を何回も凝視しながら音を作っていきました。真珠役の相坂優歌さんが、絶妙なバランスの歌をつけてくださってうれしかったです。

キャラクターへの愛を楽曲に昇華！

――キャラクターをイメージした曲にはこの楽器を使う、みたいなパターンはあったのでしょうか。

高梨　ありますよ。音響監督の本山（哲）さんの希望を汲み取りながら、僕らの判断で合う楽器を選んでいました。わかりやすいところだと、変身パンクの「うてな変身」は王道の楽器編成で作りましたが、「キウイ変身」と「こりす変身」はそれぞれ違う楽器を使っています。

ニルソン　キウイの変身パンクはロックに寄せています。

高梨　激しさやまっすぐさを出したかったんです。こりすは不思議ちゃんの印象やおもちゃ感を出したくてトイピアノを使いました。

鈴木　使った楽器の数で言えば、「お仕置きの時間です」はフルオーケストラ編成です。第1話でうてなが鞭でレスマジアの面々を叩いているときに流れているのが最初だと思いますが、発注を受けたときのイメージがクラシックの「カルメン」だったので、その

希望を踏まえて『まほあこ』らしく調整を加えました。

ニルソン　ベーゼがドSなことをしているときにかかる曲のなかでも、僕が作った「私を満足させて」はイオリオンを使っています。僕が「セクシーバイオリン」と呼んでいる使い方です。

高梨　そんな呼び名があったんだ（笑）。

――とくに印象に残ったシーンについても聞かせてください。

高梨　第11話のエノルミータとロード団の戦いです。とくに巨大化したシスタギガントや魔物に立ち向かうところはまさにバトルアニメの王道といった感じで、クライマックス感があっていちばん印象に残っています。

鈴木　『まほあこ』は魔法少女モノの王道展開を押さえているよね。その上で王道の部分などの作品に必要な部分を出しています。

高梨　ストーリーの構成、起承転結のメリハリが上手いんですよね。

鈴木　とくに印象に残っているのは、同じく第11話のベーゼがロードエノルメのお尻をペンペンするところです。展開もそうなんですけど、ロードエノルメが泣いて「ごめんなさい」と言ったあとにベーゼが「はい、よくできました」って言うところ。和泉風花さんの演技力が光ってました。

高梨　鈴木くんはドMですから（笑）。

「L・O・V・E・リー ロコ♡」を作るために何日もずっと原作の歌詞を凝視しました（鈴木）

鈴木　否定できないです（笑）。

ニルソン　僕は第7話で、アズールがうてなの靴を舐めようとするところも印象に残ってます。

高梨　Jpopは「もっとちょうだい！」みたいなのが好きなんですよ（笑）。

ニルソン　大好きです。小夜がMに目覚めていくところや、何度やられても立ち戻ってくるところとかが好きなので、第7話は最高でした。

鈴木　アズールが闇堕ちしかけたときに、うてなが「魔法少女の矜持」を語るのもおもしろいですよね。「お前が語るんかい！」ってツッコミを入れました。

――トレスジアに対する印象は？

鈴木　薫子がいるおかげで、ほかの人のキャラクターが際立っている感じがします。彼女がたしなめたり、アドバイスをしたりして、補っていた気がします。

ニルソン　たしかに薫子がいたからこそ、はるかと小夜に目がいったのかもしれないですね。薫子はトレスマジアのお母さんだったのかも。

高梨　薫子は最初から最後までずっと安定感がありました。打撃系なところも好きです。京都弁をしゃべっているから、はんなりしたイメージがあったのですが、戦うときは力技というギャップの意外性が心に刺さりました。

鈴木　修行したいと言い出したのは小夜ですが、薫子が修行をビシバシつけるのもいいですよね。

高梨　その修業によって、小夜が覚醒しましたしね。

鈴木　はるかは正統派な魔法少女で、素直ですし、すごくバランスのいいチームだと思います。

――最後に読者の皆さんへメッセージをお願いします！

ニルソン　日本だけでなく海外にもファンが大勢いる作品なので、第2期があるならぜひ携わりたいです。ファンの皆さんには、ストーリーを楽しみながら、音楽も楽しんで応援していただければ。

鈴木　第2期ぜひやりたいですよね。もっと『まほあこ』の曲を作りたいです。どんな無茶ぶりをされても喜んで参加させていただきます（笑）。

高梨　第2期の楽曲制作を担当したい気持ちは僕も同じかな。第1期の完成したアニメをふまえて作ることができるから、さらにクオリティアップしたものをお届けできる自信があります。僕ら音楽チームも第2期を期待する気持ちは同じです。これからも一緒に応援していきましょう。

第2期があるならさらにクオリティアップした曲を皆さんにお届けします（高梨）

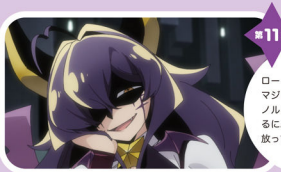
うてなの成長比較表情コレクション

column 4

鈴木、大槻両監督のインタビューで言及されていた、うてなの表情変化。ここでは代表的なものをピックアップして紹介しよう。

まだおどおどしている初期のうてな。ヴェナリータに対しても、未知のものへの怯えがあるように見える

マジアアズールとの一件もあり、うてなの変化が見えた第7話。ヴェナリータとの接し方にも慣れてきた



ロード団を壊滅させたマジアベーゼ。後にエノルミータの総帥になるにふさわしい威厳を放っている

マジアアズールをマッサージしながら興奮するうてな。変身しなくてもこんな表情ができるようになった

魔法少女と対峙するマジアベーゼは、悪の総帥としての顔になっている。一方仲間と一緒のときは、昔のような人見知りな感じも少なく明るい表情になった

Chapter 6

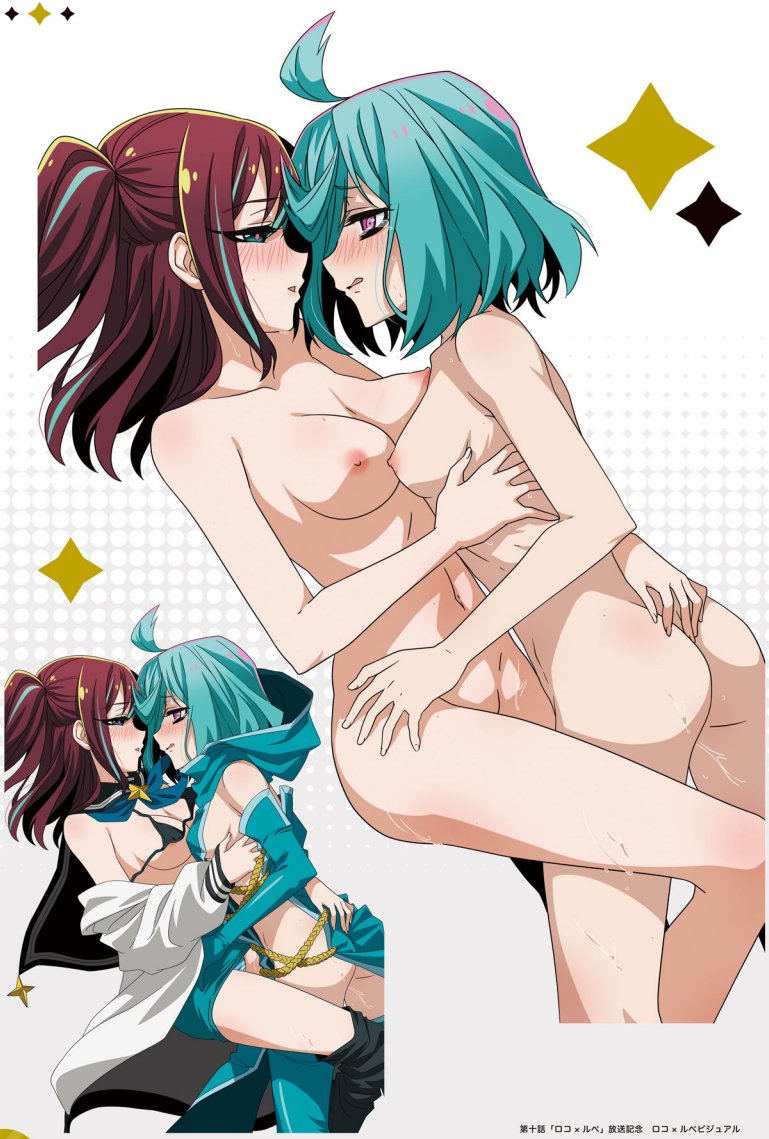
イラストギャラリー

本作のキービジュアルやティザービジュアルに加えて
宣伝版権や雑誌版権も超 BIGサイズで掲載！
素敵なイラストをじっくり堪能して♪

アニメ『魔法少女にあこがれて』ティザービジュアル

アニメ『魔法少女にあこがれて』キービジュアル

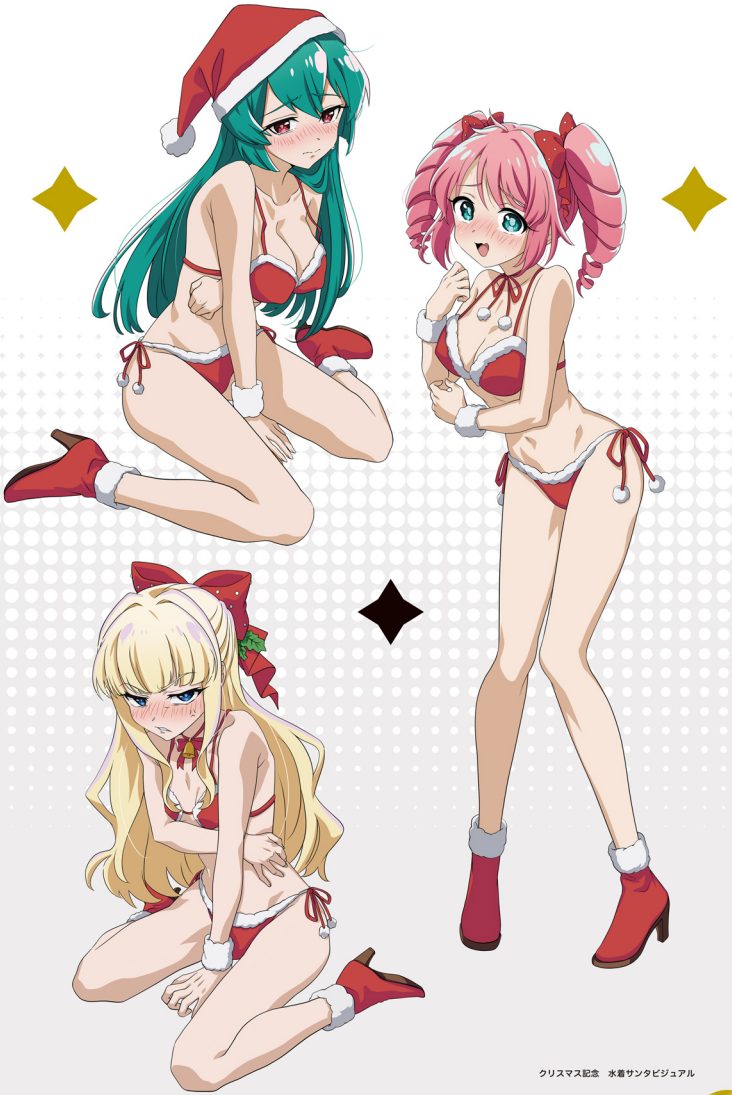
ハロウィン記念ヴィランビジュアル



第十話「ロコ × ルベ」放送記念　ロコ × ルベビジュアル

マジアベーゼ特製脱衣ブロック崩し　マジアマゼンタ Ver.

マジアベーゼ特製脱衣ブロック崩し　レオパルト Ver.



クリスマス記念　水着サンタビジュアル

お正月ビジュアル

バレンタイン記念ビジュアル

メガミマガジン 2024 年 2 月号掲載

メガミマガジン 2024 年 4 月号掲載

メガミマガジン 2024 年 5 月号掲載

メガミマガジン 2024 年 3 月号掲載

ありがとう
ございました
米

✦ 制作スタッフ ✦

装丁・本文デザイン・DTP	クウ
監修・制作協力	魔法少女にあこがれて製作委員会
編集	斉藤優己
	水葉龍弥
校正	佐藤ひかり
編集長	後藤憲司
副編集長	塩見治雄
担当編集	石井 大

✦ アニメ「魔法少女にあこがれて」✦

魔法少女にあこがれている少女・柊うてな。彼女の前に突然現れたのは特別な力をくれるマスコット!?　これでわたしも今日から魔法少女に――!!?　魔法少女VS悪の組織が織烈なSMプレイ(!?)を繰り広げる小野中彰大が描くファンタジックコメディ作品。2024年1月～3月までTV放送され、人気を博した。

アニメ「魔法少女にあこがれて」公式ファンブック

2024年8月11日　初版第1刷発行

編集	MdN編集部
発行人	諸田泰明
発行	株式会社エムディエヌコーポレーション
	〒101-0051　東京都千代田区神田神保町一丁目105番地
	https://books.MdN.co.jp/
発売	株式会社インプレス
	〒101-0051　東京都千代田区神田神保町一丁目105番地
印刷・製本	TOPPANクロレ株式会社

Printed in Japan
© 2024 MdN Corporation. All rights reserved.
©小野中彰大・竹書房／魔法少女にあこがれて製作委員会

本書は、著作権法上の保護を受けています。著作権者および株式会社エムディエヌコーポレーションとの書面による事前の同意なしに、本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転記・転載することは禁止されています。

定価はカバーに表示してあります。

【カスタマーセンター】
造本には万全を期しておりますが、万一、落丁・乱丁などがございましたら、送料小社負担にてお取り替えいたします。
お手数ですが、カスタマーセンターまでご返送ください。

落丁・乱丁本などのご返送先
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町一丁目105番地
株式会社エムディエヌコーポレーション カスタマーセンター　TEL：03-4334-2915

書店・販売店のご注文受付
株式会社インプレス　受注センター　TEL：048-449-8040／FAX：048-449-8041

内容に関するお問い合わせ先
株式会社エムディエヌコーポレーション
カスタマーセンター メール窓口
info@MdN.co.jp

本書の内容に関するご質問は、Eメールのみの受付となります。メールの件名は「アニメ「魔法少女にあこがれて」公式ファンブック質問係」とお書きください。電話やFAX、郵便でのご質問にはお答えできません。ご質問の内容によりましては、しばらくお時間をいただく場合がございます。また、本書の範囲を超えるご質問に関しましてはお答えいたしかねますので、あらかじめご了承ください。

ISBN978-4-295-20671-2　C0076